里見八犬傳 第九輯 七十八

特別
へ13
4304
19

第九輯全竟

曲亭翁口授編

犬傳結局編

本篇二十冊

柳川重信畫
溪齋英泉畫

東都 文溪堂精刊

〈2001-321〉

八犬傳第九輯巻之四十六 簡端附言

本編の題目の先板巻の四十五までの總目録の下に夙く附出せ[illegible]

結局までの趣を知らせまく欲ふ[illegible]所為也。彼六回の當日腹稿の大槩を舉ゲるのみ。其後本編を編るに及びて豫思ひしよりも長くなりぬるとを覺ぼ然ども一巻毎に定數ありて作者の自由に做ひかさければ已とを得ぬ。一回を整置て或は上中下と二回三回に分ちて其數に合せ[illegible]抑一回を整置て二回三回に做さとは唐山の稗史小説にの例るに。只源氏物語に若菜の上下ありとのへども本傳は源語に倣ふ。專唐山の稗史に憑る元自文溪堂の性急也。半冊稿ど畢れば隨て奪ひ去りて淨書剞劂人の手に遞與せ故に後に至りて不都合なとを覺ぼ。先刊刻る所の五巻を發販せんとそいそがるれば這簡端の餘紙にも事情を畧記して其責を塞ぐ而已。

天保十二年辛丑秋長月之吉　蓑笠漁隱

文溪堂藏

南總里見八犬傳第九輯巻四十六第百七十回以下再出總目録

○巻之四十六　第百七十七回

一顆智玉途懲一騎驕將　四個保質反捉両個保質

同巻　附録目　此段不釐回　但有附目已

建柴道場毛野謁守如墓　湯嶋茂林道節破二三隊敵

○巻之四十七上　第百七十八回

有種雪恥復歸郷黨　大水陸濟度衆鬼

○巻之四十七下　附録目　此段不釐回　但有附目已

里見諸將士凱旋稲村城　安房侯博愛賑隣國窮民

○巻之四十八　第百七十九回上

照文歸東房總多福　東西和睦兩國開津

同巻　第百七十九回中　附録目

義成面十二敗將　助友受秘封一匣

○巻之四十九　第百七十九回下　附録目

戍孝全孝別故君　孝嗣仗義辭舊主

○巻之五十　第百八十回上　附録目

一姫一僧死生等栄貴　孝感力藝詠歌賛奇異

同巻　第百八十回中

義成重賞功臣妻八女　初段

同巻　第百八十回下

義成重賞功臣妻八女段後　信隆還任舊城免罪過
○巻之五十一　第百八十勝回上
狐龍貽化石、大蟬脱八行反璧八行傳十世
同巻　附録目　此段不聲回目已但有附目
信隆宗盈古江逢孝嗣　政木大全論辨引和漢
○巻之五十二　第百八十勝回中　附録目
延命寺義成賞牡丹花　富山嵐念戍見遺題歌
○巻之五十三上　第百八十勝回下　附録目
犬士退隱樂天命　諸將得失備其尾
○巻之五十三下　回外剩筆

頭陀話説枕中四十八城　稗史大成本傳二十八年
通計六回分回　附録目共一十五回

先板九輯巻の四十一の簡端に附載の回外剩筆の題目に二十七年とあるは去歳の冬結局大團圓まで編果さまく思ひ故之を作者病眼の障りありて一稔後れしかど今改正して二十八年とせり只是のみ一回と聲て上下或は上中下と二回三回に做ひ分るは上に云る如し聲ぎて一巻一回なるも亦附録目を見せて看官の為に栞に做さんとそ其餘の附録目も其巻の端に出す者は第百八十回の上一姫一僧云々の一回と第百八十勝回の中編と下編云々の二回と是のみ其餘は只回を聲て二回三回に做ものなり。附録目を出さず先案後案同じかるねど首の六回を幹ゆえ附録目を出さず此彼都合せざるもある。看官許し思へとそ。事の所以を識者に示す也

先板第九輯巻之四十一至四十五校閲遺漏再訂抄録

○四十一の巻八丁 後序に于右れいさへいあんさうこんふいでん平山冷燕両婚交傳に作べし 同巻 総目録百七十回の内 冷山平燕両婚合傳 誤字あり宜く地を易く

救氷死将 救の誤字あり 同巻 五丁右 百七十四回の内 射朝寧 暗記の失べ 朝寧 當に小仇と作べし 同巻 六丁右 総目録の内 端像の内 暗記の失べ 里見次麿義竟 義竟當に

百八十勝回孤龍 実竟を作るべ 義竟は 実竟の子なるゆゑ 孤龍の孤は孤の誤字あり 同巻 九丁右 義竟當に

○四十二の巻六丁右 四行 義道 道は通の誤字あり ○四十四の巻四丁左 三行 境 境に作べ 同巻 五丁左 十一行 長金 左の傍訓キトリの誤字あり ○四十五の巻五丁左 一行 紅兵 兵は誤字の誤字 カラ之當に 同巻 五丁左 七行 緑林威力荘忠 荘は壮の誤字あり 同巻 十二丁左 二行 窪に 〻の字を作べ 兵は誤字の誤字 同巻 十四丁左 四行 正儀 誤字礼儀に作べ 是れ等の誤字は殊に甚し 同巻 二十八丁右 連に競 競に作るべ

その餘も字の欠るあれど聊あるは畧を作者去歳の秋より病眼の故に校閲に由り一只婦幼に讀せて是を守るのみ後に同好の指摘に漏もり本編十巻中赤校閲の遺漏あらん全局に終れば其誤を又抄録するとあらば看官宜く正し給へ。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十六

東都 曲亭主人編次

第百七十回

一顆の智玉途に一騎の驕將を懲し

四個の保質反て両個の保質を捉る

却説犬山道節忠與は印東小六明相荒川太郎一郎清英等と共侶に千三百餘の隊兵をもて寄隊水路の總大將扇谷定正の逃るを遠く追蒐るに河崎矢口の間河原に赴逼り又數を破りて既に擒にしたりしに扇谷の忠臣に成る巨田新六郎助友が僅に五百の兵を率て逆安危を計りて路の去向の埋伏差に見れば道節們を遮り禁めて防戰ふ其鋒尖凡庸ならず兵法七書に父道灌の教に仗りて奥義を極め進退よく其度に稱へり寡を以て衆に敵するに足る武勇亦義秀親衡に伯仲せり本事あり且相従ふ隊長に最中隼人生入永六秋

瓠小紋次郎ど。喚做くる。煆煉毎。主を資けく相戰ふ。大刀風烈しかりけれ。左右なく
數ふも破られず。遮莫追隊の頭人ハ則是犬士の一人。名高る犬山忠與ぞ。その折を幻く
舊君先父の怨を復ん果さんと思ふ勢烈火の如く。馬を縱横ふ馳融して。敵を斫る
こと數を知らず。又明相清英も。千変萬化の術を盡して。堅を摧き鋭を劈く。其
隊の雄兵一人として。那進退み由らぬもなし。敵の隊兵ハ二倍せる。多勢の為ふ殺頽さ
れて。助友ぶ頼切る。生入秋瓠ぶ。ふ士卒多く數捕られて。助友も釬の外ふ淺
痍二ケ所負ひぬ。是ぬでも足ぬ思ひけん。百ぬ足ぬ。殘兵を引囲めく。且
戰ひ且退くこと三町許。水際ふ藪茂る枯葦を。推分け踏開けく。裏面ふ入るとも見
る程ふ。道節透さず赶蒐まる。其馬疲労れ跌く。撞と平張倒れど。主を
慌ぎ騎くる。仆ふ。蚓く。曹勒を鮮捨て。傍ふ下ぬ程なるあれど。明相清英隊の兵
們も。推續く赶逼り来て。只這一挙ふ助友を。捕ふせんとて競ふ甲斐なく。

那敵隊准備ふ。這頭の枯葦の那方ふ。隱し措く。快船三艘あり。闘戰
既ふ難義ふ及ぶ。助友ハ殘兵ぬと共ふ其船ふ乘りそ。ふ漕ひ汀潜を
離れく。前面の岸ふ退くを。道節明相清英ぬハ夜視ふ風く透し覗て。他よく。
と叫ぶのを。赶ぬく。ふ船ふけれ。矢口の津へ泝る。敵の往方を目送りく。开ぶ中ふ道
節ハ憶ぶ。太息吻く。舊の河原へ退て。士卒を奬を聲高ふ。ぬれ兵毎助
友奴ハ隊より。活路造りて逃亡れぬ。那奴ハ我志を敵ふ。憶よふ定正く。主
從僅ふ二三騎のみ。ぬ矢口を渡り果べくもあらず。我馬疲労れて斃れ。其
頭ふ敵の兵。乘る馬あらむ。索ひて。蚓く。牽のそ来よとく。せぬと。焦躁叫ぶを。
明相清英左右より。急よ推禁めく。且諫るぬ。犬山大人叫ぶ。弱冠ぬ。我們ぶ
詞斉く賢達て意見を。舒るハ烏滸ぶ。そ。釋迦よ。説經孔子ふ。語道の諺ふ
似てハ。ども既ふ館の御軍令ふ。逃敵ハ追棄よとある。御條目を。忘れぬ。狡定正

主の大人の為に舊君先考の仇へも既に春高畧中。那人の頭鎧を射く落して怨を復しめ奴に然るを又今日は其子朝寧を遠箭に被て射の事十二分の首尾なるに飽まで敵地に深入を夜を犯して還るとを忘れ甚麽ぞ。言憚ふべども只是千慮の一失欲三省再思まく欲しと詞齊く論ずを道節聞て合笑て現られて其理ある実に今日の鬪戰は是両館の奉為也。我私の所以なるねども定正の敵の魁首を今根を断て葉を枯さば後に又患を做さん然ば館の御軍令は仁義を旨とまゐぐ。一方に將る者は詔勅を用ひざる所あり。あるとも曩に御軍令と出されし時我又館に請ひて倭と議し稟ずるを仁の一字に泥む那宋襄の故轍を踏まん世の胡意に叶ふんのみ和殿等の意見も亦金玉に今夜を犯して敵地に入りて人馬の疲労を思ひ又助友に相似る敵の援兵出もあば後悔其里に達ざらん鄙諺に云ふ山嵐に子

浅瀬を教るとは我上に云たりれとらひつて呵々と笑へば明相清英欺ひて弱冠なる我れ等が愚意を稟一試に海容あれ公私の幸に還らせ給へと道節苦く然ばとよ我情に妙真音音曳を單に節は保質に捕入られて五十子の城に在るべし然るを定正城に還らば他等は必殺されん且河崎まで退く。蛛間諜児をして那里の虚実を覘ふに羽立の早天に椎寄く徑に城を攻落して四個の女子を救ひ給へるべしとの義をあるべしとの明相清英再説に及ばず諾ひ。俱に士卒を従て灰に見る八日の月の影を燭に河崎邊る故の馬頭上に退く程に馬淵場九郎の残黨を首領に那這の俠客野武士の毎里見の德を慕ふ者招ざるに走集て皆道節の隊に附し一夜の間に道節の軍威いよ壮ひ。従兵新舊に合せて三千餘名に做りけり。案下某生再説扇谷定正の犬山道節に追逼られて既に必死の窮難做りしを曩に憎しと思ひる巨田新

六郎助友が這敗軍を量いく其去向さへ覘い知けん。折よく那隊ハ極れて細魚の網を漏る像。両敵の勝負を見もとゞめ。身ハ只大石憲儀と僅ハ二騎いそぐ前岸へ渡さんとく。矢口を投くいそぐ程ハ既ゆて日ハ暮ち。幽け江月を心當ハ件の津ハ来ハけるに。這頭ハ船ハ見えや。喚べども呼べども応をせざれが。憲儀いとく焦燥てやれ綿児。若那里ハ在る。目今上の還らぬのいね疾々船を寄せぬやと。連りハ鳴る聲と共ハ背ハ響く數箇の銃砲憶ぎ耳を串れく。吐嗟と叫ぶ定正憲儀馬ぎ怯く跳り狂ひを。主従急ハ騎駐ゆく。倶ハ見ゆる程ハもあらず。推捕篭る一隊の敵兵四下ハ響く聲高ハ定正逃るとも路いる。軍師大阪の軍配ハ従ぬ。是ハ一隊の頭人る。小湊目堅宗従軍ハ小頭人鮠内葉四郎猪岡拔八ハ在り。自殺して首を遮與ぬ然らぬ人馬共倡ハ勝ばく安房へ奉ぬと甚麼ぬ。と罵責る二方例ハ空銃の音ぎ劇

小湊初ハ
小水ハ作
小水ハ小湊
同義同訓
ハ前板
偏
ハ追

聲と戰して。色ハ色ハ追隊の頭人找ハ大石憲儀と寡君みづから宜ハ笑ハ一要時々々と請制ゆく。却定正ハ向ひて。詞急迫く唱く程ハ。小湊目ハ隊ハ兵を推制め従く。找ハ岩く左見右見て。伝と憲儀ハ向ひて和殿ハ主従ハの期ハ及びて又何事をハいまゝるやと。問へば憲儀然ハとハ古よりて常言ハ窮鳥懐ハ入るとハ獣夫ハ捉らぬとハ思ハ違ひ今日の敗軍両二番の虎口を脱れく和殿の獲ハ世ハ恥又是より甚しハ恥ハる。我今ハ自殺して首を和殿ハ捕ぶ。ハく寡君を饒れかしとハを定正推禁ぬハそうハ然らるをせん憲儀ハ我愛臣ハ免れくハ共倡ハ左ハ右ハ。とのべけれ。とのべて憲儀感謝ハ堪ぬ跪く遠く又只目ハ向ひてハ。嘲小湊主今の言を聞れ。ぬん願ハ佛眼佛意をハく。ハで見遣ぬれかと陪話るを目ハ冷笑ひて。開ハ又武士ハ似げるぬ。抑這回の闘戰ハ寡君義成の本意ハ。管領非義の大兵を。

安房下總を水陸より攻伐るゝ急なれば。身の危を防ん為ふ軍師亂智と。防禦使忠與礼儀を以て水路の勝負を試まふ天道の順を祐けて不義の驕慢を罪ふ所以也。小兵をもて大敵ふ克ことを得てあふ至れり然るを義成戰に負ては馬前ふ命を乞ふとも曾領饒ゆるんや。人も身も思ふ所を阿容る言を孰か听ぐべき。遮莫義成が仁君ゝ安房ゝ俱ーまるとも御命ふ及ぶくもあらば疾々立せゆかれと。譴促して饒さば。定正竟ふ脫る路なく。敵ふ一霎時の暇を請ゝ腹を斫らんと坐を占るを。憲儀急ふ推禁めて又呻ぶく領せて又復目ふ向ひさらふやう。既ふ和殿の稱ふ如く。安房侯義成実ふ仁君なるべ人を殺しと已を利ふ豈狹びるんや。ふをもて。寡君みづから頭髮を剪て首級ふ代へと宣へりその気を美容ゆひねかと。口説を定正喚禁めて。ゑよ憲儀又よく思へ。我曾領の大職ふ在りながら。然しも命の惜りゝそ。頭髮を剪て敵ふ遞與さば上い先祖を辱めて下い兒孫ふ

汚名を傳る。恥の上の恥をそ。只潔く死ふ不如。と渋れが憲儀聲を顰て。君忘れゆ。欲昔建武二年冬十月。等持院尊氏將軍鎌倉ふ在をり。時大塔宮の御事よりそ。後醍醐天皇逆鱗甚しく。義貞主を討隊の總大將ふ做されて。官軍寡く發向ふと。少をりゝ等持院殿驚ふ怕れて。逆意なふ證據ふとそ。みづから頭髮を剪ゆ。錦小路殿直義並ふ當家の御先祖上杉憲顯切ふ諫ゆ。只得思ひ入さゆ。貌姑峯竹下を官軍と數る破りゆ。竟ふ御運を開ゆ。偽て今の柳營義尚ふ至らゆふ。然ば其比那御頭髮の短ふを紛はそ近習外樣の武士まも。故意頭髮を短くそ。咸其髮を剃ざりと。一束剪と唱へる風俗今ふ改めず。徳る先蹤ふ非如今の難義の為ふ頭髮を剪せゆふとも。御恥辱ふ似く恥辱ふあらず。夫大功ふ細謹を顧ず大礼ふ小讓を弊せざるゆ。古語あるを。何ぞや思召さらけん。只任用せゆかれと。說諭しゝ目ふ向ひく。

文溪堂藏

請ふと始め異ならねば目い頭を敵けく。さまでは悲を請るを聴き忍稠腹を斫せば。我君仁義を旨とあるの軍令は悖るに似うとぞ葉四郎猿八も怖ぎ左右より找を出く。俱に目を諫くいまう小湊主物数ならぬ卑職なれど賢達て云云と意見い烏滸がましくいへども仁も不仁も敵ふてそよりも他ば自殺は嫌ひあらば生拘りて牽のせん。今ゆう斗思まるとうとひとつ蝕く身を起して走り蒐らまく欲せしを。目い饒さぬ喚禁めく。座よ卒介まる猨岡艶内ばの舉い軍師犬阪主の先見あり。我其教に依らまく欲も揣るい要るに白ふてそと諭して憲儀は答るまう管領ばらう頭髪を前刃て首級に代んとある情願い我君仁慈の旨は稱へば其義い柱て饒まべ。然ども正しく照験るくてい我私は似く影護らう故は和殿をわてせんとぞ憲儀らう笑て开い欺しぬるまう我身あらぎい孰ら又寡君は俱と投るは至らん我身も髪皆剃倉らまく法師はるとも斃らぎいらでとの義を饒てよいらでくと諍返まを目い听ふを頭を掉て否とよ。定正主い我士卒をして送らえ。糠を舐らて糟は及ばを。慾は涯るるを着を慌ても異議せば目は物見せん。艶内い定正主の頭髪を夙く受倉るれ。猨岡い這大石を牽立ぎを。とのそぎまる事の勢已べらぎる。定正連ては嘆息まる。やそら兜を脱垂て引抜く七首倉を直しら。頭髪を弗と剪垂て遞與を目い受倉て。隨即艶内葉四郎は。雑兵一百名を分ち授けく。ゆく定正の送とを。當下葉四郎い定正の佩し両刀を。請ゆ倉て身は着さを。ぎ又猨岡猿八は。憲儀の両刀甲冑を剥脱倉て腰索被て牽立れば小湊目い葉四郎を。警めらるるまく。隊の雑兵は分捕の馬を牽ぎ主共侶は追立々々河崎るる馬頭上を投て還るを程は長き河原は風寒き八日の月い没果て路間けれぞ蕩火を作らしう。振照さまそ。連ふ去向をいたぎけり。介程は定正い大石憲儀の意見は儘して恥を忍びつ阿容々々と。頭髪を剪りて敵は遞與しう。辛く命を免れれども。

尚俘囚ゐ異ゐ〻ぢ。身ゐ寸鐵ども帶ゐとゐく。そゞ仮馬ゐ乘せられて。敵の小頭人艶内
葉四郎が。一隊の士卒ゐ送られて。津と索ねてゆく程ゐ葉四郎も亦隊の兵ゐ蕉火殺
作らせく。島夜を照せる火光を見てや。下流より忽焉と流れ來る快船あり。其船三
四艘ゐるべし。一艘毎ゐ環甲ゐる武者。二三十名ゐ乘て。或い艣を推し。竿を使ふ。
波の上自由ゐりけん。先ゐ找て。船の内より。忽地ゐ聲をあげて。其里ゐ西せめの騎馬の一
人い我君扇谷殿ゐをつまぎや。徒ゐの巨田薪六郎助友ゆくゆくと名告ゐとち
ゆく定正い歡しきゐ恥を思ひ。馬を駐め見ゐく。原来助友差ゐ〻狹我を
汝の援ゐよりて。那犬山道節の囲を辛く免れて。大石憲儀と僅ゐ二騎來ゐ路ゆ
又敵ゆ死と告るを聞て。助友い躰く船より立出く。主の身邊ゐ來ゐる程ゐ後れ
船ゐ皆漕着て。岸ゐ寄りて。扣て在り。只助友と同船ゐる士卒のみ相從て。主の
後方ゐ侍りしと。定正見て。面るけゆやとて。馬より下立く。程ゐ石ゐ尻を掛れば艶

内葉四郎と隊の兵ゐ。ち囲てを四維列れる。當下定正い又助友ゐ向ひて。
薪六郎。今ゆ告るい面伏られども。我那里見の伏兵ゐる。小溪目堅宗とちらゐ。數百の
敵ゐ捕稠られて。免るべくもあらぬしと。大石憲儀の意見ゐよりて。頭髻を剪て堅宗ゐ
取せ。且憲儀い我ゐ代りて。敵ゐ擒ゐせれしめんと。那堅宗い。友く好意ある者ゆく。
我ゐ從者ゐるを憐く。汝が一隊の兵百名許とりく。我を送らせそゐ造れ。曩裏ゐ
汝の諫めを聞く。我身單ゐるまでゐヨメく士卒を喪ひしを。百千番悔て及ぶ。汝い
亦何ゐよりて。我が這河原ゐ來ゐを知りて。那犬山道節のヨメ兵を防ぎて。身い恙ゐく。
又逢ふを汝て我を迎る。忠誠感ぜゐふ。あまりあり。賞もべしくと。只顧恙く已ざり
ゐを。助友い嘆嘆ゐ堪ぎ。愀然として答ゐる。既ゐ去の期ゐ至りて。臣ども。前言不
幸ゆて。當りしを。又ゐ〻べくば。臣ども。今宵ゐ地ゐ在りて。好來ゐる敵を防ぎ。別ゐ
仔細もゐ。今日の順風の異ゐれば。柴浦へ斜ゐ君退せゐ。時必や河崎へ御船と

寄せぬべけれと思慮りつ一旦は道節が雄兵を防ぎ拒くいへども里見の軍師大阪
毛野も隊ふの義を思ひけん他先へ拒く伏兵を這頭ふ在せさりければ竟ふ臣等が援
兵は徒事ふ做りぬるを今義る悔しさよ然るを大石憲儀は一騎も従ひまつる
とも君辱めらるゝとは臣死すとは苦節を思つゞ阿容て髻を前ぜまつて那身は
敵ふ向ひて去れは言語ふ絶する僻事なるを今論ずるも亦益る他は左もあれ右も
あれ悉もまさで拜見は有ぐ死まで本意ふ稱ふく欽しくいふれと答て傍る敵兵の
焦火の光ふ就て名告を求て鏡内兼四郎が一個の事の欽びを舒べ兼四郎は一個の
雑兵ふ持せる定正の両刀を助友ふ遞與して云やう汝は知りぬいむや寡君義
成は仁義を宗とせ。ぬ。大士の毎ゆゑ物數ふ及我隊長小溪目堅宗ふ
至るまで皆軍令ふ従ふて殺伐をもて功とせざるの故ふ虜ふまべ敵の總大將を
送りて去れるゑ。の他は亮査ゆひとりべ助友義ふる色あり少選あて

答ふやう。のりて処然もあるべし。里見殿君臣の賢あて仁心ふ及ぶもあるねども。敵
藩ふも人ふ死よあらば壁言ふ我父道灌の如ふ当家の大事であるべう今番の敗を
豫ふ知りて糟屋ふ屏居して諫難しを甚麽ぞやと論ずる者もあるべし。遮莫
世の常言ふいふぞや良月明るうまく欲すれば浮雲是を掩ひ蕙蘭繁らまく欲を
れば秋風是を破れり況や船中流ふ横りて渡ふ由もふ死者をや縦犯し諫るとも。
大厦の將ふ傾んとする死ふ一木のよく拄べふあらぬ。和殿安房へ久り去らば黒日
のごく我與ふ大阪大山諸大士ふ。ふの義を言傳ゆひねか。又小溪生ふ今宵の好
意を感謝ふ堪ぎとのいちくを宜く心ふ銘ひてよとのべ定正も見久りて詞短く労
ふ。葉四郎は唯々とぞ。ふ言葉ふて退死て隊の兵を領て河崎ふる馬頭上を
投て還りぬる。火の光りの見えぎるまで助友遥ふ目送りて卒とのひて両刀を
躰く主君ふ向ふ。れば定正は面ふ喜ぶ。合ふ。腰ふ帯て昏よ薪六郎折

よく来る汝の船もく蝨く前岸へうち渡りね五十子の城ふ還りて意表を磬さん。
爲よとうくとんそぐせば助友答く否五十子の御城ハ敵既ふ攻捕りて入替りゆひけめ空
くふ那八犬士ハ一個も兵法未煉の者ゑ。就中犬阪毛野ハ智術ふ長ずるを以て
料ゑ衢ふ犬山道節ハ君を迂きり毛野ハ徑ふ衆艦を柴浦ふ漕よせて五十子を
畧りゆひけんあらんゑ御留守よ伝ゑる。其田馭蘭二ゑどがいふ。よく他を防ぐ
ゆん水路ふ自家の敗軍を耳怯して逃去なるあどのうん臣ゑが隊兵今も猶一千
もいで。後攻をもべけれども衢ふ犬山道節のヨヌ勢の兵と防ぎ戦ひ時士卒を夏
く數せらぶ思ふのをゆく其甲斐ゑ。且河鯉の城ふ造らせあ。徒而敵の進退と那
里の安危を問定やく。徐ふ五十子へ還らるあで。殊ゑ御失ゑるふべ。衢ふ臣ゑハ悄
地ふ遠見の士卒を遣して君の脱れ来ゆふべ道路を覘せ。ふよりて夙く知ゆ初河
崎ゆ憲儀ゑが那牛馬買賣ゑる馬幾疋を奪合せるふより。先民们起

立て此難義ふ及せゆる。若那暴微りせば。道節ゑ追撃ゑるゑく欲士ふ
ゑ。時後れて及ぶべ。然らば臣ゑが援兵のそ敵の伏兵小溪们を撃破り追
走らせて。必や辱ふ逢せゑるべ。今ハ千萬ゆとも益ゑ。卒河鯉の城ふ
倶ーまゑんゑの誅ふ儘せゆゑやと言丁寧ふ諫れば。定正ハいくまもく恥く亟ゑ
答ゆ。姑且ーてゆやう。是義ゑ我思ひ惑て汝の親道灌を久く遠離ふ家
のをるゑば汝の諫を听ぎてゑの大敗ふ及ぶ。今日悉戦
再度の送迎現我家の范蠡ゑる哉今より志を更めて賢ふ親を任を退け。
會稽の恥を雪めゆく欲ゆ左ゆ右ゆ従ざんや河鯉へとゆくべ。ゑとゆふ助友鈦
ひ義く。恥て定正を請立せつ。其馬ゑゆ船ふ乗せて隊兵と倶ふ前岸へ渡りて
又定正を馬ふ乗て那身ゆ倶ふ一定の送れる馬ふうち跨つ。且隊の兵を相従せて
通霄路次をのぞけり。休題再説ゑの日十二月八日の暁天ふ烈婦音音ハ料らぬ

那大茂林の澳邊をそ。仁田山晋六武佐の柴薪舩を燔毀せし時。那身ハ又蝕く大洋ふ跳入りて燬を免れて。浮つ沈つ泅ぐ程ふ音音ハ武藏の川畔をそ成長さふ甲斐ありて。水戲自得の老婦ふあれば。約莫一里有餘ある。波瀾を凌ぎて辛くして大茂林濱ふ就しかど。大寒の日ふ潮水ふ没て。且風波ふ揉しだ身ハ冷る脚疲労果て。我ゆゆしく。倣りふけん岳ふ携りて身を起しをやくと僅ふ両三歩。憶む撲地と轉輾ひて。そ。開ぎ。息ハ絶ふけり。浩る処ふ這浦邊ある漁戸們が。今日ある那水戰の勝敗を。忌許なく思ふ。あるん。西三人立出て。澳の方を眺耳て。立在むと。半晌許。憶ぎも磯松の邊りふ。音音が臥ふを見出て。訝りて。皆立ちて。又よく見るふ。六十有餘の老婦をそ。全身潮水ふ濡れば。原来破舩の浮死骸の。今朝の這暴波ふ打揚られる者ある歟とて。推流さん。左右よりあるを。合りて曳起ふ。動脈猶ある似て。身も亦温ければ。原来いまだ死絶ざりけり。疾喚活と。聲を合して。喚りて。胸を拷て。介抱ふ術を盡す程ふ。音音ハオふ息出て。眼を睜りて。動くをば。ものいふことを得ざれば。漁戸們いうも。閑れぞ。且憐且勦りて。躯て。苫屋ふ吊をそ。地炕の邊ふ臥をそ。隣人們ハ復とを来ゆそ。已が宿所ふ還りけり。低而家主の女房が。屢柴を折焼て。那身を温めて。両三時剋。且貯蔵の清心丹を。薦る程ふ。音音ハやう。及く我ふ復りて。愕然として醒る如く。身を起して。膝折布ふ。主人夫婦ふ向ひて。のたまふ。料ら。ものける御好意をそ。一旦死しる我身をして。今再生の歎びあり。ものたる御恩を。侍るかと。謝れば。主人ハ女房と共ふ合笑て。原来本腹ゆきて。狭。抑。媼ハ那里の人をと。問へば。答く。然りとなりよ。応難つ。多くふ。奴家ハ浦河ある漁夫の母をそ侍る。今日ハ安房の洲崎の澳をそ。水戰ある。ゆゆしく。上總へ急要ある故ふ。未明ふ舩を出さそて。傭舵子と。漕せふ。猛可ふ風波吹荒れて。流さること。幾里ある。這頭の浦ふ。寄せ。時哀しや。舩ハ岩ふ碎けて。舵工と。我身ハ暴波の。底ともりをば陷入りしふ。我身ハ素是女良の蜑戸をそ。少かりし

時ハ千仞の海の底ふ届りて貝採枝を生活ふせ甲斐ふ沈む元自溺ともせず。命を涯りふ暴波を凌ぐ泅ぐと幾町ありけん。稍這浦ふ泅ぎ着く磯ふ登と思ひしのミ开が儘息ハ絶ふけん其後の事を知ざりと虚談実言ハ交て皆を驚ろ聞く主人夫婦ハ然もあらんと共侶ふハ領くのミ疑ふ言語齊一答るやう。現少かりし時延戸ふ行ぎハ其船破れ身ハ入水き。暴波今日の風波と変ぜ泅ぐ事と為ども毫も潮水を呑ざれバこそ。甦生りて恙もなけれ。郷国ふ媼れハ那隨ふ這頭で命終ふ地方の厄會ふ逢ふ。恁だろ芽出たふ。今日ハ扇谷の管領様の安房の里見を攻伐ふ水戰ある故ふ這頭の船を咸徴れ。漁猟枝の便着ふく比首屏居て在ふ。然ると鄙ふ憶ふく那里ふ媼れの仆ふと見出たれども彼ハ我屋ふ航て早ふ容れて看病しも是一河の流を汲と一樹の其蔭ふ寓ふ似ふ。咱ふハ這大茂林ふ浮屠家海苔七と唤ふ。老網漁で侍るか。是を一期の縁ふして這頭へ又来ふ訪せの人渋茶ふともあらせんと夫婦迭ふ真実立く飯を煮復ふ。餐と薦る東道態ふ音音ハ欽大方ふ。懐ふ考ふ長財嚢を解拂ふ貯禄の方金一片を取り出ふ。聊ふ物れども命拾ふ歓ふ。折乾とも見ねとふ傷ふ措れる。敗方盆ふ載て卒とだろふ取られ。主人夫婦ハ共ふ合笑ふ。恁思ふけも。恁だろの宿を乞れバとく是賜ふて何ふせんと推辭むと音音ふ云云と薦めて敢餐れバ海苔七ハ盃ふ受て戴く。金子を女房ふ遞與ふけ。左右ふる程ふ下哺ふ倣ふ。海苔七ハ音音ふ。媼れハ浦河へ還ふ。又上總へ出ふ。今日の夕ふハ成ふ。今宵ハ這里ふ明ふ。身昔年ハ延戸ふ行ぎて一里有餘の暴波路を泅ぎて溺れざりけれバ腹病患ふ潮毒を宿ふ。とも。けふハ宿ふ。とのハ亦女房も倶ふ留る態態ふ音音ハ感謝ふ

大茂林
濱の
海苔七
音と音ねを
救ふ
女房
七

堪ぎそへ泰く往るか。尚暮ゆへ程も往らん。奴家と倶ふ入水せ。傭舵工へらふ做りけん其亡骸の這濱邊ふ流寓とゆるぞや。奴家へ恁幸ひふ身へ温り地炕火ゆく。帯さへ衣の乾きるが其頭へ出て見く来てんとらひ瞞めて主人の妻ふ脚半草履借受く。脚ふ引掛く立出れば海苔七も廿房も必蝕く来きよ晡媼れと唱ふ西聲を岑捨く歩をとゆめく出ふけり。恁而立音音へ單身殘る夕陽ふ片光明る澳を眺めつ安らぬ肚の裏ふ思ふやう。約莫今日の水戰へ大阪主の謀らひ如く寄隊へ反へ火攻せられて。衂ふ成て敗りふけゆ。然ども敵の總大將定正主へ倘免れて城ふ還らば怒ふ乗じて三個の保質妙真刀自と曳る單命へ殺されん我身今幸ふ再生る甲斐ありて那里ふ潜入とを沼そらく三個を極金る。便直欲得と胸ふ思ども。尚思難て。計の出る所を知らぎへふせまり。とだるふ立も得去らぐ在りけ程ふ洲崎の方より流れ来る。寄隊の殘船一艘ありけり。是則別艦ゆるぞ。曩ふ寄隊の副將ゆる。上杉朝寧の隊の從兵へ。他へ洲崎の閑戰敗れて朝寧へ火山道節ふ射く落され又那毎へ印東明相荒川清英ゆふ撃ふ捕られ其他へ皆降アーと道節允さぞ。結扭らせて命を助て椎流さる其艦をそ。ありけれ殘兵約莫三四十人あり。他へ今料らぞも五十子近へ這浦ふ艦の寄りーを欲べども身へ背ふ結扭られて皆重索を掛られる。這容ふて阿容々々と城ふ向へさぞ。艦より出も難らーふ一個の老媼の這水際ふ立在けると見出ーゆ。両三個の老兵へ最面ふ向ふ聲をうけそ。屋ふ晡媼ふよ泄へ這頭の者ゆべ。我へ今日の水戰敗へ敵の為ふ生拘られーと辛く来て脱れ来れ。これも皆這儘老。五十子の大城へ還ぎ。ぎらぐ這索を解てよと凍めば音音へ見久りて。ゆを料らぞる便宜を得ん。と思ふ心を色ふへ出さぞ。艦の傍へ人立寄りて左見右見て舎笑て。汗を解とへ解べれども。倘連累とせられゆる出ゆもへば爭何へ出と。渋るを大家ゆへ。否よ何

ら。その崇あん。今我们が這素と。解くを上の忠節あれば異日賞禄を賜るべし。各疑
いで解けねか。なほとくと忘れども。音音の胡意従ふ。異日の賞禄を何ふせん。然
らば奴家も情願あり。獨女と五十子の大城の奥へ炊妾ふ。まるうせるあれば他ぐ上心
許なし。奴家も倶して兎角ぐ。今其索を解き猶らんとふを老兵ども打て聞て。開き亦
要ある事なり。敗軍の我们が老女と倶してられんや。と推辭むを音音は冷笑ひて。
あらば外を憑ぬね。奴家は退らん。然らばよとのひ捨て立去らんとすを。大家ヤヤと喚
停て。開き短慮を領て行んなほ疾せよ。とのひ求ぬ。音音は猶も拒言せず。艦の纜
を延て汀渚の松ふ結び留れば。殘兵ども動揺々々と。艦より出て立つ程ふ音音は
先両三個の索を解捨れば。解れ老兵を伝て甲を解けば。亦解れつ解け
つ各各両を自由ふ。なりけり。登時又老兵ども。約束あれば這媼を伴ふ
あるべくなれば。然れども這儘ふして。倶しと白ば入ることを許さるべくば。艦内の戰盆肱眉脛

衣あり。那の男装させて黄氏旨時ふ。紛らわく。倶ふ大城ふ入るべく看外ける者
なるを。べとふを大家諾るひく。恥て音音ふ身甲させて且戰盆を戴せた。後より
見つ前より見つ。逸雄々々。武者態る哉物足らざるい我们も。大刀器械を敵ふ
捕られて腰空しを。何ぞ只盆識と戰慣を照驗ふ。名告をせば必城門を
開れんいたぶくと。散動めたく。音音を後方ふ立せて。五十子を投て走りけり。有徒一
程ふ。大坂毛野胤智ふ洲崎の奥の水戰ふ敵船ヨく火攻して。躬方全勝るりけれ。
猶九十子の城を拔て。妙真曳る單節を極ひ。食んと逸早く。其隊の頭人小森但
一郎高宗。千代九圖書介豊俊。浦安牛助友勝。木曽三介季元。ら。三千の雄兵
一百餘の快船を。順風ふ儘漕走らせる。波上自由ふ。疾と。宛月の兎の流を逐ふ異
るるれば下。晡ふ。時候。大茂林浦ふ来みければ。船を水際へ就さ。見れば磯松ふ維
まる。一箇の戰艦あり。原来那豕火を免れる敵兵。蝕く逃去りて這里より城へ還り。

と思ひて佐と前面に見れば那殘兵ゆゑあらんぞ。三四十個の仂武者毎五十子の方へ集ひ寄る。他ども這艦より出て城へ敗軍を告んとそ急ぐらんと猜しつ高宗豊俊を招き寄て意衷を示して計策を授れば高宗豊俊ころを得て其隊の雄兵二十名と俱に那艦に乘措れる敵の笠識と戰幟を手手に奪ひて身に着て岸に登りて那殘兵の後を跟て行程に既て黄昏なり。且朝霞の殘兵們去向を急ぎ見る者なく我衆ばかりに交る敵ありとも知ざりけり。却説件の殘兵們俱に五十子の城に来り正門の橋に立集合て聲高やかに喚るやう。什麼御内人達ぞ。凶さん是は安房の水戰敗れて辛して脱れ来る副將軍[輒率]の御隊の兵なり。某甲某乙等は火急の注進にぞ蝕く御城門を開けよと異口同音に呼ばれば這里を守る城兵們いかに驚きて狹隙より其毎の形狀を差覗くに御方の戰幟に笠識を身に帶ざる者もなく且其名告る姓名も皆是相識る同士なれば黄昏なれども暮も

孤疑せざ。這隊の頭人韮見利金太士卒に下知して正門なる角門を開かれば那殘兵們いかにも音音も俱に内に入る背に従ふ高宗豊俊隊の二十個の雄兵も推續き稠入りて曛昏なれば誰も他も外なる者ぞなりける。當下件の殘兵們は老兵を前に立せて跪ける中に老兵なれば面ぶに利金太なれば高ひて。ぞ歩あれば思ふも似ず今日の敗戰御方は反て衆艦を敵に火攻せられ。誰か一人も免るべき副將軍[里見]の防禦使大山道節に射て落されて千尋の水底に淪と沒然れば那隊の勇士なれば猛火に焼れ水に溺れ然ても死ば敷れ生拘られて免るる者あるとなりー。開が中に小可毎に堅を推て鋭を劈て大刀器械も皆打折られて免るるもあるなりー。なるべ艦の漕退けく惜く命を有りーいかに。の義を御留守達に告禀さんと思へば只副將軍の館に在りて火水の為に亡びー欲斃されぬー欲知るるもなれば敵に必勝に乘りて逃るを赶て長く驅て當城に推寄るべー。御用心あれーと詞を追

あく異口同様ふ示合せ。已ゞ非ゞ飾りて。俱ふ許れば。城兵等が驚ゞ怪ゞ。葉見
利金太胆ゞ渡ゝ。睨むが像く眼を睜りて。そゝ安ゝ成事ふこそあれ。疾其田殿ゝ告
知ゝね。諸門の隊配り要緊ゝ。とのふ士卒等心得て。走りて二の城門三の城門。諸
隊ふ急ゞ告ゝ。當城ゞ與り守る。其田馭蘭二圓通等。孰ゝ騒噪ざゝん。ゞゞ敵の
旗ゞも不見ゞ。落支度ゞ。ゞゞ者のゝゝ。馭蘭二罵励して。其隊の小頭人。共
伴ふ出て隊配ゞ。程ふ城中猛可ふ放ゞ者あり。守屋より其火發りて。又蜘く
城樓ふ燃移る。烟裏ふ敵兵ゝ。其兵幾人ゞ知ゞ。胡歩乱行ゞ城兵。中ゝふ儘せて。斫仆ゞ刀尖鋭く。聲高ゞふ若。彼知ゞ。里見の軍師。大阪毛野が
先鋒の頭人。小森高宗。十代丸豊俊。ゝふ在り。ゝふ在りと。名告被け。相吸入り。
四下ゞ靡ゞ。大刀風ふ暗ゝ。烏ゝ。城兵等ハ敵のヨヲ少ゞ知ゞ。右往左往。逃迷
て。敷ゝ者ゞヨヲ。ゝ。當下里見の士卒。彼ゝ正門ゞ。守屋の邊ふ

敷ゝ。馬の絆ゞ斫断々々。馬三三頭。牽出して。高宗豊俊ふ跨ゞ。残る馬ゝ
畑ふ怕れて。正門の橋ゞ。墓直ふ渡して。遠く馳去れば。城兵ゝ。度ゞ失ゞ。頽れ蒐
ゝ正門ゝ。逃ゞ者ヨヲ。這隊ゝ。遂ふ敗られ。浩る処ふ。大阪毛野。渕智ハ。浦安
友勝。木曽李元と。共伴ふ。三千有餘の隊兵ゝ。ゝ。那残兵の迹ゞ。限ゝ。五十子の城ふ
近づく程ふ。城内猛可ふ。恩劇く。忽馬ゝ。放馬二
三頭。這方ゞ。投て。馳来ゞ。毛野ゝ。又蜘く。先鋒の士卒ふ。下知して。馬ゞ。捉駐ゞ。
躰て。其身と。友勝李元等の騎馬ふ。諸兵ゝ。勸ゞ。短兵急ふ。推寄て。城の正門ふ
乗入れば。葉見利金太隊の兵。毎ゞ。防ゞふ。由ゝ。第二の城門ふ。ゞ。敵ゞ。柱へ。是
ゝ。先ふ烈婦音音ハ。那残兵ふ。ゝ。交りて。輒く。城ふ入り。時日ハ既ふ暮れ。射方の
頭人。高宗豊俊。ゝ。二十個の隊兵ゞ。領て。紛れ入り。ゝ。知ゞ。ゝ。妙真。ゝ。單
節の在処ゞ。ゝ。探して。極ゝ。ゞ。便ゝ。欲得と。逸早く。紛れて。深く。潜び入て。這里。狭那里

欲と索る程に城兵猛可に罵譟ぞ。敵既に逆寄して正門ハ剛才攻捕られたり那頭人ハ名に呼れたる安房の軍師大阪ぞと。然でハ這城保がたけん宅春を擧して疾退らずやと叫びて東西へ走る者のミなりければ言問ふべくもあらざりける。音音ハ奥へ紛れ入る程に給事の女房等が良賤尊卑の差別なく外面投て惑ひ走るを某る蔽様と見ながら遣違して猶奥深く入る途に迷する眉尖刀一挺あり是究竟と拿揚て定正の挾みて立ち奥の間に男女争ふ聲ありける原るに這城内に河堀殿と喚做まつる是ハ継母ありけり。年齢ハ六十許なるべし。丈式部少輔朝寧の妻とて親姑姫と喚做まつりて此京師なる某甲中納言の息女なりしを定正近曽乞下して朝寧が妻にせり。今茲ハ十七八にもやなりけむ。間常に深窓に侍て立とゐにハ蘭奢衣裳に薫り臥てハ氈毹を襲て冬の夜も猶暖く夏の日も將涼しかるべき錦の上に花を添る樂に馳れども雪中に炭を贈る貪民の情を知らざ三飡ハ掛を列ねて桂を薪にし炊く幾の侍

女前に佇り後に從ふ侍る富貴の身にしあれども。今城陥り國破れて敵乱入まさんとするに恩顧の老黨傳給の女房も何里ともなけん在ることなければ河堀殿と親姑姫ハ思ふかひなくなるいのふせんとぞなるのふせ。術知ぬ共侶に泣て在せしに城兵火係の…なりしんバ左ても右ても免れがたき命を今更にも惜みし只ひとの儘に刃に伏て死天の逆旅に相伴んとぞて。みな短刀拿揚て念佛唱る両聲の細るむなりの歎ぞをなを倶に耳を抜放ぞ既にかりよとぞんとりける。有恁し程に妙真曳手単節等ハ晨裏に這城内に保管捕入れられて奥在る一室に在り身の長屢なりし就て亦心にかかる立日音が上をいかにと思ひを然しも人に問難て做も事もなく早し暮る程に其日黄昏時に及びて城中猛可に噪ぎ起て里見の軍師が逆寄して正門ハ既に破られたりと罵る聲のしたりけれバ這保質等を守の頭人大石憲重の家臣なりける那朝時技太郎天罡餅九郎等のこれも雜色奴隷も咸逃去けれ其頭に人の在るもとなりけれバ妙真曳手單節等ハ一ツひとつら

驚に一しきひ歎ぶ思ふ額を集めつゝ安危を計ふ曳多單節が宗吾堂の如く今日の開戰御方の全勝疑ひもなく犬阪王が逆寄し來て城を攻落さんぞ然ば我身の出入ふ路廣くこそありけれ。とゝべ妙真點頭て然へ我们ハ左まれ右まれ這城内ふ河堀殿と喚れぬる定正王の奶々君もまつ〻及朝寧主の夫人多貌姑姫も在まと吟ぬ這兵乱ふ那二柱の茶夫人新夫人四志もあらん我両館の卿仁心ふ違ひまつり〻後後の為ふ力ゝべ。非如窠内を知ぎとも悄地ふ後堂ふ赴て那方樣ふ俱しまわらせて犬阪主ふ渡し奥。我们が質ふ捉られて這里ふ在りける甲斐ハあらんこの我什麼と呼ばハ曳てひとよ多單節ハ歎び悲て現其進退奇妙ふ仍り時後れ多ぶ悔るべし。誘ぬ人こそ身を起せ。妙真も俱ふ嘆を寒げ〻我間とも多ふ奥坐席を其首狩這里ふ來ぬ入る程ふ翠簾吊渡せし奥の一室ふ果して両個の夫人在り問でもあるに那打扮貴人多ぐ〻こそ。遂ふ短刀抜持て自殺せまく為りける。那時遅し。這時速し。妙真曳多單節

ら多ふ這光景を見てより忽地ヤヤと聲を被げて走り入りく右ひだりより拳ふ携りて推禁れぬ河堀殿も貌姑姫も吐嗟とだりり駭れぬる猿馬を鎮め左見右見て思ひけ奇。世多ふ抑是何人そと訝り問れて妙真答るやう。識せぬ人ふ理り之奴家毎ふ里見の家臣犬江親兵衛が祖母妙真後の十條カ二郎尺八が母曳多單節ハ多ぐ〻。この他姥雪代四郎の妻音音と俱ふ軍師犬阪毛野の坐壽策ふ從ふ降人千代丸圖書助の舊臣甘木甲多の宅眷と詭りて密使ふ立しが我们三名をば保質ふそ這城内ふ留措れ音音ハ仁田山晋六ふ預けられて开が儘艦ふ送り仍る。るふ今日の水戰寄隊敗北の吟えあり。反て犬阪ふ逆寄せられて當城將陷んと是然ば里ども我王君里見殿ハ仁者ぐ豈人の城を屠り人の宅眷を殺戮し己を利害虐を志のらんや。憶ふ今日の城攻ハ管領非理の攻伐を懲さんと欲るのを然るを惴て自殺あらば美義成の本意ふあらぬ。枉て止りぬひと送代ふ諫諭して持る短刀

桃放せば河堀殿も親姑姫も其ゐ推携りうち泣て原来是汝等が思ひ設ける敵
方の間諜児あてありけるよと事問ふ詞も果ぬ折ふ四下ふ响く空銃ふ大家耳を串れて
吐嗟とおろろ駭て俱ふ前面を佶と見る隔の襖戸蹴開て見れ出る両個の猛者あり
是則別人ならぬ亦那朝時技太郎天留餅九郎ゆゑありける但見る打扮一對ふ
身ゐ肚甲肱鉄脛衣戰笠眉深ふ髯咋反らして訛聲高く喚る曰ふ知ぬ是意
中人達豫の目弄翹齬ふ館打負ゐひらぶ里見の軍師ふ逆寄せられて風落城ふ
程もなく我情人達を擒獲ひて且大塚の城ふ退らんと思ひ索ね去ふ行見えざるを
故ありけれ奥跡人もあく何ぞ去らん這里ふ造りて我們が主張亦更りうち河堀殿と
姫上とのまぐ出も汚やぐぎして這里ふ在ゐ奇貨ゐる哉元自里見ふ降参しく這二
方を献らせ云ふ唄ゐ両個い一城の主ふ做らんも易かるべ一開して和女ゐと妻ふして旦ゐ
夕ゐふ長視ゐ鄙語ふ云牡丹餅で麝を打ゐ栄曜の上装低ゐ愛ゐ

疾引立て一緒ふらるゐ倘詩の語のと不の字をいひ可愛さ反憎さも百倍ゐ
敷ゐ殺して然而公後ふ里見ふ降ゐ応も否ゐ答ぎやと両聲俱ふ昔めく唱ふ喧
ざく准備の銃砲又蜂くもふく合直て銃杪其方ふ推向れば吐嗟と敷驚く妙有と
俱ふ曳ゐ胞姉妹ふ其身を看ふ河堀と貌姑姫を背ふて戰れゐ聲慌々ゐく
各よりゐ和主们のゐを借りて這二方を俱ゐらせんや況筋ゐ不義淫奔矢
銃をりて權をも誰ふ枉て従ふ死とらせも果ぎ技太郎と餅九郎い脚踏鳴して
眼と瞋ら聲又昔ぐ女流ふ似ゐる死大胆亜敵其義ゐ思ひ知せん覚期をせよと
罵りて火蓋を鑽らんとせ程ふ後方ふ覘ふ一個の雑兵忽地聲を震立て白物ゐ
と喚禁れば数騎見ゐる枝太郎ゐ枝八果敢ゐ眉尖刀ふ細項丁と艾られて軀い撞
と仆れ云ぐ是ゆぎ駭く餅九郎も俱ふ見ゐる程もなぎ又只件の雑兵ふ入む眉尖
刀ふ右の腕をだらりぎと艾られて持る銃砲共侶ふ忽撲地と雑落されて麝居ふ

河堀殿
ひくん
ひとよ
妙ちん
つぶてきち
おとね
五十子の城小四勇婦大功を成す

撞と平張り思ひ設けるを今這幇助ふ又うも驚き且怒ぶ曳る胞姉妹妙真い共
侶ふ聲をうけて料らざりける危窮の助剣抑ゐ身い何人ぞと問ふ間ふ雑兵ら戰笠
やうう脱棄るをこれ是別人ぞ正ふ音音ふそあり日れいあるくいふとだかりふ妙
真曳ふ單節ぞい満面朱ぞ怒びふ先二日の短刀を鞘ふ納めつ身と起ーあく。
卒這方へと請萬れい音音い眉尖刀搔遺って跪ぞ却らぞ奴家ぞ怪る行
扮って這城内ふ潜入りーい特ふ所以あるられども并ら後ふこそ告げるも既ふ躬方い
全勝ぞ水路の開戰のまうぞ大阪主の一隊の雄兵當城ふ推寄ぞて正門い既ね
敗れうと告れば妙真曳ぞうらく安心て原来事皆便宜ふ仕りい這里ふ
在ぞ両夫人い定正主の奴々君と新婦君ゆそ
ぞ程ふ我们料らざりふ来てやうぞ禁仕りー折ふ那枝太郎と餅九郎ぞ
乱を利と做ぞ不忠の本性剰奴家姉妹を桃むそ火銃をうて權せーぞ防ぐふ

術のまうーふ折りく刻身ぞ武者打扮ぞ件の五人ぞを推果ゆいい今ふ肇ふ武
勇の揮ふ愉快ぞうられと告れば音音い共ーく河堀殿と親姑姫ふ向ひて額を
働ぞく奴家い里見の一家臣蛯雪代四郎ぞ妻音音ぞ仕り目今軍師大阪毛野
ぞ當城を攻懲ぞうく也君の側ぞ侍人を働除ん為のぞ御達を苦ーめぞふ仕り
ぞ然れども這里ふ在ぞて軍兵の乱妨も測りがぞ仕られば權且御園へぞ安ぞ誘ぞく。と
萬事ふ河堀殿目ぞ推拭ぞく年来仕る女房仕ぞ自恣咸逃去り日有怪ぞ瀬ふ立
ち者いるく反て敵の妻孥莫ふ伴れ去る鈍ぞ託ぞ親姑姫も只潜然と泣沈
ぞ立難ふを音音妙真曳ぞ單節い慰めく却後園の那方ふ見ぞ茶亭へぞ
俱ーふり姑且ーと給事の女房の聊忠心ある者十名許返ーぞ河堀殿と親姑
姫を表ふ雑色と家ぞ二人ぞ斫殺ぞ俯ぞ那二方の見えねいぞ
驚ぞ且怕れて又外面へ退り日ぞ程ふ大阪毛野ぞ先鋒ぞ小森但一郎高宗千代丸

圖書助豊俊い敵の頭人韮見利金太们ぞ逃るを赶ひて二の城門ふ士卒を駈て攻戰
へば城の頭人箕田馭蘭二兵頭綱阪四郎布留川淺市力を戮せ隊兵を奬し。
あやと先途と防ぎ戰ふ其兵四五千あるをもしく。左右ゑ攻も破られぎモ野い馬上ふ立足を
見て弓ふ前刺ふく彈と射る矢尻錯ゑを馭蘭二い肩尖丁と射られ一かば沼堪ぎ
馬より落ふけり是ぞ驚く城の士卒い備を乱て潰と退くを透さず稠入る先鋒の
頭人高宗豊俊いへけゑ浦安友勝木曽季元士卒を薦めて三七二十一ふ攻伏
攻伏乱入る然ーも烈ーも大刀風ふ城兵防ぐふ力ゑ。オふ金瘡児馭蘭二を肩ふ穢
々後門投て咄と頽れて逃走れば綱阪四郎布留川淺市。心ゑぎも逃走る。躬方の
士卒ふ誘ーれて後門よりぞ落亡ける。徳而大阪モ野瀧智一舉ふ城を攻落ーく。
馬を本城ふ乘入るふ敵一人もあることなければ權且あふ屯ーて高宗豊俊を召て
我聞當城ふ定正主の後母河堀殿と朝寧の夫人貌姑姫あり又妙真曳ゑ單節の

上も心許ゑ。厚く其在処を索ねて宜く勦り慰むべ。但那五婦女子のまゝ女流い都て
罪ゑ。必ゑ驚ーそ一所ふ集合て扶持をべ。且宝藏と倉廩ハ我ゑ自封ぎ。和殿
们もよく心を属て士卒の乱妨を敬言めよ。ろくと忘がせば。高宗豊俊相心ゑて貯て士卒を
部ーて城中隈ゑく巡索ぎ。その時自餘の士卒们ハ庭上ふ篝を焼て一二の城門を守り
けり。徳而ぞ初更の左側ふ小森但一郎高宗ハ其隊の士卒十名許と俱ふ音音妙
真を將く來て。来由を亂智ふ報ふけり。當下毛野ハ先妙真ふうち向ひて什麽妙真刀
自曳ゑ單節い差ゑぞ音音媼れハ。艦ふ送れて。這里ふ在らーと思ひーふ釬脛
衣ふ身甲ハ故とそゆゑ。甚麽ぞと。向へば妙真先答ゑふ。ゑふ在りける程の多又扶
太郎餅九郎ゑ曳ゑ單節ふ掛想せーゑを始ぞ。且ふやう。鄙ふ河堀殿と貌姑姫の自
殺ふゆんとゑされ一時憶ぎも參ぞ合せて其死を禁め伐ーー折枝太餅九ゑ索ふ來て
主家の乱を已ゑ利ゆて剰曳ゑ單節を挑ゑ。從ぎれば火銃ゑ。權しらく逼りー

智玉長く
駆て敵城を
抜く
けの
友かつ
ひろの
のりとし
さとし
あさ
妙えん
あさの女ぎう
つるまち
のりとし
さとし

程ふ料らずも音音の刀自の幇助ふよりて五人等を斃し果しぬ。俱ふ件の両柱の御達を勦て慰禀して園の茶亭ふ退りて休りと一五一十を述知れば音音ハ亦大茂林の澳邊ふ仁田山晋六が柴苫新船を計りて焼亡せし事の始より那身ハ海ふ没て火を免れて泅ぎて大茂林濱ふ造り折海苔七夫婦ふ死を殺れし事の趣を告げて又ハ折ふ扇谷の残兵の咸結枉られて還り来る其艦流れ寄しを他ハ漫ふ哄誘して這城内ふ紛れ入りしふ身並ふ勇士達の推續て當城ふ攻入りぬしを知ざりしかどもその刀自と曳み單節を索ひて救出さまく思ふの故ふ事の紛れふ後堂深く潜び入りしふ今妙真刀自の告げゆゑ如く件の両個の五人を眉尖刀ふ被け其又除て河堀殿と貌姑姫を茶亭ふ俱ふ共侶ふ事の鎮ると俟ふて報るを毛野ハ刻々と听果て感じて已まぬ憶ぎもゆゑを拍鳴らして果せるる勇婦の進退孰れも忠義なる哉。做しゐて各皆妙真河堀殿と貌姑姫の惴りて自殺あるゆゑ我両館の御仁慈も徒事とうるまぢふ長く怨を結れふ那死を極ひまわらせしハ時ふして其功抜萃賞まべしく我ハ見参まべれども女儀ふ夜分ハ憚りあり先後堂ふ返し入れて刀自ハ宿直しく是を備りね事の起本ふ保質ふ捉れし刀自ハ主と做りて反く両個の保質を捕獲しハ不用意ゆゑ造化精妙ふ奇人縦定正主残兵をりく當城ふ推寄来て復さまく欲するとも河堀殿を城楼ふ升して那罪と責て拒るハ我兵僅ふ百人ばかりとも他何ともまべらじとのひて高宗を見ろ入りて守城の准備を示ま折ろ千代九圖書助豊俊ハ落後れる綱阪四郎と庖人廩人ハ生拘りて結枉りくのて雑兵ふ牽せ又當城ふ給事の女房十名許を捕禁めて腰索被けて將く来ぬ隨即毛野ふ報てのゆゑ這者毎ハ逃惑ふて猶城中ふ在りしハ捕捕てハ其姓名ハ箇様なると言詳ふ訴れば毛野ハ听く鞫問まるふ綱阪四郎ハ小可を二の城門を攻破れし時河堀殿と貌姑姫を扶出しまわらせんと思ふふりて逃もうさ

らぎ這毎と共侶ふ立駆れて在りけるを見出されて捕捕られぬとのべ女房们も俱ふふ
やう。衢ふ敵乱入ると呼えて時明輩も共侶ふ慌く走り出かど御母君と姫上を俱
ふ敵ふ奪せんと思ひかぞ我们十名い立離れて後堂ふ還り来ふけるゑ二方いをいまそ
斫れ一両個の雑兵の屍骸ありけれど怕れて又外面へ走り出く猛者達ふ赶れて捕へれ
ばりとおそるく陳ずるを毛野い听て點頭て是ゑの男女い箕田馭蘭二们ふ
立勝りて聊忠心ある者へ俱ふ縛の索を糾して妙真音音曳ゑ畢節と
相共ふ両個の女君ふ仕ゑよ其頭人い浦安生一二百の老兵を従へ宜後堂を守
るべ。但綱阪四郎と廩人们の事い猶思ふりあれそ儘ふして屏居め置ぬ。ゑの
餘の事い徳々と言送もるく宣示せど友勝い妙真音音と俱ふ女房ゑを受含て
老兵許ヨヌ従へ。ゑそぐく後堂へ赴けど豊後い又綱阪四郎と廩人们を开ど儘ふ
隊の兵毎ふ牽立さそ外面投て退りけり。徳而當晩子二刻左側ふ小溪目堅

宗い猿岡猿八鮏内葉四郎と俱ふ毛野ど進退ふ従ひく既ふ去向を知りこなし。
生口大石憲儀と隊の者毎ふ牽せろ。五十子の城ふ来ふけれど毛野い則城の正
廳の局の内へ召入れて對面を登時堅宗い鄕ふ河崎矢口の間河原ゑ定正主僕
僅ふ二騎道郎ど虎口と道れて那里ふ津りを討めける折目ハ伏兵一度ふ起ゑ矢
場ふ俘ふ志べりーふ定正主僕い悲ゑ請ゑて言果べくもあらざれば則主僕の願ふ任
せ。定正のゑ自前刃て首級ふ換る。頭髪を受含り命を允しゑ且事の照験の
為ふ憲儀と領て来ゑ故ふ定正ゑい鮏内葉四郎ふ一百個の隊兵を分ちく他を送
らゑーうを報ふ葉四郎い又巨田助友ど快船ふ乗て沂り来ゑふ逢ゑかど則助
友ど共ふ任して却定正を那隊ふ遞與して河崎ふかう来ゑ堅宗と一隊ふなりけゑ。
事の趣を演述ゑ又堅宗い間諜兒を遣く屈く知りける道節ど一隊をゑ定正を
迂輟ける折巨田荘新六郎助友ど僅ふ五百の隊兵をゑく道節を防ど戦ひ事の

光景を望つる隨ふ告ふけり。當下毛野い儼然と憲儀ふうち向ひてやとれ大石生和殿
親子い管領家の元老ふ。て其君を輔けるく賢良たるこれる事と要せば反く
那悪ふ逢ふく。無名非理の大兵を起させく。罪ふ隣國と侵ふく欲にる故ふ十萬の
衆ありとのへども小敵ふ敵ふ敗らるく。終ふ其君辱められ其身ふ俘囚ふ做ふ
るとも我君里見殿い仁義禮智の心をりく只其暴虐を防ぐのと今全勝の勢ふ
乗じ七人の地を奪ひ人の城を捕ふあるねども我當城ふ船を寄ひ只其悪と懲さん爲
あの故ふ鄙ふ我伏兵をもく管領と矢口河原ふ稠篭れども胡意饒ひ虜ふ做さ
是則我君仁義の本意ふく然ひも大職ふ居る那人を楚囚ふ做さんと思へるう和殿
あの義を知りてるやとのられく憲儀答へふ由ふく黄壁を嘗る啞子の像く口を含め
眼と睛りく。のいまく者く竟ふ沿のるる。姑息ひく聲細やふ軍師我実ふ罪あり。枉て放
免を願ふのと勸解れば毛野い小溪目ふ。徳やと分付く却憲儀を牽立させく

開ぶ儘獄舍へ遣ひけり。徳而又毛野い小森高宗ふ談ぜるやう。我憤ふ大石ぶ大
塚の城を守る士卒多の。管領大く敗北ひく。當城も敵ふ捕られと侵へ攻ふ必や
駭怕きく城を棄く走るべひ。然らば那空城を我より〳〵守らぎい野武士山賊の
寓者あらん。和殿ふ木曽三助と共倡ふ一千の隊兵を將く夙く那里へ赴く。
箇樣々々ふ相計ひたまと。と具ふあるるを汐さまるる高宗ふ。其義兼ひ益
但ひ大塚の城よりも。忍岡ふそ要緊るるゆふの義誰何と請問へば毛野ふ莞尓
とうち笑く然るり。忍岡の城い為も道節ぶ捕るふやあるむ。鄙ふ犬山い定正主ふ追伐
あふ巨田助友ぶ援兵ふ枉られく。遂ふ敵ふ漏せひあるぎ。然るを今當城を我逆早く
援ぶれば大山必性起て忍岡へ推寄て。那城を捕るるべひ。尓らば那里の敵城い
他ふ讓らまく思ふ。木曽生も這意を汐て。俱ふ大塚へ推寄ゆ。當城ふ敵の二葉
置ぶる。冷飯処々ふあるるん。腰戰飯を送るべるとく。と急せば高宗ふ。元敬服

あそ。當晩一千の士卒を將く。悄地ゐ城を立出く。大塚へとくいそぎけり。小間ゐ犬阪毛野い。今日の勝軍の事の趣を。洲崎の御陣へ告稟さんとそ。祐筆を召よせて既ゐ其美ゐ及ぶ程ゐ雜兵等ゞ炊紀果る。戰飯を薦めるども。左右する程ゐ天い明けく正門を衛る士卒等ゞ。案内をあく、大法師の谷山より出て來ゐ由と。ゆえ。ゆゑ。毛野いみづから立迎へく。上坐ゐ推升。且那奇風の大功を稱賛あるゑ。、大い歎ぶ氣色を。愀然として嗟嘆ゐ堪ず。姑息ーとゐ。軍師昨日の勝軍い是賀ゐ似られども。我年來の出家の功德い竟ゐ陰獄の悪趣ゐ做り。抑昨日の火攻ゐ敵兵の燒き死せ者。幾千百ゐあるけむ。狹憐むべきとるらぎや。甲も乙も奇王をもて。風を起せ。我罪重る。已るく。と怨むるを。毛野い。听々慰めて。師父の自責い。然るとるゞる。曩ゐも諭。稟ゐーどく。悪を懲ます。佛の方便時宜ゐよりて。殺生も反て。佛意ゐ叛ざるべ。師父の大功仰ぐべ。小子今快船をもて。洲崎へ使をまゐらせんとも。師父をも載て送りべ。

先齋をまゐらせんの。連日山塾の。疲労を驚しゐ。と。鮮れて。大い頷くの。麻の薄黒の法衣拷の淨衣の垢染しを。脱更もまず。几繰る數珠の。外ゐ所作もなりける。徳て。客く。而主客の早饌果て。毛野い。軍内葉四郎を身邊近く召よせて。洲い。大師ゐ。俱七八個の雜兵を從へく。洲崎の御陣へ參りね。去向い水路を快船るべ。却言上の趣い箇樣々々と。宣教る。呈書一通と。定正の頭髻を。苫ゐ藏める。自封して。遞與せ。ゞ葉四郎いるる。果て。事の准備を做を程ゐ。大い又毛野ゐ。問れて。谷山ゐ。在り。日の。且大村大角の。又水路。方の勝軍。。這五十子の城さへ。毛野ゞ。厚く。攻落ーを。那里の風聲ゐ。知て。船を借んと思ひ。當城ゐ來る由を。云云と。告るど。其言。佳境ゐ入らるく。時葉四郎い。准備。果て。卒とく、。大を。促せ。、大。毛野。ゐ。別を告げく。身を起ーゐ。葉四郎。ゐ。引れく。俱ゐ。柴浦ゐ。出く。快船ゐ。うち。乘りて。洲崎を。投て。漕せける。然ゞ。又。朝。犬阪毛野い。妙真音音浦安

友勝等と密内ふ語り則後堂ふ赴て河堀殿と貌姑姫ふ見参を其事男女の
禮を乱さぬ詮ぎる所い定正の佞人ふ惑いされる這回の軍旅の非を挙て義成の寛
仁を説示して且ふ曰ふ臣等當城ふ艦を寄しい敢殺戮を上日と志ぬるふあらぬ只管
領の側る佞人們を鋤除て両家の和睦を揃らまくも然い其間両御遠妾房の
穏ーもあらもべけれども水路い風濤の怕れ有ーもいれども猶あの儘るるもけーういあーぬ
這里ふ佇る妙真音音曳多單節い皆是忠信貞実る女毎ふ御陪堂ふ為
らるるふの他年来給事の女房等もいへい必御心安るべーと言叮寧ふ慰めて是よりの
後朝夕ふ安否を訪ぎる事も多く且生拘りの内中ふ庵人もあれい這者毎を釋餼
を庖厨の事を做さ為ーんい河堀殿と貌姑姫い三飡も生平ふ易らぬ又妙真音音
らーさとあ等ぬ里見殿の仁心を言ふ感れて説生て定正主の惣を云云と諭ふーんい河堀殿も
貌姑姫も是ふよりてを稍覚ら左も右も佞人們の不忠を憎まひける有徳れを毛

野い士卒ふ下知して城の四門を守らるふ千代丸豊後浦安友勝小湊堅宗猿
岡猿八等と頭人及ふ頭人とを介程ふ隣里近郷る郷士豪民荘客們の里見の
仁政を慕ふ者招ざるふ聚ひ来て請ふて軍役ふ達ぎ欲ぎる者千をのて數ふ万ー。
あるとのて大阪ん軍威らよく揭焉ぬそ草木も靡く可られい次の日毛野い馬ふ乗り二
三百の隊の兵を相従へ城外四境をうち巡りて民の訟へを听定むるふ郷の故老們簟
食壺漿ホーて欽び迎ざるいる。徒而多く日比と喚做を郷畫処ふ一座の小道場あり
けり前門破れ傾ぶて松の垂枝ふ掩れられども鉦鼓の音近く聞えて夕讀經の聲耳
ぎるを郷導人毛野ふ告てあるる日比の宝徳寺と喚做ーたる舊院ゆくひ這
寺内ふ扇谷の一忠臣河鯉權佐守如の墓ひんとふを毛野うち少く馬を駐め
寺内を見入れて原来是要ある人の墳墓墓るり卒立寄く廻向をせんぎとのひて馬
より下立く。躯て找て入る程ふ士卒い都て鎗を建馬を繫ふぎ門前ふ在り一二の

老兵従ふて玄関ふ喝へ門へ一個の沙弥出て来てうち驚ける面色をそるく左
見右見て那里ぞと尋れば毛野い自找を向ひて咱答い是里見の軍師犬阪毛野
亂智へ當寺ふ河鯉權佐翁の墳墓あると知りて拜奠の為ふ立ちりあるぞ
案内を憑むのことられて沙弥い阿と応へて遽しく又内ふ入り姑且して間道莚と
浅青磁の香爐とを右ふ推へ左ふ引提て復遽しく出て来て誘とだりふ庭木
履を穿て先ふ立けれい毛野い引まて本堂の傍ふ窣都婆牆ある処ふ造れい花も
丹楓もるりける冬の柳の樹の下ふ只一塊の土饅頭ありて一箇の窣都婆を建て
のことのまぐ其墓表の石あらぐ是ぞん河鯉翁の墳墓ぞと沙弥い莚を布て香爐を
居て傍ふ立て懐より鈴を出てうち鳴して偈を唱念佛して那廻向をぞ帮助ける登
時毛野い後方ふる老兵をちを見てそ我今故人を祭らまく欲まるふ猛可の事あく
祭文の儲をー文い花へ言い実へ只方すの懐ひを述て誠を盡さば亡霊も受ん

我拙を笑ひなせそ。とひて貌を改めて。墓ふ向ひて香を焼きて跪き合掌
あく。聲朗ふ吟誦あけり。其意忠信ふて那死を悼を其言簡約ふく那
子を憐ふ誠心誠意よく亡霊を慰めく。夜臺の眠を覚まふ足べ。祭畢りて退
けば沙弥い又先ふ立て。客殿へ案内をあて。茶を看めるどまる程ふ住持の老僧
立出て毛野ふ對面ーく姓名を問来意を尋るふ毛野又告ることの初の如く且ふ
やう那河鯉翁い咱答一面の交あり。他い扁谷の孤忠ふーく友て枉死の悼あり其
子孝嗣亦是忠孝なるも反て奸黨ふ誣られて。死刑ふ逮びく免れられども猶幸
なくて。存亡今ふ詳ならぎ我今五十子の城ふ在りて。氏の憂苦を解まく欲ま矧
那親子の如い忠義を後世ふ偽ぎいあるべくば速ふ墓石を造建て。祠堂料を
寄附まべー且親ふ當寺い頗頽破ふ及べり宜く修復致まべー其財用い形の如く明日
城内へ遣與まべー。あの義をぞろ弱ぬひと言叮寧ふ解示ん。硯を請まを自

證文一通を書寫めて取れい。住持ハ欽ひ受攸めく。却ふ宮。寔ふ御意の如く河鯉生ハ曩ふ枉死の折一旦城陷りしかど。當寺の檀越なれども其子佐太郎主親の屍骸を舁入れさせて。安葬の爰を痛れしが。則執置ひのこ管領家へ憚りそいなぎ墓石を建ざりしふ里見殿施主ふ做りあひて我寺をも修造あるい幸甚しくいるれ。仰ぎ願ひぬと応て又茶を看め。果子を薦めて管待けり。慫而次の日。宝傳寺の住持ハ一二の徒弟を従へて。五十子の城ふ赴けれハ。毛野ハ則友勝豊俊等ふ件の爰を言示して。住持ふ幾裏衣の金子を取らせて。ひく修造をいそぐべしと。寺ふ程なく造り更て。昔ふかへるるふけり。然ハ五十子の民毎ハ守如の枉死孝嗣の亟実の罪を。豆屬不平ふ思ひしふ。毛野が是等の善政を欽ざるいなりけるを。是後の話説之畢竟大阪亂智が五十子の城を捕りて。又道節が進退甚麼ぞを。開ふ又下の回ふ解分るを聽れ。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十六終

東都　曲亭主人編次

第百七十八回

有種恥を雪く郷黨を復帰せ
大水陸ふ衆鬼を濟度せ

是より先ふ犬山道節忠與ハ。十二月八日の黄昏時候。河寄矢口の間河原ふて定正の援兵ハ。巨田助友を撃走らせ。折。印東明相荒川清英等の意見ふ任せて。故の海邊ふ退く程ふ。馬淵場九郎が残兵及近郷の。豪民の子弟毎が多く走り加りて。既ふ多勢ふ做りしかど。姑且其里ふ人馬を憩へく。旦當晩間諜児をして。五十子の城の虚実を覘せ。ふ那里ハ夙く犬阪毛野が。江を渡り来つ城を拔て。威勢正ふ破竹の像く。當家の旗を四門ふ建て。紛ふべくもあらぬとふ。道節聞て且歓び且羞く。明相清秀等ふいふやう。汝ね又智曩が逸早く。

○文溪堂藏

五十子の城を攻落さう。有徳さべ我ハ大石ゞ大塚の城を拔色く。忍岡の城を捕るべー。疾打立ね。といそぶして人ハ飽まで戰飯を使ゼ。馬ハ多く豆草を飼ゑ。九日の曉天ハ河嵜ある海畔を立く。陸地より。菅ハ孤大塚を投て推寄る。其兵新舊うち合して。三千餘名ハ及びけ。偖而犬山道節ハ大塚の城ハ近づく程ハ。先一三騎の斥候を遣して。敵の形勢を知まくもるハ。其兵毎かり来て。那里の城ハ。御方の士卒入替ててゆ守ゆん建る當家の旗。戰幟多くゝ見えくけと報ーうべ。道節ゆ。騎さる馬を。駐めて呆るゆ半晌許。原来亦智嚢ゞ那里乃城をゆ捕るよ。然べとて這里まで来るゞ。城を守ハ頭人等に。對面せゞいわるべうむ。さてゆくとゞうハ。找ぬ馬ハ鞭うちて。既ハ其城門ハ近づく隨ハ。躱て一両個の士卒を走らせく。城の頭人ハ告ーうゞ。小森但一郎高宗木曾三介季元等ハ。其虚実を問糾ゆハ。疑ふべくもわゝざまべ。隨即門戸紋開うせく。道節をゞ迎へる。

當下犬山道節ハ三千の隊の兵を。开ゞ儘大塚の城外ハ住め在らせて。那身ハ明相清英と。僅ハ三騎士卒百名許を將く。城ハ入く高宗季元等ハ對面ーて。當城を攻落ーう。其敏捷を誉て且敵の落方を尋ろハ。高宗季元ゞハ咱等ハ昨宵犬阪主の指揮ハよりて一千許の隊兵を將て。當城ハうち向ひよ。這里城守る大石ゞ士卒等ハ。管領昨日の水戰ハうち負けて。落く其往方を知らゞ。剩五十子の城ハ犬阪ハ逆寄せゝまて。没落ちつとハよりと。當城の頭人反橋雜記丁田畔四郎等ハ知ゆて。然でハ這城保ちがくうう。敵ハ逆寄せゝまぬ間ハ。忍岡へ退きて。那里と一隊と做らむとて。雜記ハ主の大石ゞ宅眷ハ己ゞ妻孥等を相添ーて。第一番ハ城を落ーうべ。丁田畔四郎ハ三四百の士卒と俱ハ。各資財什物を或ゝ車ハ載或ゝ馬ハ馳ーて。後門より出去程ハ。我們夙く推寄来く。咄と嘩ゞく攻撃ーうべ。然らでも皆是怯鬼ハ誘ーれねる城兵等ハ孰ゝ拄一拄

拄ぬ。只雑嘻を散さゞ像く。逃く四令八落ふ做さーゞ。我们そ多も濡ぇ當城を獲ゞ守ふのこ。勿論那義ハ生拘の。敵兵ふ岑く所ゐり。と告る弦うち所く明相清英憶ぎもうち合笑れて。事の便宜と犬阪の軍界智計を感嘆ぎ。中ふ道節い連りふ耳を欹けて。岑果て且いふ。現ふ兵ゃ拙速を貴ぶべ。久くゐて巧るを良と世ゞ。犬阪ゞ為も所い速ふ。拙かゝぎ。咱ぢハ昨宵愁ふ。中途より走加てぬる。兵毎ふ拘つらひて。時後ぎぬる悔ーさよ。然らんまハ忍岡をも。亦犬阪ふ先せれ欲とのゝを高宗推禁めて。否さよ。忍岡の城攻の事ハも。昨宵咱ぢゞ薦めーかども。犬阪主從ぎ。那里い和君ふ譲らんとて。士卒玆紛けて伐せあいぎ。然れば亦五十子と。這城内ゐる落武者の咸忍岡へゃ集合けん。然ゞ那里ハ大勢ゐらんと告るを道節岑ゆぎ。好々我ちろゐるう。暇まうきと身を起せば。明相と清英ゃ。又高宗と李元ぢふ別を玆告て相從ふを。留め難ゐる高宗李元猶も玄向の小心を顧くこそ。とだうふ。門内までぞ送りゐる。然れば亦犬山道節ゃ。大塚の城を退ぎると开ゞ儘老兵士卒に意衷を示して。犬阪既ふ忍岡の城攻を。咱ぢふ譲らんとゆゝと。縦那城五十子大塚の落武者ぢゞ加りて。幾千幾萬人肩籠りて防戦ふとも。今日我一時ふ蹐潰さん。各粉骨摧身して。我を佐けて大功を做ーね。卒ちくといそゞせば。明相清英ゆゝ。士卒咸諾ひて。勇ミて其隊配ふ相從ふ明相清英先鋒さり。道節ハ中軍ゐて。二の老兵ふ頭人を後陣とも。隊伍齊々整々と。不忍の池の那方ゐる。忍岡の城を投てゃ向ふ當日礫川湯島の間ゃ。森々ゐる岡山ゆて。処々ふ繁り柱ゐる冬青樹ふ路を太あぎ。既ふ。て大山ゞ一軍ハ湯島ゃ過らんと去ぬる時。道節い馬上ゐ。去向を佐と見且て。急ふ先鋒の士卒们を喚止めて。且宣示ぎく。我今前面の茂林を分る小正に是隱々ゐて。立升る殺氣ゐり。意ふふ敵の伏兵ゐ。疾猶ぎを撃

捕りねと誨る詞も果ぬ折ふし。件の茂林より忽焉と咸聲大く發りて。撃出す火銃の。煙と俱ふ顕まる。敵兵約一千有餘真ふ找む其隊の頭人烏革縅の鎧ふ同縅の五枚首巾の火形打ちを猪頭ふ被做し。腰ふ大小二口の刀を跨へ。馬を跳せ錦を拈て四下ふ呵く聲高やふ里見の葉武者们胆を潰して。弱谷殿の御内ゆて忍岡の城の頭人根角谷中二麗廉這隊ふ在り。先度の恥を雪まくも本事をんとやと喚れば左右ふ從ふ面個の小頭人赤耳九二郎當場阿太郎士卒を駈く三七二十ふ殺頽さんと競ふ蒐まば。明相清英毫とも謀ぎ。徐々として士卒を找めて。中を割せぎ左右をも撃せぎ。道節も亦是を助けて。息をも養む。挑戦ふ左右の茂林の方よりして又起り立二隊の軍兵笹田馭蘭二韮見利金太布留川浅市甲乙三騎。其兵約莫一千許道節ぐ備の直中へ出と嘘く推蒐るを。道節謀ぐ閑紀合せて。右ふ引受け左ふ拄て士卒を使ふふを脚の像く。毫も透間あるとるけまば明相と清英は是ふ

氣を沼くを推く。開戦闌るる折ふ。後陣のかたふ又敵あり。是則別人ぐ大塚の城の頭人反橋雑記丁田畔四郎ぐ其隊の残兵四五百名を真先ふ找を。犬山の後陣を撃と急るければ道節ぐ其隊の老兵小頭人も皆駭れ慌て返し合るふ暇ふく。這隊よりを敗れしば。是ふぞ敵ふ威勢をはて。前後左右揉合せ。漏さとそ攻戰ふ鋒矢鋭かるを。道節ふ物ともせぎ。馬を前後ふ馳融し。又只左右ふ相中りて鎗もて敵を刺仆も。武藝驍勇向ふふ前るを一人當千。いとでも多るを。犬士ふ誰ふ克つ者あらん。笹田馭蘭二韮見利金太憶ぎも辟易ぎて俱ふ深痍を負しば。其隊の兵们潑と頽れて風ふ木の葉の散る像く。鋒を倒ぎて逃しば。道節も又奮然と後陣の敵ふ突蒐る。本事ふ做ふ老兵小頭人取て返しつ刀を勦せて皆只恥を雪んと思ふぬ者もるを勢ふ反橋丁田ぐ五百の士卒ふ雲時こそれ怵難て逃んとるる度て失ふて撃る者ぞ多るる。然ば又印

文溪堂藏

東明相荒川清英は這時まで根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等の一隊と
挑戰ふ程ふ左右後陣の敵兵も咸道節ふ撃破られて立脚もなく敗りしぶ敵の
頭人谷中二九二郎士卒も俱ふ驚怕まで呼と叫びて敗れ走るを明相と清英ハ隊兵
を駈て攻伏々明相ハ根角谷中二ふ鎗を合せ手を痍して馬より撞と突落す其間
ふ荒川清英も赤耳九二郎を刺イ一又當場阿太郎ふ手を痍して猶も雙て敵撃
這壯佼等の掙死ふ躬方ハ勇こそ後れんとを怕ま敵ハ影を躱し迹を埋る鬪戰気く
果しぶ道節ハ开ぶ儘ふ馬を樹下ふ騎居て士卒の集合ふ怠候程ふ印東明相
荒川清英も生口根角谷中二を雑兵ふ牽せ来て其餘敵の小頭人赤耳九二郎
當場阿太郎とう喚做て兵毎ふ深痍ふ堪ず死しぶ其首を捕ぞと云又道節
ぶ隊ふ生拘る其田駅蘭二ハ共も深痍ふて多ハ死ぶ非見利金太布留
川浅市友橋雑記丁田畔四郎等ハ或ハ敗れ或ハ逃亡ん敵一人もなくなりぬ當下

道節ハ明相清英等ぶ今日の掙ま誉て且ハ我聞其田駅蘭二ハ是五十子
の城の留守居なり又友橋雑記丁田畔四郎ハ是大石ぶ兵頭ふて逃ぶ大塚より
来たるぶん又根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等ハ則忍岡の頭人ぶ然るを
五十子大塚の城の落武者等ぶ谷中二と一隊ふ做りて我ぶ中途ふ敗ぶまくせしハ
所以なるべしと猶ぶ思ふふ谷中二ハ間諜をりて我去向を知りて俄地ふ城を出て
這頭ふ埋伏して我ぶ敗ぶまく欲する程ふ駅蘭二雑記等ぶ而城の落武者毎ハ料ら
ず其首ふ落合て却大勢ふ做りたるぶん と云ふ明相然ぶと答へく現ふ推考
然もいかに愚按ふいへども敵の遺せし旌旗戰幟あれば开ぶて根角谷中二ぶ
かへり来ぬると伴アて忍岡の城ふ造らべ城兵必欺まく城門を開ぶて吾を容れん
といへば清英ぶの義を喜て登時我ぶ先ふ我ぶ唯て城を捕べいそぶせぬと
薦まべ道節頭ぶ打ち揮て其計畧反ふあらねど根角ぶ残兵脱還らべ城兵

○文溪堂藏

○文溪堂藏

蝕く我詭詐を知らん。且野干王の烏夜るべ其計畧行はるもせめ。非如敵の旌旗
戰慄のく。揣らまく欲するとも。今這白晝に城ふ莅まべ。面善児の如き故ぁ城兵
必疑ふべし。然危き技をせんより。今谷中二駄蘭二笘を。明明地ふ曳吊ぬ。見せて
城兵笘を罵て誘さば。城兵必害怕まく。我ふ降らん。倘又城ふ猛者ありて。防戰まく
欲するるべ。筋力をのれ是を捕らん。外ふ援のる城こ踏潰まふの障沒ひや。卒
やく危しとて。馬を找れば。明相清英この議ふ任して。既ふ半生半死る。谷中二と駄蘭
二笘を。雜兵ふ吊らせ先ふ立く。明相清英先鋒さう。道節も推續く。三千の隊兵
前後と乱さで。既ふ城ふ近づく来ぬる程ふ。さて正門の堞の内城樓
の下ふ中黒及揚羽の蝶の花號染做る旌旗騎馬表と幾流ふ建つる寒た西北
の風のまふく。翩翻る光景ふ他ハ甚麽とだろふ明相清英ハ。さらに。道節
並ふ隊兵們も眉を顰めつ疑惑ふて。思ひ難る所が中ふ。道節ハ人をして。明相

清英ふいとまるやう。今這忍岡の城ふ躬方の旌旗を建つるハ。只是我を惑る。敵
の計策るる。然ハ亦智王ぐ。薄情や我を脱し技きて。風く這城を攻捕つる。且
城ふ向て名告喚りて。那虚実を覘ふべし。とりふ明相ぞ。馬を正門の橋近く騎
找めて。聲高やふ喚るやう。やをと城内の人々ふ。ものいはん。這城の頭人ハ敵欺躬方欺ふ
ふ。我ハ里見の防禦小頭人印東小六明相荒川太郎一郎清英是こ這隊の防禦使
犬山道節主の武勇をのれ。方僅来ぬる中途ゆく。當城の頭人根角谷中二及五十子の城の
頭人笠田駄蘭二笘と戰ふて。且疲負せて生拘りて。を牽せ来て這里ふ在り。門戸を開人
迎へぞやと繰返て呼門ハ城兵笘ハ心と答て。先挾戀を開きて。左見右見る王半晌
許躊て城門を開ぜく。頭人と覚ぐ武者。白縅の鎧ふ。繁鉄打る釘媿頭の脛衣
穿て紐短ふ締做て。黄金製作の大刀を佩て。頭鎧を従者ふ持せて。士卒二十名許を
従へて。遽て出て来つ。こづく名告答るやう。犬山主ハ那里ふ在る。恁りふ我ハ落點餘之

七有種めていぞと報知せゞ近づく程に明相と清英の隊ぞ知ぬ那人欲思ひみぎと
ぞかりに引て道節に逢されば道節は遠ざく馬より降りと下立て去る落鮎生一別
以来恙や和殿は亦幾の間に當城を攻落したる料らざりける對面かとそ其所はきま
わーけまと問へば有種さいに小可ぐ出没は言一朝に聲ーくろ先城内へ俱ーはらん人馬を
憩へ給へねと答て却明相清英等に名對面をろ労ふて引て城中に請されば道節は明
相清英等と俱に我入る程に自餘の老兵小頭人们も士卒を徐に繰入て三隊に別
れて東西に聚ひて乱雑をろ程ー。恁而落鮎有種は道節及明相清英等を誘引て
城の正廳に造る程に五十有餘の法師武者と落鮎の家の老僕小ヨと穂北の故
老们出迎へく上座に請待をつ。賓主の席定りて多衆の火盤を薦め且煎茶を看める
どそ。當下道節は有種に向ひて。昨日洲寄の漁の水戰に犬阪ぐ計畧をとり大
敵を破ぬ去けるゞの始めより。道節ぐ敵の副將朝章を射て水中に隊去ーゝの。又

河寄河原に定正を赴戦ーー時巨田助友ぐ援兵のゞの又ちくへ来ぬる時湯島をろ
岡山ぬて根角谷中二箕田駅蘭二反橋雑記等の三城の合兵と闘戰克て谷中二駅
蘭二等を生拘て牽ゝて来つるゞの終りまで其大畧を説示して却落鮎ぐ上を向へば。
有種はゞゞ毎に感歎せぞとのをとをろく。義成の武徳仁政二犬士の支畧武勇を誉ろ
ゞゞ大方をろくぞ。小可ぐ上はをも。首をゝへ箇様々々尾は又恁々做りとて言詳に説出せ城。
道節明相清英等は齊一耳を欹て俱に佳境に入りをろ。其顛末を尋ぬるに初落
鮎有種は扇谷の討隊の頭人箕田駅蘭二と根角谷中二ぐ勢を領さ。も向ふと
攻へ時。妻の重戸ぐ諫めをりて。急を郷黨に告知せて穂北の家を自焼をつ。郷人を感
相伴ふて重戸の叔父のいまそかりける下總の國猴嶋郡。誼夾院村に赴きて那小
父に危窮を告て。椎且這里に潜びて居り。柳當村に誼夾院と喚做ーる一座の
修験院をりけり。住持は豪荊とのゝ山伏ぬて昔は子院四十八ケ寺をりーに近世痛く

衰て今は本山のみ存れども。其餘波近郷に在り。皆半僧半俗にして。武藝を好む。且各々耕し耘りて。口を餬へども。尚本山に事ある時は。四十八院咸集ひて。相資けぞと いへとも。況て豪荊法印は。其性物に任侠にして。法師に似げなく。脆扱ふれば平生に弱きを助け。強きを折く。人の不平を解まくを然べ今落魄夫婦が寃家の為に地を棄て家を焼き。宅眷を携へ郷黨を相伴ひて。悄地にあに尋ね来つ。事の難義を告知せく。其資助を憑みしかば。豪荊は推辭氣色なく。最精悍しく管待て。落魄の宅眷はいとゝ穂北の郷人に。妻孥子弟までも西東に潛せて。よく是を舎藏と五六月に倣りし。比忽地扇谷定正の里見を攻伐のみ。ことを聞て。内顕定と両旗に。且諸侯を連ね兵を合せて。水陸よりも向ふと云。大兵約莫十萬餘騎。陸は行德國府臺。水路は安房の洲嵜を投て攻寄ると風聲あり。其言甚浪なれば有種なく驚き憂ひて。悄地に法印豪荊に意衷を示して談ずるやう。里見殿は是我義父氷垣夏行翁の老病に臥て。折東西賜ふる恩惠あり。然らぞも彼大士は。昨日幸に一面の交を辱くせ。昔中に犬山道節忠與は原是煉馬の残黨なれば。我舊君豊嶌殿と同宗の家臣なりしを。その故に是裏まれ那大士の毎幾番か我に薦めて。里見に仕へよといへれども。其比は氷垣翁の老病を看放ちがたく。且翁が興發相傳の田園を棄て。他郷へ移らんをの本意なく。稔べいまだ果さぬりけるに幾程もなく禍鬼起りて。穂北を棄て走る時は。いかで安房に赴きて。犬士に就て里見殿に仕へよと。人のいひしかど。然しも一介の功もなきに。身の措処あらばこそ。安房へいかさまなれば。竟に這地に来つるなり。今里見殿は大敵あり。危窮存亡の秋と聞なれば。報恩は義に及ばざれば。勇士の本意とせべかんに。身一臂の力を勠して。我を帮助て。事功を立るとを願さるべ。其功をもて里見殿に仕へ。二たび家を起さん。這義誰何と請問へば。豪荊いらへて。聴々莞然として笑て。和殿の情願極て佳。里見殿は賢君にして。且仁政の

文溪堂藏

聞えあり。和殿その折をもて。義旗を揚なバ名あり忠あり。我いかにして帮助ざらんや。
先間諜児をもて。寄隊の来方を揣るべく。子院の甲乙穂北の郷人を召集へて。他們が
意見を聞べしとて。次の日件の毎を招鳩めて。かの義を告て意見を問ふに。衆皆死をもて
資んとて。各神水を啜り誓をなしつ。悄々地に軍陣の准備を做も程に。十二月の初旬に
なりぬ。その時豪荊が遣したる間諜児かへり来て。寄隊の来方を報るを聞くに。陸
地ハ國府臺へうち向ふ寄隊両大將ハ。如此々々之。又里見方ハ義通君を大將として。
犬塚犬飼防禦使たり。又行徳口へハ如此々々之。洲崎へハ箇様々々と。三所両敵の交名を
聞ぬる随に報しかバ。登時有種ハ直家荊們に談ずるやう。今我義旗勤軍の届る
所。洲崎ハ路遥にして。事の急に逢ひがたかり。行徳國府臺ハ便路にして且遠からず。
就中國府臺ハ寄隊數萬の大軍にて。頭定成氏両將なるぞかし。況て里見方ハ義通
君大將にて。犬塚犬飼防禦使なれバ。這隊に就て軍中を盡さん。然ハとて事をいそが

せるに。不虞の軍陣なる故に。左に右に東西整はで。思ふにも似ぬ日を過しつ。十二月八日の早天に。
有種并に法印豪荊を両頭人にて。四十八院の山伏穂北の郷黨ぞ子弟に至まで。
壯なる者二百五六十名甲冑器械ハ莚席に裹こみなどして。各々是を搭駝て國府臺を
投ていそぐめれど路近からねバ時移りて。その日申の左側に國府臺の近村に来て聞に。
隔昨日よりの閧戰に寄隊ハ酷くうち負て。今日しも內許我の両將ハ落亡て殘敗れ
たる狄敵ハ一人もあらざりぬ。但里見の防禦使ハ。いまだ當城にくだり来ずといふ。其言疑ふべくも
あらねバ。有種豪荊いへバさらなり。這隊の僧俗忽地に望を失ひ呆れ果て。いかにせましと
うち相譚ふに。有種一霎時沈吟じて。闘戰既に事果て今ゆく城に參るべからず。鄙語云。闘
諍の後の棒三昧只ハ胡慮に做らんのミ。困て憶ふに寄隊酷くうち負て。性方も知ず
做りしといへバ。約莫豊嶋に在る所の敵の城ハ。士卒咸耳怕して。脱路を見るなるべし。就中
忍岡の城の頭人ハ我郷黨の怨ある根角谷中二麗廉なるぞかし。他ハ貪りて飽をしらず。

民を虐げて罪なくして殺さるゝ大魚の細鱗を呑む如く。其惡箕田駅蘭二と伯仲を。
先や今宵那城を攻落して。谷中二を生捕べ。大塚石濱の両城も攻落んとの
義什麼と請問へば。大家ひそく諾ひて。開々究竟の使嗾ゆり。然らばいそげと矢斫の
河も。宮門河をもうち渡して不忍の池の畔に来ぬる程に。夜は丑三に傾りぬべし。酷く
走りしたるに。寒夜も皆汗に沼堪ず。端を止めて這里那里に立休ひ又相譚
ふに。豪荊聲を悄して。今這小兵をもて城を拔まく欲するに筋力をもて勝を取
かたうに。詭の計に出たるべし。其計策い箇様々々と詞急迫く呼知示せば。有
種自餘の僧俗も。ゆく者欲ぎるに。甲に偽くに偽く。大家其意を汲うべ。
有種豪荊。いべさうに躬方の僧俗二百五六十名。搭駝来たる莚裏をもて各鮮
披て。武器に身を固め。大刀を跨器械を携て。齊一脚を乱ら。走りて忍岡の
正門に造りて。城門を敲ら聲震立て。やをもて城内の人々誰うわ。今日の闘戰利

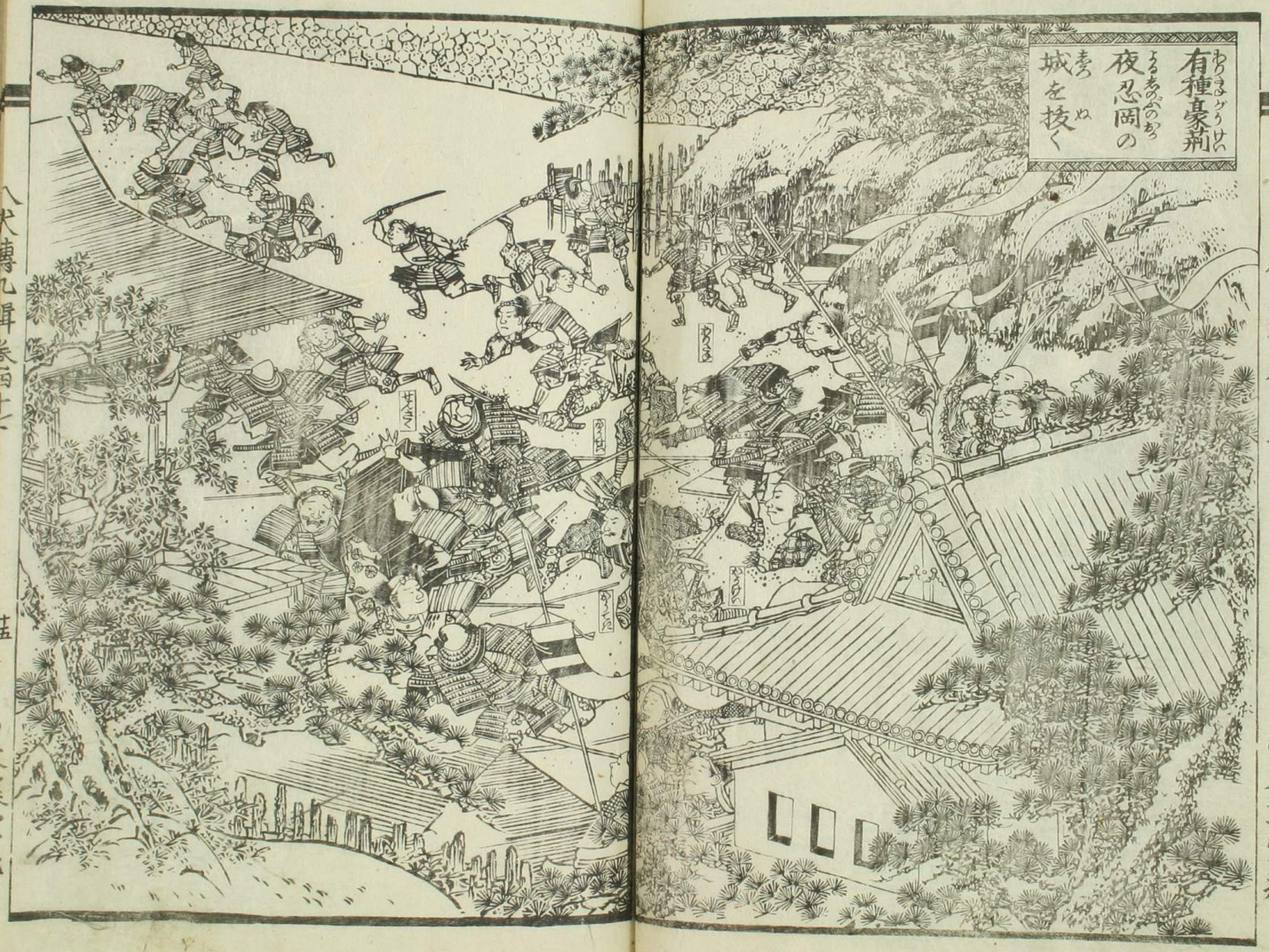
あるぞ。行德并に國府臺なる總領に傾りしに。御方の士卒幾千名欲陳没た
なる開ぎ中に。佞曹司朝良。辛に一方を殺啓さて目今當城に渡らせるぞ。ぞ。
奉らむやと。繰返しくいそぐ。あけ。その時這忍岡の城兵們い行德口に寄隊の士卒
幾名欲方僅に脱れ来て。寄隊敗軍の為体。朝良に辛くして近習の士に資ら
れて。両國河原の方に落さるゝ。御往方を知ぞとり。城兵是に驚騒だて。頭人根角谷
中二に告知せ。兵頭當場阿太郎赤耳九二郎小頭人宍栗專作ぞうも集合て商量まるに。
谷中二のゆう。里見の犬士を勝に来て。當城に逆寄ぞ人まるぬ這城に防戰ぞ。幾
ぞう拉べ所詮敵の旗の見えぬ間に宅眷を穂北の別荘に落し遣りて後易く進退
せんとて。猛可に城内なる婦幼に老兵を隷ぞして。悄地に後門より出し遣りける事慌
あて折るに。今又定正の嫡子朝良の敗績をて行德より脱て来ぬると。ぞく者誰う
驚ぎん。慌て城門を開むとせしを。這隊の小頭人宍栗專作。吐嗟とぞう推禁めて答ね

兵毎非如御曹司の渡らせるごとく。野干王の夜ふ甚麻ぐやく。ご虚実を質さびーく。大門を開くるもある。先御曹司と二の近習と容まるせて後ふこそ。御伴當を饒べけれ。角門よりうくと下知ふ子応をきる。卒先郎君入らせるといひて開く角門より。衝入る者る別人るぞ。落鮎餘之七有種と。誼夾院の住持法印豪剛及其徒弟両個の勇僧突面坊豪剛師椀坊豪剛。ごと喚做しる。武勇男剣法覚ある。四人齊一腰力を接くるも見甚守門の雑兵四五人斫仆と返せるふ専作ぐ戻腕托地と釘かけて斫られて苦と叫びも果ぎ。警居ふ撞と平張けり。是ふぞ駭怕る衆兵。敵あり敵あり。と呼りて逃るを透さび走蒐て斫仆ー又斫散を其間ふ外面る。僧俗二百五六十名角門より稠入々々豫て准備ふ携来る。中黒の旗豊島の旗を九尺柄の鎗尖ふ結附く。突と推建ゆ聲高やらふ里見の防禦使犬川犬田ぐ先鋒の頭人落鮎有種ふ在り。新附の修験者誼夾院豪剛ふ在り。と名告被け相喚りて三の城門投て攻る程ふ根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎老兵頭人既ふ皆鬼胎を抱きて宅眷を落せー折るふ果ーて敵ハ逆寄ふて犬川犬田落鮎ども。咸城内ふ攻入りけ。名告諸聲ゆえーよりへ。敵ハ既ままく怕ふて拄一拄も防ざふぞ良枝の呵子ふ群島の潑と立ッ像く後門より。辟を突て逃出れば城兵約莫二千有餘勇ふ雷推並てうち續ひてぞ逃去りける。然べ落鮎有種ハ思ふも似ぞ城兵の脆くて骨を折まぞもるく。今立地ふ怨を復して會稽の恥を雪めーんば。豪剛と俱ふ躬方の僧俗を勞て駄捕る所の敵兵を実検るふ。當城の小頭人穴栗専作を首ゆて刀瘡児死人七十名とれるのこ。這餘ハ皆悉落亡て一時ふ城を獲るける。丹ぐ中に穴栗専作ハ深疵ふれども死ぞ。他ハ根角谷中二箕田馭蘭三名と同悪ゆて。民を虐げて非義を恣よるる奸賊ふれば。儘殺ーく結束せく且城内を展検るふ婦幼も遺る者る。米粟尤コタくあり。聽て四門を守らせく却牢舎ふ世智介并ふ梨八夫婦及穂北の隣村る。荘客と其妻子弟毛。罪ふて緝捕れる者三十名を扶出ふ他ハ久ーく禁獄せ枝且呵責の笞ふ堪ざる

けるに。皆半死半生なりしかども。幸に命恙なければ。有種豪刑勦り慰めて准備の薪を與へ。皆囚室に臥せて。火をもて那身を温めしかば。世智介梨八夫婦はさらなり。其毎推ぶべく。陸獄の餓鬼が佛菩薩の救ひを得たる心地して。皆感涙を落さぬ者なし。歓ぶべきなりけり。斉が中に世智介は曩に小キ二と共侶に主の密使に立て時梨詩立寄ると。酒乱に己を忘れて那禍鬼を惹出せしなり。落魄一家隣村の荘客まで其餘殃に遇せる。罪軽からねども只是一時の口過にて。素より悪意ある者にあらねば。有種今々深くも憎まず。只其以後を警懲して。療養餘の人に異ならねば世智介は且怕且感服せり。聲を呑て泣けり。介程に根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等八千の城兵あり。防戦に心を慌て城を逃去るべしと。又た思へば後難の怕れあり。徑に五十子の城に参りて。箕田駆蘭二等に力を勠して。那里に敵を待んとて。其方を投て行程に。又那箕田駆蘭二は大阪毛野胤智に銚くも城を攻落されん。是見利金太布留川浅市等と俱に城兵に多く従へて。這方を投て来ぬるに逢ひけり。又只是のみにあらず。大塚の城の頭人。反橋雑記丁田畔四郎等は主の宅眷に相俱して城を落て来ぬ。三谷中二は欲ぐ今這二隊の封助を借りていざ又忍岡の城を奪復さんとて。駆蘭二雑記等に商量するに雑記も亦大の説を好て。然が俱しる女性達を。五十月の城へ遣して後安く做さんとて主の憲重憲儀の妻子と己等が宅眷は。老兵八九名を從せて那里へとて落し遣程に但見る西北のさとりして来ぬる一隊の敵兵あり。其頭人は正に是大山道節忠與なりを谷中二駆蘭二雑記等は。夢にも知ぬ只是烏合の野武士等が御方の敗軍を聞知りて。或は落人を剥畧べく。或は城を攻破りて不義の利を欲するなるべし。共那奴們を撃捕りて其威勢に乗じて。こゝ忍岡の城を奪復さんとて。三隊を分ちて四所に埋伏をなすなり。道節明相清英等に撃破られて。剰駆蘭二谷中二は生拘られて這里に牽来る。利金太浅市雑記畔四郎等は其隊の毎共侶に撃れる欲逃る欲存亡知ぬ做りしを然ぞ

今落魄有種。犬山道節が解知せぬる。那身の来方豪荊が義侠及當城を攻落し
ぬるまでの顛末。又生古の敵兵の招了ゆえ知られる。根角谷中二箕田馭蘭二友橋雑記が
落合しまでも。都て上の如くがわるれば。道節が逆ぞ毎が感歎の聲を沿断ぜ為が貌を
改めて。有種が向ひていふ。思ふが優る和殿の武畧豪荊法印の義侠胆勇まく
ゆるがるる美談る哉。就て這生口馭蘭二谷中二専作等が年来其君を惑して栄利を
欲りし。那民を虐けく。罪なくを害まるも甚しくと笑えり。然が今番定正が説薦
めて。善名の軍を起させて。人をも身をも喪ふ。皆是這奴們群小の致せ所と我等が異日
安房へ牽もて参らば。亦是館義成の御仁心ゆく肯免わんも知るべし。今速が誅せ
ざ。何をもよく勸懲を正さん。權且牢獄が係ぞ置く。明日八剣が行ふべしと。敦圉
猛く罵示せば。隊の兵毎阿と応て。谷中二馭蘭二専作等を俱が牽立く退出けり。
偖而犬山道節が。這地の人の趣と落魄有種の人をも。洲崎の御陣へ注進まく。

犬陜へも示し合せんとて。馳く呈書一通と。毛野が與ふる人間さへ遣るく自書寫めて心
利ける士卒四五名が事徳々と分付て。件の書翰を齎ける。先五十子の城が造りて犬陜が別誂
ふく八水路を洲崎へ参れとて。そが立てで遣りけ。偖而次の日。這豊嶋郡る。壮客百十
數名。穂北の隣村る。者毎を先が立て。忍岡の城が赴て道節が訴るまう。今番生拘せ
ゆひる。其田馭蘭二根角谷中二宛栗専作が我們が親兄弟の寃家がていへば。いざ那身を
賜りて。所切に亡人の怨を復ぎく欲しゆ。ナの義を許さゆひれ。と異口同揉が願ふぞ。
道節听々領きて。現が然もわるも。今這時が民の寃を解ぎもわるば。善悪応報の天理
空しが似ず。他們が情願が任せよとて。隨即馭蘭二谷中二専作を牢舎より出さ
せて。其壮客們が合らまるが撿使の士卒さへ遣ぎるば。大家都く歡び勇こて則馭蘭
二谷中二専作を受合りつ牽立て。馳て城外が牽ぎて。其罪を責詈りて馭蘭二谷中二
専作を一個々が誅ぎるが先を。所落し。足を所落し。胸を劈て大小腸を裂ぎ。竟首を



○東京圖書館藏

擊落さるゝ猶怨盡ざる壯客の悍く壯なる者毎に其尖を啖ふもあり。捻使則其首三級を梟首して速近に示さゝば。觀者日毎に堵の如く愉快とぞ稱えける。その時世智介梨夫婦。并に穂北の隣村人。宇舍に疲労て病臥せゝる者毎に其疾病癒り果ぬ。道節則其村人に是を渡して皆其家に還らしむ。大家其再生の恩を拜ず。喜悅の聲洋々と耳に盈て民の父母とぞ稱えける。その日法印豪荊に有種道節明相清英等に別を告て曰。下總に猶落鮎と穂北人々の宅着あり。野衲等ゝ暫く留るべ。身の暇を賜べしといひき。有種も道節も今さらに禁難く。則其意に任せるのみ。道節は只管に其軍功を譽ていふ。和僧今番の挿紀は勇士も及びがたく所々異日寡君に奏上すべ。恩賞望の隨なるべしと。其ちろてゆさもれば豪荊是を聞て然る望をせん。落鮎は俗縁あり。義に仗る所已に是ぬ。聊か力を勠て為に怨を復ゝしのみ。其義は本意にあらず暇乞して身を起して。一百有餘の黨類を咸召集給へ。そゞ立て。

俱して誼夾院村に還り。此譽ある者ども。是より後近郡近郷なる郷士豪民の善に與して。里見の德を慕ふ故に。道節が隊に附まく欲して。當城に來ぬる者。日毎々に夥かりけ。道節が軍威いよ〳〵壯に。一萬餘騎ぞ做りにける。當下有種は又道節に談ずるやう。當城は大人既に將とし。印東荒川の勇士あり。且軍兵に置しかねば在下ども居とも要る。必に我穂北の壯の根用谷中二ぞ。是を別壯にして。家作許めく建連ねて。とぞいふなる。今這時に會を復さぞ。孰の日を俟べきぞ。明日は故郷人等をねん那里に。うち入りのいとも敵倘殘居る者ありとも。獵場の獸に似たるべし。一個も漏さず擊捕りそん。と惱を道節勇と一譽て。其詩寔に志ろべし。遮莫敵を侮らば必や衍わらん我五百個の雄兵をもて和殿等を送らせん。戰飯軍用の錢財は當城内に多くあり。和殿の隨意なるべ。といふまゝに有種怡悅に堪ず。遽く退ぞ。穂北人等に那義を告て。准備風くも整へ。こゝ次の日の早天に落鮎餘之七有種小者二世智介梨人等及穂北人百四五名。大山の加勢の軍兵

五百名を前後に立て。騎馬許り九甲冑器械細に名狀きべく既にして有種に穂北の莊に近ぢく程に這里に根角谷中に宅栗專作等の宅着の敵を避て在るも多かり或は又那好黨に諛媚て利を欲する莊客賈竪の家を作て居るも尠からざりしに忍岡の城に有種に攻落されて谷中に專作に道節が隊に生捕られ竟に誅戮せられしと伝聞て駭怕れ慌惑して逃去るを欲ずして穂北の隣村人等追蒐て鋤鍬を以て撲殺すもの多かりとぞ。其事後に聞えける。然に有種は於是重ねて謀を凝さで故の莊園を奪復ひけるのみならず谷中に宅を建て倘新に廬舍を多くあれば其身はいちはやく郷人們に分ち與せて勝を容るに便りあらしめ四年を歴て郷人を幾名欲下總猿嶋の誼夾院に遣はして。高家荊并に子院なる勇僧們に多く東西を贈りて自他の宅着を召返せば有種の妻重戸を首として郷人の母女房老幼に杖に携て壯なる袱裏笠等を搭駝せり。稱子のみを掖て皆欲ずして帰れり。然けれども穂北は猶敵地なれば大山が加勢の五百名に并が儘這頭に在陣て久くあるまでに成ぬ。

然は這時下總葛飾なる國府臺の城なる里見安房太郎義通朝臣あり從軍の執事東六郎辰相杉倉武者助直元田税力助逸友継橋綿四郎喬梁真間井樅二郎秋李淵鷲手古内美容振照俱教二弘經あり。就中這隊の防禦使は大塚信乃戍孝と犬飼現八信道是なり。又行德口なる今井の柵なる両防禦使犬川壮介義任犬田小文吾悌順あり。其隊の頭人満呂須五郎重時肩持儀杖朝經大樟村主俊故満呂再太郎信重安西就介景重あり。武藏石濱の城なる登桐山八郎良子あり。同國五十子の城なる軍師大阪毛野胤智あり。其隊の頭人浦安牛助友勝千代丸圖書助豊俊小溪又小水門目堅宗等是に從ふ勇婦音音及妙真曳手單節鮠内葉四郎援岡猿八も亦這隊に在り。又大塚の城なる小森但一郎高宗木曾三助李元あり。又忍岡の城なる防禦使犬山道節忠與あり。其隊の頭人印東小六明相荒川太郎一郎清英等是に從ふ。按ずるに武藏に忍岡と唱る地方二所あり。古歌に詠る忍岡は即夏麿郡にて夏麿川又玉川小遠方ぢ又不忍の池の前面湯島の稍盡處の岩寄

を也不忍の名ゑ對さ。ゑてを也俗ゑ忍岡とゑ一名向岡是ゑ。ゑゑ俗稱ゐを知るべ。間話
休題又穂北の荘ゑ落鮎餘之七有種犬山ゑ加勢五百名を領てゑ在り。又相模ゐ新
井の城ゑ防禦使犬村太角礼儀ゑ。臨時追加の頭人田税戸賀丸郎逸時。岩屋八郎景
能是ゑ從ゑ。又鎌倉ゑ堀内雑魚太郎貞住ゑ。安房の洲崎の本陣ゑ防禦使犬江親兵衛
仁ゑ。政木大全孝嗣。姥雪代四郎與保。東峰崩三春高蟹船貝六郎敏繁。足須々利檀五郎
有數三四的寄舎五郎團平。天津九三四郎員明。磯崎増松有親。真塚紀三六。漕地喜助太
等是ゑ從ゑ。石亀次團太。越鄕三荳野の阿弥七。椿村の隧八ゑ亦這隊ゑ在り。盍主將義成
朝臣ハ大敵敗績の後。犬江親兵衛ゑ。姥雪代四郎等と俱ゑ。京師ゑ歸り來る。葛西の
閑戰ゑ軍功ゑ。政木孝嗣們の勇士伴富十數名を將て。昨日洲崎の陣營ゑ參りべ。
義成主ハ仁ゑ京師ゑ在り。一日の奇談及葛西行德口の閑戰の顛末さ。詳ゑ少知
ゑ。或ハ驚ゑ。或ハ感ゑ。笑れて。賞感特ゑ浅からぞ。政木孝嗣以下姥雪代四郎及新

参ゆゑ戰功ゑ。有皆見参を饒さ。其忠其義を譽さ。就中孝嗣次團太ゑ。曩ゑ
素藤對治の日も戰功ゑ。且孝嗣ゑ忠孝ゑ。隊内召所之今ゑ。犬江親兵衛と俱ゑ當家の
股肱ゑ。と名刀一口を賜りける。堀内貞行執達ゑ。且貞行ハ親兵衛代四郎ゑ妙真音音哉
ゑ軍節ゑ五十子の城ゑ。奇功ゑ。毛野ゑ注進の趣を告知ゑ。甲乙の會話を具ゑ
せ。ハ爾々ゑ。細ゑ。ゑ過ゑ。言省て漏ゑ。看官是ゑ本意ゑ。是ゑ先ゑ東峰春高
簿船敏ゑ足ゑ軍師大阪の密策ゑ。悄地ゑ捕てゑ。行德口寄隊の敵將谷朝
良と腹太刀自の代軍稲戸津衛由充ゑ。又犬村太角ゑ虜ゑ。敵將三浦義
同義武ゑ。義成是を陣中ゑ留め。駄稲村の城ゑ遣ゑ。次營ゑ預ける。ゑ孔ゑ内徒をゑ
見ゑ。ゑ賓客ゑ礼厚ゑ。日毎ゑ歎待浅ゑ。親兵衛ゑ。ゑ入り來ゑ。上ゑ。他を洲崎ゑ守將ゑ
ゑ。義成ゑ貞行を將て稲村へ還りゑ。ケ。孝嗣與保以下ゑ輩ハ皆親兵衛ゑ從ゑ。开グ
儘洲崎ゑ在陣ゑ。仁ゑ。ハ。嚮ゑ國府臺ゑ。使价を遣ゑ。一時ゑ。瀧田の城ゑ。ゑ

義実老侯弥〻大かたるゝぞ。疾見まゐく思ひのべども。猶陣中ゐ在るとて。時々食餌服ゝを賜ふて其徒然を訪せゐひけり。左右ゐる程今茲も將ゐ暮んとゝ曩ゐ水陸三所の大敵を同日ゐ咸敗北の後内顕定ゐ上野ゐる沼田の城ゐ在り長尾景春ゐ白井の城ゐ在り扇谷定正ゐ武蔵國入間郡河鯉の城ゐ在り。倶ゐ再戰の勢もゐ。諸侯離叛ゐ嘉ゐる者多志と呼ぶえ。かゝ義成主則下知ゐ今〻封内ゐ在陣ゐ要ゐるべしと。國府臺及イ徳口ゐる諸將を皆召返させゐ。然ゐ義通君ゐ大塚信乃大飼現八東六郎杉倉武者助田税力助等と倶ゐ生拘の敵將成氏憲房朝寧為景并ゐ齋藤盛実等を領て稲村ゐ凱陣せ。國府臺の城ゐ真間井樅二郎継橋綿四郎涅就鳥手古内振照倶教二等ゐ在て。故の如くちを戍ゑり又今井の柵ゐ大川壯介大田小文吾。是を破却して。満呂須五郎父子安西就介大樟村主肩持傳扶等と倶ゐ生口自亂憲重亂久を領て。ゐ是稲村ゐ凱陣せ。總兵一萬五六千名騎馬武者歩兵列を正して。甲冑華麗ゐ齊々たるぞとゐる者ゐ。

ゑれども生拘の人々ゐ皆是宛家ゐ貴介公子之二城の主將之囚徒をのゝとゝ〻ゐ。猛可ゐ數間の房屋を造立て其第一の房ゐ成氏第二ゐ憲房第三ゐ朝寧第四ゐ自亂第五ゐ為景ゐ房と云又憲重亂久盛実ゐ各其主憲房朝寧自亂為景と同居ゐせゐ房屋の徒然を慰ゐるをもわゝうとて。之入義同と義武ゐ天井を隔ゐ別室ゐ置ゐ。唯朝良と由充ゐ客房ゐ在らせゐ。宛放兎の如くゐて。歎待も亦重ゐ。この時犬江親兵衛仁も咸洲崎ゐ召返して那里ゐ遠見の士卒。二三百名を置れけり。義通以下防禦使諸頭人凱陣の次の日ゐ皆召集合て義成則正廳ゐて對面ゐ。西茶ゐ茶の礼を行ひて。這面の軍功を賞せゐ。立川清澄堀内貞行等も這席ゐ召與りけ。當下義成主ゐ家老一老臣堀内五大夫（犬江親兵衛大角犬塚信乃犬飼現八）を身邊近く召よせて各ゐ云ゐ思ふゐ。這回生口の人々ゐ皆是貴人城主ゐ我等ゐ慢侮せんや。昔源平の開戰ゐ平三位重衡生拘れて鎌倉ゐ囚置れ。時頼朝是と對面ゐて其不幸を慰問の義ゐり。其後宗盛虜ゐ〻て鎌倉ゐ呈送せゐれ。時頼朝是と對面

せぞ。他は則大臣なれども既に解官の罪人。是時に當て頼朝の冠位昇進をられば。抑平家は源氏の為に是累世の寇家にて。上一人後白河の奉為に是驕僭の乱賊。今他をもて例とまぐらぐ。我今主客の義ありて對面まぐきぞ。せざるべからや。各意見ぞまく欲。いふぞやと問まく大家阿とぞろに巫に答ゐるりける。姑且て犬塚信乃は辰相清澄貞行等に會釋して主に向ひて云ふ。諸老の御業を笑ぞして答まつる烏滸がましく最悼ぶべき愚意をもて稟上ん君今那敵將達に御對面の一條は実に寛仁大度にて博愛を極とは法べし。去られども。いまぞ和を講ぜずして。佛々しく對面わらば他いかにて恥ざるべき人を愛る心をもて。反て人を辱ふる事の宜なにわぶるべし。とゐへば親兵衛もまの議を好て現に戍孝が意見ぞ。愚意も相同那人々御仁心に感服の後にこそ。御對面わらまわしくいるれと。談れば貞行辰相清澄及莊介現八小文吾も。大家是に從ふて。ちろべしとぞ答ける。義成つらくうち斫く。今戍孝が意見に依衆議任地なるべ。権且對面の義を止ん朝夕の赴月三ぞの饗饌何ぞとて。心を用ひて我任まぞに客を愛る誠心を佞へよかし。就中小生充は其心ざまに賢良にて且人を知るよりあれば。莊介小文吾に受る。舊恩ありとゆへ。その故に他をば虜にまぐらぐ。ぞりを笠服大刀自の外孫なる。朝良茂つこ生掏らば他必忠義の為に死ぐることをいざべ。とをもて亂智。豫計る所あり。さて春高敷に足て他をも俱に捕寄れ。因て莊介小文吾を朝良由充の為に東道とまよの意をも宜く佞ふべ。這餘のゆへ任々と言遺もるく仰されば。大家俱に言兼て先這廳に果ぬる。任而又義成主。大川莊介大田小文吾て滿呂復五郎再太郎安西就介磯崎増松等を召よせく復五郎に願ひのまゐく。滿呂再太郎をもて養嗣ぞまべ。又安西就介磯崎増松に倘總角にて這回の軍功諸勇士と桔抗をなゐ。其亡親の霊の致ぞ所欲寔に奇ぞくとゆへべ。ぞをもて當家譜第の家臣とゐ。ぞくに増松に乳名のゐまぐ実名るゐにわくぞ。他に阿弥七とゐ。実父あり。又南弥六とゐ義父あり。二人に篤実人に義烈這親

みて個子あり。ちゝをのゝ名けて有親とも。我あゝろをゆよかゝと最懇切ゆ仰されば。
復五郎親子就介ものゝ敬びいたゝ増松の是等の恩言ゆ感涙漫ゆ喑ゝ俱ゆ言義を
禀ゝけり。其後又義成主ハ犬江親兵衛犬川荘介ゝ満呂復五郎石亀次團太越郷三西的
奇舎五郎須々利團五郎等を召出ゝ。又犬川荘介犬田小文吾ゝ。眉持兼杖大樟村主天
津九三四郎等を召聚ゝ。且宣ふ。汝達の戰功ハ既ゆ感恩食ゆ各秩禄ハ異日定め
らるゝ。就て大義ゆ背けれども。満呂復五郎ハ行德ゆ造りて。權且那地を治むゝ石亀次
團太越郷三をゝ次役とも。又西的奇舎五郎須々利團五郎ハ國府臺の城の小頭人とも。
其徒六十餘人と俱ゆ。喬梁秋李の隊ゆ就て宜く那地を戍るべし。又眉持兼杖大樟村主ハ。
身の暇を賜りて。大刀各一口と時服一襲を被けて其地の吏ゆ做され且其郷黨千百十
數名ハ都て三稔の調貢を免除せらる。又天津九三四郎ゆも身の暇を賜りて。恩賜の大刀。
時服ハ右ゆ同じ。其主上井理墨の助ゆ。いよく忠義を盡べしと仰らるゝ。その他阿弥七郎八

をも召させ給。這両人ハ葦野椿村の邑長ゆ做されて。且諸役免除せらる。是もゆ人ゆ暇を
賜りけり。猶この外ゆ功ある者。市川の依助西國河原ゆ向水五三太枝獨鈷索千吉ハ
参らず。他等ハ異日召させ給。恩賞ゆべきそ。先大既の制度を盡されゝ。是より先ゆ
犬村大角犬阪毛野犬山道節落魚餘之七等ゆ勝軍の趣ゆ各既ゆ其注進ゆよりて。
ゆも具ゆ知られ給を又いゆべくゆわくび。然ばとて仁君謙遜の心ゆ似げるゝ。開戰全勝の勢ゆ
乘せ給。人の地を奪ふ。人の城を奪ふゆわれ。他ゆ棄て主なき城を守らざるなきもの。
今茲も日數僅ゆ有徳一程ゆ犬川荘介犬田小文吾ハ稲戸津衛由充を叮寧ゆ訪
慰めそ義成の仁慈の心操を伝へ知せ給ふ。犬江親兵衛ハ小文吾ゆ心ゆ
赴ふとの遲ゝゆ満呂復五郎ゆ既ゆ逼りて免るべもわるゝ。軍師犬阪ゆ逆ゝ情地ゆ
善策をのゝ。東峰崩三鱆船貝六犬江屋依介等ゆ課て船ゆ迎へ捉せ給。當日ゆ小文吾
荘介ゆ。復五郎も知ぬ。敵の援兵なりとのゝ思ひ給を云々と解ゆ示せ給。由充ゆ朝良ゆ亦

今さらに大川大田が報恩徳義毛野が智計を感嘆し心程恥しく思ふ。又只由充朝
臣のこゝろ〻〻憲房朝臣成氏自亂以下の敗將憲重亂久盛實を伐ふと撓男萬夫を
物ともせざりし義同も義武も里見君臣の歓待厚く仁あり且しあるに誠心誠意に感服し
先非を悔ざる者もなく為に貌を更めて俱に帰降の心あり。定正が賢者を冒嫉しく無
名の軍を起せしを恨しとのみ思ひけり。但而新の手立かりて文明十六年に做りぬ春貴紀も
賤死も某の礼某の式とて寿祝の事敷く送ふ交加て盃を屬めるを。光陰の過るを覺ぬ
日影遲々と早晩に暖くて野邊の柴鶯鶯軒端に来鳴て梅の盛も悄過り。左右を程に
二月の末の頃有一百五十子の城より。犬阪毛野が使の雑兵両三名快船にうち乘りて洲崎に来
着し稲村の城に詣て毛野が意見一通を呈覽せ義成則在城の五大士（大江大塚犬川犬飼犬田）を召
聚へて其書を親兵衛に讀せて告ふに毛野が意見に道く臣亂智既に人百人の言葉を
以て水に數千の敵船を焼盡し亦義兄弟を陸に數萬の敵兵を斫て勝を房總

三州を兼山の安に回し。是豆我仁君の御本意なれ。実に已とを以ざるの。時今仲
春の中旬。月時正に向とも。時兵晝夜等分の美に。佛説にあり七月日を彼岸と。彼岸に
西方浄土に此岸に則沙婆に中流に是煩悩と。是をもて念佛者流に日に于て冥福を
修する時に則死人成佛の便りとを伏請に大師父に課く自他戰没數萬の士卒の為に
水陸の施餓鬼を修行せに且年来の軍役に疲労する他方の窮民丐児に米錢
多く取せ給へ。仁政正に死を起して且枯骨に及ぶとのべし。武藏相模に新井五十子。大塚
忍岡這諸城に軍用の為に敵の積貯へる米錢を是併民の膏脂を絞りし
者也宜しく是をもて彼施行に充べし。時に失ふべからず臣亂智悲泣哀悼の至に堪ず誠惶
誠惶死罪死罪謹言と書き了る。義成是を聞て汝等士の議をいふに思ふに同れと
五大士何とも分かず頭を低る。開が中に信乃先答てまうさもう。其に我に臣等も豫て
心に死ていへばうち譚ひしのこ。那珍客の歓待に。眼を沐ぞ思ばいまゞ稟上ざり。とい

莊介小文吾現八親兵衛も共侶ゐ毛野が意見に始より思ひ量りし所こゝに師父を召寄て仰合させばやと異同樣ゐ請ひしが義成然こそと黙頭て。扨も我風意も相同じ。大い去歳の十二月。那奇風の功成りし後。毛野が使と共侶ゐ洲崎へ赴りまゐらゐ。開ゐ儘延命寺へ退りて出も未だ。單方丈ゐ屏居て口ゐ讀經の聲を絶ず人ゐ逢ずとぞ。えこそ遐莫是ものの好事を告るべ。欣く参るべ。我今手書を遣て召寄て這意を沿させん。然いとゝ使者を走らせく、大を召せゐひ。恁而次の日。大法師ハ僕をのゝ従へく稲村の城ゐ来よけまゐ。義成則五大士を召合せく。件の一義ゐ及ゐを。大ゐ喜び果て禀ゐ。那四の劇策ハ。臣僧始より。好とせず。云〻と論じ推辭を。毛野大用ゐ口車ゐ載てゐよ。ゐ罪悪を釀させよう。ゐるゐ今罪障懺悔の為ゐとて。冥福を修させゐハ弟と眉を賣るゐ似う。人を殺をを不仁と知らば始より殺さずして好事をせざるゐ。然れども今ゐ至りて。經典供養の力拔借らず。何を以て無量の冤鬼を濟度做を據や

ゐ。況窮民丐児ゐ米銭施行ゐ經を讀て死を吊ふゐ猶勝より速ゐ御少太わて。ゐるべとぞ答へる。當下信乃がゐ。師父今番施餓鬼の道場師ゐ做りゐ伏姫上の御紀ゐ。那水晶の數珠をゝ必用ひゐべけれ其記數の八箇の玉ゐ我が感得ゐ。今ゐ至りて返まつるぞ。我兄弟ゐ全聚ゐて。當家ゐ仕ある上ハ必本ゐ返さゞ東西ゐをゐべけまゝとゐべ親兵衛壯介小文吾現八も共侶ゐ件の數珠ハ役行者の伏姫上ゐ授ゐ。靈宝物ゐいはゞ。然らば今番の大好事ゐ一百八玉具足ぜば這功德をゐ。那冤鬼を鎮ゐゐ足りぬべと。議ゐをゝ大いゐゐ。ぞ否ゐ今番ハ和殺ゐ感ゐの玉を借ゐゐ及ぜ最も不測のゐゐ。館ゐ出て召ねか。曩ゐ臣僧谷山ゐ奇風を發る。獲襲の玉ゐ懷ゐ藏ゐ懷ゐ。寺ゐ還りて取出て見けゐ怪むべ件の玉ハ毛度自然と裂破れ。内ゐ八箇の白玉ゐ。ゐ嘉ゐ。今ゐ抗見ゐゐ亦是其玉毎ゐ。自然と顕れ八箇の文字ゐ。奇ゐゐゐべゐもゐねべ件の玉を甲乙とゐ合せゐ讀見ゐゐ正に是阿耨多羅三藐三菩提と讀れ

ゝる。但三の字ゆ玉八一箇ゆを先多羅の下貌の上ゆ措て是を三貌と讀こ又菩提の上ゆ措更て三菩提と讀べ。有信れば一字両用ゆて九言るゆ八玉ゆて足りとも。按ずるゆ瑯琊代醉篇ゆ阿耨多羅を等見の義と注し。三貌三菩提を成正覚とも是則ちく正覚を成を見の義ゆて。正覚を菩提とも又一説ゆ阿耨多羅三貌三菩提ハ儒ゆ所謂仁ゆ同ト。人至仁る時ハ必是正覚を成して。菩提ゆ至らざる者る。譬ば孟子ゆ君仁れば不仁る。君義れば不義る。ゝいふが如し。人の一身五臓の神君至仁るゆ八ゆ脚の是を貧る者。敢不仁を做ゆ。是を阿耨多羅三貌三菩提とゆべし。是ゆ由て之を観れば八犬士ゆ感ゆ応る。那仁義八行の八の玉ハ人間所要の至宝ゆく死を吊ひ滅を濟ふ佛會ゆ相応ゝべ。この故ゆ易るゆ。這八の玉を以て今番の所用ゆ做さゝゆゝ是も亦役行者の善巧方便るべ。欲佛法不可思議廣大甚量奇々玄妙ゆいかゞやと言詳ゆ説示ゆ。件の玉を識數ゆ串ゆとゆ水晶の數珠を取出て見せまゝらもれば。義成主を首ゆく信乃親兵衛壯介小文吾現八も共伴ゆ。其事を听。其奇ゆ感じて。耳を傾け目を注て稱賛ゆ聲を齊くも。斉ゆ中ゆ信乃ゆ中ゆ。師父阿耨多羅の注釋ゆ。寔ゆ是精妙ゆく。雅俗の惑ひを醒ゆ足れり。昔後醍醐天皇敵山ゆ行幸の折。津守國香の歌ゆ契りゆまべゆる山も見つ阿耨多羅三貌三菩提のた祢や植けん。とゆこけるを。太平記第二の巻ゆ載ゝる。意ふゆ國香ハ阿耨多羅云ゝを只正覚を成ゆの義とゆ見ゝけん。國香を今も世ゆわらせく。師父の諺解を笑せるべ。他其是を何とゆいん。とゆべ親兵衛壯介も。寔ゆ然ゆりと応ゝ。義成の見て渡ゝゆ。數珠を受給りゆ戴て。現八小文吾と共伴ゆ其識數の玉を見て齊一ゆく感歎も。當下義成主ハ大ゆ向ひ。現ゆ那甕龍の玉ハゆる。邪物の手ゆゝ出るとゆべも。那奇風を發ゆ至りて我を邦助て大敵を擊退ける大功ゆり。其後蘭小玉と変て信る奇特を示ゆ。今番施餓鬼の發願ハ佛意ゆ稱ふ祥ゆゆわん。先この事を老母ゆ示ゝて施行をいそべべ。と仰ゆ信乃ゆ八ゆゝ沉く。然而辰相清澄と直亮逸友

文溪堂藏

孝嗣之同席に召聚へて。事悉く仏法に帰すべし。太家其寄に敬驚して嘆じて施行の一事を稱賛せ。
當下義成又課さらく。軍師亂智の意見に由て。今番施行の米錢は。皆敵城に運くべし。
則是をもて其所用に充てんと請禀しぬ。然れども我今作善を行ふに及び。吾敵の東西
をの〻執て其所用に充るべ矛と盾と売賣に似て。是人の財をもて。是を人に施せ己が德と
做さに同じ。我も亦這回の軍用に貯る米錢を。ことごとくに。施行の所用に做せ
時は。是自他平等利益の義にて真の施行といふべし。水ゆへ則船を浮めて衆徒讀經して両敵の
冤鬼を濟ひ陸ゆへ則施行して窮民を救ふべし。法會の則、大をもて導師たるべしと。
まことにもわづ施行を則毛野太用。道節高宗。李元良等に課て約莫鎌倉より石濱
まで武相の海邊にて。彼岸七箇日。是を做せべ。又下總に満呂復五郎真間井樅二郎
等に課て葛西行德國府臺にて施行せんの勿論なるべ。されども重時秋李等のこゝに
其人たるべきを小文吾國府臺葛西に現へ。倶に施行の頭人として士李城

なるて那地に遣りて重時秋李等に指揮せべ。又船施餓鬼の頭人に親兵衛信乃壯介
たるべく。政木大全木倉武者助。田税力助を副せん。這説を屋く毛野太用道節に徳ふ
べく。安房上總下總の僧俗に徇知せべ。又、大ゆへ固様々と言訂寧に課れば。太家と
ともく言兼して。その日の衆説に果ぬけり。却説當日なる隨に房總なる諸山諸寺の長老
道德施餓鬼の法會を帮助んとて。各従弟を徒へて延命寺に来會ひ。又ハ房總のこと
なるに武藏相模なる老僧智識も。皆その名を伝聞て倶に感悦せざるいなし。各安房に推
渡り来て法會に與らまく欲する者。百をもて計ふべ。大則其德を推て試に役を課る
と。各差わり。その時信乃親兵衛壯介。孝嗣直元逸友等と倶に洲崎の浦に施餓
鬼船百十數艘を相浮めて。件の大衆を分ち載せ。其中央なる巨舫ゆへ。大法師香
涼の法衣に烏綸子の袈裟装被て。手に白毛の拂子を含れる。打扮華美なるねども眉
秀鼻阜面色威わりて猛らるぞ。宛達磨の後身欤と思ふ可の骨相に衆僧都て敬

文溪堂藏

水陸道場
施餓鬼の
功徳窮民
冤鬼抜苦
與樂
きろハ
ぶんきち
ちゅうた
ぶんきち
きろハ
ぶんきち
ちゅうた

や。服を相讓らざる者ども。後方ふ八沙跡念戌喝食行童手爐を執り。如意を執りて相立者三四名讀經の僧一百名左右三側ふ排列る。船毎ふ幔幕舷帷を引渡して。舳頭ふ造り建る餓鬼架あり。過去七佛の名號及涅槃偈四句の幡を八隅ふ建て三界萬靈の位牌あり。種々の供物ふ至りて八細ふ名狀まべらべかくの如き施餓鬼船一百零八艘又伴船あり。齋船あり。三さびの食饍を堂る者是ふ從ふ又信乃親兵衛壯介并ふ政木孝嗣ふ倉真元田稅逸友等八身甲の上ふ朝服して各船ふ中黑の花號ある白旗を建弓笞前鋒炮鎗棒眉尖刀を飾措て非常の為ふ士卒各一百名を將て俱ふ乘て海上ふあり其船都て武藏の方へ汴りく。則墨田河を法會の始とも。第一日八墨田河より兩國河ま。第二日八兩國河より科草澳ま。是より將次弟を追ふ。七日八新井の澳より洲崎ふ至りて結願とも。船毎ふ衆一百名二六時中讀經の聲。蠅々乎ゝく蚊蚋の群る如。ふの時陸ふ八施行のみあり。相模八鎌倉より新井浦河まで。大村大角堀内雜思太郎頭人さて。或八城下或八港口ふ米錢計多く積措て。老兵士卒是ふ與る。又假名川より高瀨まで八大阪毛野浦安牛助。千代丸圖書助等是を行ふ。小湊又小水門と作る目鏡内業四郎等小頭人より。又大塚礫川の邊八小森但一郎木曾三介兩國河原八鞳船貝六東峰朋三ふ五十三天素を吉を副とも又行德より赤所深川八犬田小文吾頭人ふて滿呂復五郎小頭人より。石亀次團太越鄕三等是ふ從ふ又國府臺より葛西亀蛙八犬飼現八頭人ふて。真間井樅二郎継橋綿四郎是ふ從ふ浦鷲手古内振照俱教二小頭人より。又墨田河の西河原石濱の城の下ふ登桐山八郎頭人ふて老兵士卒施行ふ與り從ふ者尠ろ〳〵む。又岡山の壘の頭人鳥山真人等も。出て這ふ與る者。都這數箇所ふ積措れる米錢八猛可ふ小山の出來一像く。料奴あり。撿鈔あり。施行を人別ふ米一升錢五百文と定めらる。女子と小児八その半分を取らるとの。夫役の莊客。其地の村長等ふ相從ふ者枚舉るふ遑あらべ。介程ふその年来軍役ふ疲れ果て。家を喪ひ子を售。妻奴子離散して。饑渴ふ堪ざる。他方の窮民乞児裸草児八老るを

扶け。稱を掖ケ或い赤子を馳敗嚢を引提て。陸續として来ぬる者。蟹兒の甘えに聚ふ
ゞ像く。其米錢の妻ゐて施さゞ東西も亦過分ゐ胆を潰して感涙を流すもあり。
ゑを戰して拜むもあり。徳を仰ぎ恩を謝し。其米錢を賜りて還りゆくあり。来ぬるあり。彼
岸七日を涯りゐて施を吏い敢泰らを受る者ハ嗟来の怨を。今戰世の暴虐の
中ゐ。這活阿弥陀も在せ。欣とて喜悅の聲洋々と耳ゐ盈ざる日ハなりけり。既ゑを結
願の日ゐ倣りしゝ。大法師の施餓鬼船や。新井の澳ゐ經續果て洲崎のうらゐ漕りて
来ぬるハ。隨從の一百余艘い相距と遠ゝ。導師の船を囲繞しいよ〳〵讀經の聲聲。
衆口のヨゝめるも只一舌ゝ如ぶ如く細大音聲口調錯ぬ。其聲龍宮城すで暢ふべく。天
衆も越ゐ来向て這大法會を資ゝるべく。江河の舞介波濤を用ゐ菩提心を發
らんゐハの七箇日雨ふゝぎ。ゐの日ハ特ゐ海暎く。虚空ゐ蕭然の風ゐけぶ潮水平坦ゐして。
眠鴎沈ぶ幾群の和鳥い俱ゐ巣ゐ羽を斂め。磯松ゐ集る老鶴いれが為ゐ来漁らざ。

ゐの見稲村の城内ゐハ里見義通御曹司。舍弟の君次郎宮腋子と共侶ゐ洲崎の浦ゐ
置れる。望洋臺ゐ出るハ両家老東辰相。荒川清澄又姥雲代四郎。白濱十郎朝夷三
弥七浦三郎満吕再太郎。安西就介。磯崎増松等伴當ゝ。又十條力二郎十條尺八
胞兄弟。ゐの時堀内許ゝ召よせられ。西君公達ゐ見参ゑまつりて扈從ゑて君邊ゐ在り。
年尚二五ゐ足らねども最大介。ゆゝるを人見ゝ譽ぬいるゝけりゐの折をゆゑ敵の
敗將。許我の成氏主并ゐ両管領の子息憲房朝良朝寧千葉自胤を首ゐて
稲戸由充三浦義同其子義武大石憲重。長尾為景原胤久齋藤盛実等。
俘囚ゐ倣りゐの地ゐ在る者も欝散の為ゐ皆饒されて出ゝ左右の假屋ゐ
在り。敬言固の士卒ゐゐ妻かり。義通先諸の敗將ゐ對面して礼ゆ〳〵。親の誠心を
舒傅ふるゐ慇懃の詞を罄さる。ゐの故ゐ犬塚信乃犬江親兵衛。犬川荘介
政木大全孝嗣等ハ。義成主の命ゐゝり。船を洲崎の浦ゐ返して。ゐの日の待客使ゝり。

當下朝良朝寧憲重ハ孝嗣を見て蓋る色あり。孝嗣も亦去の折を泣く。いかゞ欲去るなるまゝれども憚りあれば外々にて。賞待を致さのミ然る程ハ夕陰西ふ斜ふ〻く。法會の讀經果ゝかば、大法師ハ身を起して。舳頭る餓鬼架ふ。うち向ひて香を焼水を賜け眼を閉合掌して。舊臘八日水陸三所ふ戰殺ーる。自他の萬靈施主里見殿の所願ふ。よりて經亮讀誦の利益違いぞ往生得脫一蓮托生等見菩提と念ゝ且偈を唱る者五言四句。其聲清亮ふして高ければ上ハ紫微有頂天ふ届るべく。下ハ金輪捺落迄。皆えやもうむと思ふ可ふ水と陸との衆人ハ愕然とうち驚くまでふ感眼も遥ふ長視る。當下ハ大阿耨多羅三藐三菩提の識等ある。數珠を取出つ推揉て。又偈を唱へ章を誦ー。念佛十遍聲の中ふ。數珠をうち揮りうち拂ふ縱横ニ。導の法力ふ奇ーなる。識等の八の玉を串ゝ。數珠の緒弗と振断離られて。海へ爽と入ると見へけ。那時遲ー這時速ー。渦く潮水ふ波瀾逆立く。百千萬の白小玉忽焉として立升る。白氣と俱ふ中天ふ冲りて。宛衆星の。烏夜ふ晃くふ異ゝ〻ゝ。又其許多の白小玉亦只數萬の金蓮金華と変ゝて。赫奕光明繫然沒日と共ふ西ふ靡きく。搗銷も如く見へ。そる隨ふ。天ふハ殘る。二藍の瑞雲の中ふ音樂交えて。暮果るまで奏々う。今這奇特を目擊せる者。義通主從大士の每。稲戸由充。敵の敗將成氏憲房。朝良朝寧自亂いさゝ之。義同親子。憲重亂久為景盛實ふ至るまで。俱ふ傲慢の角折れて。両敵戰死數萬の亡魂。拔苦與樂の利益ふ遇へるハ正ふ是里見の仁義と。大法師の大功德ふ。あゝなと孰うハべるやとて。感嘆敬服せざるハ。為ふ貌を改めていよ〻後悔ふ。因く憶ふふ。甕襲の玉ハ地水火風の四大ありよ〻其風を發ふふ及びく兵燹人をして水陸る。大敵を對治

すり。是其所用四大るゝぢや。且始へ八百比丘尼ゐ獲られて風を起した善ゐ
災ー。後ゐ毛野ゞ八百八人の籌策を資けゝり。是八百の正對るゝぢや。且阿
耨多羅三藐三菩提の九言八箇の玉ゐ変りてハ萬鬼を濟度の利益あり。
恁まべ八犬八行の仁義の玉ゐ伯仲を初邪物を帮助ハ。那宋人の不亀まの
藥の比喩ゐも似るべー。畢竟ー大ゞ水陸道場大施餓鬼の。本願成就
まそ。後の話説甚麼ぞや。开々又下の回ゐ。解分る成聽ねかー。

作者云前ゐも以る如く。本回ゐ曩ゐ腹稿のまゝるー時。全部百八十二回ゐ
定めそ。結局まその題目をゞー措記かべ今綴るゐ及びて題目外の話説ゐ
と成るぢ。ちの故ゐ本輯四十六の簡端ゐ出せー附録目數ハ條これあり道節
湯嶋ゐ両奸賊を擒ゐまる暇里見の三陳凱旋衆説の暇を照ー見るべー。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十七 終

南總里見八犬傳第九輯巻之四十八

東都　曲亭主人編次

第百七十九回

照文歸東ーて房總福多ー
東西和睦ーて両國津を用ゝ

仁人仁を欲ゐれば仁ゐ至る仁外ゐわび仁必其人ゐ在義外ゐわび義必其人ゐ在求ると
求ざるのゝ。里見安房守義成主博愛仁恕の心もて。水陸の施餓鬼果ーかべ。大法師を
首ゐて素會の大衆數百口。次の日稲村の城へ召登され。義成隨即對面わり。齋を
賜り布施を奉る。其實待浅ゝゞ。各身の暇を賜りて。咸其寺ゐゞ返されゐる。是ゐりて
犬江親兵衛も暇あるとゝ。瀧田の城ゐ入り來ゐ。姥雪代四郎と共侶ゐ義實老
候ゐ見參ーて君恩の辱なを手ーまりるどもめ。當下義實主ゐ。親兵衛が京師ゐ
ありー奇事。且今番の戰功の事の顛末又代四郎が三河ゐ。荀子崎の賊難と京師

ふとも親兵衛の帮助ふ倣りーみまそを猶詳ふ罄さきて甲ひとるく听のふふ先茶を賜り果子を賜り且饌をも賜りて終日ふーとゝまぐ飽ねば其次の日も次の日も只這老少両個をのゝ召せく長紀春の日の詞敵ふ来ぬひろり。然び又直塚紀三八ち蜑崎の家ふ赴くそ則主人の女房ふ京師ふてあるーみ固様々と報るのゝ曩ふ照文ゆ犬江親兵衛を迎執ん為ふ二さび使を命せられて京師へ赴く水路ふて類の怪異あるーみ往日ち屋八郎景能の注進ふく其大槩を知られのゝ後の安危を知ようもなく今ふ至て信ふけまバいろふくと思ふのゝ胸安らねば紀三六も倶ふ額を病ゑめて慰め難つ過ち日の春いとづふ暮んとも花落て若葉做も蒼山近く見る序ふ懐日ハ遥る。憂苦をやるかゝるりけり。有徳一程ふ當春三月八日ふ蜑崎十一郎照文ち恙もわゝ京師ゆり。帰帆の告あるーかゝ義成主い欲びて西家老辰相清澄并ふ犬塚信乃。犬江親兵衛。犬川荘介。犬飼現八。犬田小文吾政木大全。於倉直元ちを召聚へて専他を俟ゆ。

程ふ犬の目照文ハ刀筆吏大岸法六郎と倶ふ。鞍兵伴當夫役们を領てかり来ぬ。其船洲崎の港口ふ果ーハ今朝已牌の時候るべ。是ゆ路次をいそぐ。約莫三三時程ふ風く稲村の城ふ参ーかゝ義成則衆議聽ふて對面わり。法六郎も召せられく照文と倶ふ見参を両家老五大士ゆ侍坐て其言を听せらる。當下大江親兵衛を君命ふあり找を出て照文ふ向ひそのゆう蜑崎生近曽我鄙東の美ハ後ふて来るべけ文曩ふ遠江灘ふく和殿の船ふ類怪の憑ねけるよりハ故わゝて既ふ聞ー召ぬ其美を則箇様々と田税戸賀九郎と芦屋八郎ちが主僕十餘名新井の浦ふ漂着ーと奇功わゝー事の趣の其大畧を解示ーと和殿ハ亦何ちの故ふ京師ふ久ーく淹留ゑる。鄙帆の遲かりーハ甚麼ぞやと問へバ照文然い逆時景能のゝハゑも臣ちも故わゝて岐知りぬ。其美ハ後ふ稟上ん既ふ知ー召れる。那類怪の戸解けー時臣ちが船を西を投て走るを一日一夜津の海近くゆ程ふ就風猛奇ふ吹起ゆ檣を折り楫を摧ち船覆らんと

志ぬる者誠番といふことを知ねば人我生るゝ地なく波と風とに儘〻漂ふこと又一日一夜。風波やうやく歇りて我船は神風の伊勢の阿曹に寓ふけり。その地は則伊勢の國司北畠殿の封内にて陣題網曳平大夫周魚と喚做す者の沙汰にて半死半生の我們主僕を浦の守屋に扶容させ。醫師并に漁夫等に課せて看病等閑なく一個一個に湯液を薦めて勦り丁寧なるに付きまして我身夫役に至るまで死ざるとなるされども。船に入金子と方物の最多くあるを訝りて周魚悄地に思ふやう他国は鄉に相告て安房の里見の使臣なりといひは必詭言にて實は海賊なるべしとて敢て一人も漏さとなく緊しく牢舍に繫措せて来由を國司に訟けり。然は是等の穿鑿に去歳は果敢なく暮んとす。有徒一程に扇谷山内の両管領諸侯を連孫兵を合せて館を圍繞の風聲那地へも傳へ聞ぬ臣等はいかゝ胸安らべいで身を免れて徑に還りて御先途に逢ばやと思ふのこと計の所を知ねば口入沼館の御印章を賜ふ。修善寺紙を含ませて。

網曳周魚に示〻。里見の使臣なる照据に做せども北畠家と一ならびに書札の往来なるに故に周魚い其を疑も信とせず放ち還さべくもあらざりーに其頃北畠殿と東国戰執まる。敗軍の艦海を渡て這地に来ぬるもあらん欲とて海邊の戍りを固くあり且間諜を武藏と安房に遣て両敵の勝敗を備に知まく欲し。今茲正月下浣件の間諜兒毎に多氣の城に入りあり両管領敗軍の趣を聞きて大阪犬村犬山に北るを走り武藏に渡て五十子新井大塚忍岡の四箇城を輒く捕て事の顛末。又行徳國府臺の戰に我御曹司を首めて犬川犬田犬塚犬飼の武勇智計をもて敵將多く虜にせれ。山内顕定主と扇谷朝良主と葉長尾の敗北まで具に注進をなすとの事の便宜は是のごとくなり。臣等去歳の初冬に京師へ使を命ぜられて船路を西へ赴かる。其秘事さへ間諜兒が探り知る據もありけん。都北畠殿へ告禀まをしたのち後に知られけり。是ふたりの臣等が言の

偽詐なるぬ成ぬ。母なほ悟られけん。周魚が見せる御印章をよく認る者あるかべ。いよく那里の疑ひ解けて北畠殿下知もなく。里見が原是南朝の忠臣が我先祖と同義烈の好あり。今八山海千里が分据なべば疎胡越が似まじども。其家臣なる者の渡海幸なく破船して我封内阿曹の浦が寓りを反て疑ふ禁獄久くなるまでが留め措しを無慙なれ戻く異船もて其投方へ送り遣もべき者とあるかが。網曳平大夫周魚奉りて臣なる主僕を牢舎より扶け出なつ。巡りて國司の仰信々々と事の情由を解なつ。則巨船一艘が所持の金銀方物まで一箇も遺なく返し載き且舵工高師十餘名を假りて船出を風が儘されて深切初同ドかるべ臣なるが欲びいふ。なもわが且肚裏が思なう。我君天の資がよりて水陸の大敵咸敗賊しと房總幸異の空えるが今さら這里より船を返し安房いなんい要なる所行なり。然ばとて大江ち既がかり参りて國府臺の闘戰が奇功あり

といふ。なも亦多乳の闘謀兒が國司へ注進せしなぬ。然らば京師へ赴くとも。是も要る所事なるべいふ。せまし。と分よりもなる。左さま右さま尋思をえぬれば。究竟の一策なる所がわべなの折をもて京師が上りて両管領の暴徴を大兵をもて我君を伐滅さまく欲をる。闘戰の顛末を室町殿が告奉り天朝が奏聞を經て調貢の金子と土宜を公武二庭が献らば我君忠恕孝順なる手柔の御仁心なの時がえも顕れて室町殿がも。朝廷がも其私なる誠心を知え召るべ後々まで首尾よくなるべと思ひ沿て法六郎が信々と意表を示しつ。國司の恩義を細曳周魚が謝し且別を告て我主僕數十名一人も恙なるなく。那巨船がうち乗と纜を解く旦開の順風が西を投てで走らせる。信而二月の初旬が至りて船浪花津が果かべ隨即那津が旅宿を投めて阿曹の船ち船工高師なども俱がかへ遣しの却我伴當の心利なるを。両三名悄地が京師が遣しと事の便宜を拐らもるが。

當春京師の管領政元主、故ありて罷られ給ひ畠山政長主一個管領となり給ひぬ。亦幸ある似う。因て大岸法六が機密を示し心沿させて那御印章ある紙を用て室町殿へ進らせ給ふ。呈書一通と奏啓の上書をさへ形の如くふ書寫させて。調貢の黄金土宜を目録に合せ配當して長櫃幾箇に藏め去を主役に早せ京師に上りて去歳の秋相識れる客舍を宿とし次の日大岸法六と倶に朝服を整へて伴當夫役を従へ〻室町殿へ参上る。法六郎を副使とも田税苫屋の両人も那類怪の故をもて遠江灘に相別れて御使に人足らねば徒而臣等と法六郎等が管領政長主に就て先館の御書を進らせて且禀もらく。寡君義成年未仁政を布施て民を拊國を治めて敢隣國を犯もとらず常に上を敬ひて調貢の礼懈ることわづか。関東の両管領定正頭定其政公等も叨に私怨をもて諸侯を連れ兵を合せて義成を伐まくも。義成素より罪なくて罪を連帥に沿て脱る路なく。房總偏小の士卒を率て三路の大敵を防戦ること。只一月にして勝ちを沿て水に敷千の戰艦を燒滅め陸に數万の大敵を敗走せり。是併蔽藩の八犬士犬阪犬塚犬村犬江犬山犬飼犬川犬田など喚做す者の智計武勇によりて。大敵既に迹を埋めて水陸の路開けぬ。使臣蛋崎十二郎照文大岸法六郎澄妙等をもて隨即微功を訴まつりて黄白方物を貢進す。願ふは冀く御制度ありて。両管領の暴を禁め給へ。東國の大小名和平して國民塗炭を免れなば。獨義成の欣びのみならず。八箇國の良賤男女咸柳営の御武徳を仰まつりて家舞戸謌置酒して太平を樂むべし。なほ幾を以て穏便なる。御下知をこそ願ひけれ。是則義成が呈書に載る所陪臣照文等が意見をもて高禀をかわるがわる。いと宜く御亮査あらまくのみ。かうのみなれとかをるく愁訴して。則室町殿（足利義尚）へ一千金東山殿（義政）へ一千金管領

政長及當時の権家伊勢氏を首めて黄白の贈あり。土宜方物も形の如く。數を盡して使札の礼とも。政長則其義を容く。且つ遠国兵乱の様を上へも既に聞食て驚き思召す所。房州の秘訴実に是其理あり。別又貢進の礼屢ゐて忠誠を表せらる。今さら何等の疑ひあらん。その義を備へ上て褒賞上意に依らん旅亭に退りて御沙汰を待ねと。心て照文等を返へ遣はす。却照文等を逗留の間。摂録へも廻勤して朝廷へ貢を献り搢紳家へ人情も先例にあらて漏さるし。小程に室町殿へ那訴を聞食て管領并に評定衆を召聚へて詮議あり。里見義成は是謹慎の君子にて。貢進の礼両三番に及べり。是にあらて之を親れば今秘訴する所情願忠義を知るに足り。されども子路なきぬ者の。片言をもて孰か。訟を定むべき。風く間諜児を武蔵と安房へ遣して。那両敵の善悪邪正を探らせ。あらべくもやとなり。衆議一決まさりしかば。義尚則政長に課せるよりあり。政長是を承りて。退りて駈く間諜児を東へとて遣る。佞而月の初旬に至りて。那間諜児等かへり来て。定正顕定両管領の非義を告る事具に。且我館の御仁心并に八大士諸勇士の才幹武畧戦功大義の一伍一十を。ものがたり隨に稟上しとの。その義も後に洩れ聞えて。然れば室町殿にも重て詮議を遂られて。褒貶賞罰の制度あり。けん照文等を管領邸へ召よせて。政長則上意を伝へる。這回房州の秘訴既に其実を糺す。あるをもて御使を東国へ遣されて。定正顕定を。御譴責あり。房州と和睦仕るべき旨を御下知あるべし。汝等は御使の郷道を仕りて。倶に東へ退りねと。御教書を遞與されり。事の便宜は是のみ。掛向は最も畏き天朝にも。我館の御忠信と。八大士の大功を感思召よりあり。勅使を遣さるべと。ものがたりけり。是にありて秋篠将曹廣當を勅使代に倣されて。室町殿の御使熊谷二郎左衛門尉直親と共に。伯に安房へ参向さるべと。介程に件の

西御使秋篠廣當。熊谷直親。伴當を多く領て。三月十二日に啓行して。岐岨路より。先上毛に造らまくを。這時山内顕定も。上毛沼田の城に在り。又長尾景春と同國白井の城に在り。又扇谷定正と武藏なる入間の河鯉に在城をとりて。其笥え紛まがひしに。那三將に上意を示して。其罪を譴め以後を儆め。羔服和平に至るの日。西御使を其家臣等を將て。水路を安房へうち渡して。上意を傳ふべしと定めらる。是によりて熙文等は上毛より西御使に相別れて。那敵城へ立よるべ登時熊谷直親を照文に示していはく。汝は風く安房へ退りて。その戈を房州へ傳ふ。又武藏相摸なる。新井五十子忍岡の城にもとりとり守える。三犬士にも笥示して。退城の准備を做さしむべ。とある。中途より其の指揮に儘せて。臣等は法六郎と俱に伴當夫役を從へて。昨日五十子の城に來つ。件の首尾を大阪毛野等に告げ。かゝ。毛野等ぐ欣びいはくもわび。躰て忍岡と新井の城へ使をもて。道節大角に傳達まし。その他大塚石濱の城なる。登桐三八郎良宇。小森但一郎[illegible]宗と穂北なる。落鮎餘之七有種に。別に使をもて必通達まべとなり。毛野又照文に談ずらく。室町殿の御威德もて西管領美服せば。那御使秋篠熊谷必當地に來着して。水路を安房へ渡さるべ。其折我尚智は西御使の案内に立て。稲村の城にめぐり參りて。和殿に風く歸城して。その戈を館に告まつりね。その余の人々。徒々と。後の進退を解示して。酒飯を羞めるどもの程に。日は暮て順風なりけるに。柴浦に維せる船に臣等を主僕を載て。波の上安らかに通宵走る風のまゝに。洲崎へ歸着ぬと。言詳に告稟せば。義成主を首めて。親兵衛自餘の四大士三家老憶ども皆うち笑れて。奇也々と稱賛も。斗ぐ中に義成主は。特に怡悦に堪ずもありけん。照文を身邊近く。我まさに宣ふ。料らざりける汝の捍禦。是第一の奇功。八犬士に伯仲もといふとも。過ぐるとまでぐるぞ。現に禍福は糾ふ纏の

如。約束倚伏の至る所事塞翁が馬ならぬかな。初我照文を使を課て重く京師へ遣せ。仁を迎へ執せん為こ然るを仁を使を俟て。おのづからかつ為て且葛西ゐて軍功あり。又照文ハ風難ゐ船を破られ漂泊して阿曹ゐ去歳を暮し。去の春更ゐ京師ゐ上りて我為ゐ計り沼て大敵和平の時宜ゐ造るハ是我素懐を果せる所以其績抜萃なり。勸賞ハ異日ゐわらん是を當世の褒美ゐて。急ゐ傷を見かりて刀架ゐ措れる刀をもづから揚て卒と是を與へ給ハ照文ハ阿と忘かりゐ膝行頓首受戴さて去を過分ゐ御賜鄙語云衍心の功名ゐ忘ゐ。冥加ゐ餘る畏さよと凛ゐつ些退ゐて。却三家老と五大士ゐ君恩を謝ゐ。當下大岸法六郎も御目前ゐ召出さるゝ。先ゐ照文ゐ従ゐて副使をよゝ去りとて。褒賞の詞を賜りける。甲乙面目身ゐ餘るを。清澄さゝと執合て。且りゐ。去歳の冬照文を。京師へ遣さる時呈書を齎せるハ。吉凶料りゐけるハ。那地ゐ到りてのせよとて只素楮ゐ御印章を倣されて渡るひゐ法六郎さ附られ。後の便宜ゐ倣りけるを。神ゐらぬ。と豫より。知るよゐ。紀とりハ辰相然こと応へく。笑くゐ如ゐ阿曹ゐて。那疑を解ゐるゐ。御印章ゐて。又京師ゐて蜚蠊ゐ思ひの隨ゐ計り沼て。御書を自由ゐ寫せるゐ。御印章ゐる故なるハ。其妙さらゐりゐべからぬ。と。譽ハ信乃ゐ親兵衛ゐ并倍ゐ。うち點頭く。事皆人意の表ゐ出ぬる。十一郎の揣る所術よく事の数ひゐ。是我君の御威盛德と伏姫神の冥助ゐわらん。左ゐも右ゐも延蛋崎生の金玉ゐ。ゐ云ハれと。執合ハ壯介現ハ小文吾ゐ感ゐて己ゐ。現ゐ延蛋崎の新智玉ゐ。必や犬阪ゐ一階を譲るべ。と稱く笑局ゐ入ゐ。かゝと謝ゐける。當下義成ハ又照文ゐ課ゐ。疲ゐ瀧田へ罷歸りて。京師首尾を老館ゐ徒と告ゐ。さゝる欽びゐ。我ゐ

思ふに那御使の来著まで猶數日の暇あらん法六郎も宿所に退りて後の勤に
就べき者に辰相清澄這意を沿く宜く他をを勤るべしと例の仁慈を示すべ
大家いよ〳〵感服して其の日の席に果にて是ありて稲村の城内に京師の御使を
管待の准備遑なく旦暮して十有餘日を歴ぬる程に有一日五十子の城より犬
阪毛野に快船の使に消息を齎して両家老五犬士等に報るゆう這回参向の
勅使代秋篠生并に室町殿の御使熊谷生に両管領を御譴責の事果て
近日渡海の堅えあり。両三日に過べからず其御儲をいそぎ設べし亂智妄内を仕
らん。急急如律令とあり。かゞ義成是をうけて。両家老辰相清澄及信乃
親兵衛に壯介現に小文吾等を召聚合て商議あり。且課るゆう。那御使を立る
とも五十子に敵城あり。又在る所の浮宝に皆是戰艦なるべし。其汚穢なる物を
見て那人々を迎んに不敬なる故に親兵衛と照文を。洲崎の浦なる巨舶五
六箇と士卒一百五六十名を率て。那御使を迎べし。又信乃壯介現に小文吾に這
回の饗應使とて六郎兵庫助もまの意を沿て旨を照文に伝ふべく。又毛野に使
に回翰を含らせまの意を沿さまべし。事忽緒にまべからず。と捉ていそぎ
みぞ大家都てあろ沿果て次の日親兵衛と照文を。准備の船を找めて。士
卒ばるく早天より柴浦を投ていそぎける是よりの後幾日もわらず時に四月
十五日京師の御使秋篠將曹廣富。熊谷二郎左衛門尉直親に儲の船に
うち乘て。洲崎の浦に来著て。従ふ伴船五六艘犬江親兵衛。蜑崎照文に
別船に乘て先に找て犬阪毛野に後に従ふ這三士の従者も勘らべ既に港口に
造りて有司地方の小吏人们出迎へて。前駈して稲村の城に案内まの儲の
旅館に詰待て饗應使犬塚信乃。犬川莊介。大飼現八犬田小文吾助役
政木大全も両御使に拜謁して歓待大實の礼を以て。毛野親兵衛照文に俱に

義成主の身邊ゑ參りて報稟を乞あり。義成いと欣びて。大敵既ゑ羨服の
笑えある。両御使来臨を忝くも。對面ゑ必明日るべし。ちらうんゑ今宵我々く
おゑ留在らせる。滸我殿以下の敵將をゑ對面して愚意を示さるべかりも。
先這一箸を急ぐべ。と詞安るく吩咐のゑい。毛野親兵衛照文をゑ敵異議を
言兼して。退りて辰相清澄と。信乃。荘介。現八。小文吾。并ゑ政木大全をゑ言を
傳へく共侶ゑ事の准備をゑうけ。徳而成氏憲房。朝良。朝寧。自亂為景
義同義武憲重亂久盛實及由充ゑ至るまで預りの諸士一箇々々ゑ沐浴させて
新しき衣裳を薦めるども。成氏以下の囚徒や。這光景に胸安からぬ原来
今宵我們が首を刎ん為ゑて。這管待を做まるらめと思へども今さらゑ。
人ゑ問へる由るけまで。倒ゑ覚期を究めて。他等が隨意せざるはなし。徳而夕饌も
果しかも。又給侍の諸士ゑ成氏以下十二個の敗將を請ふく廣書院へ遷りけり。

當下大塚信乃。犬川荘介。犬飼現八。犬田小文吾。犬江親兵衛等皆礼服ゑ出く
まつ。俱ゑ恭しく。席上ゑうち向ひて。信乃がいふやう。滸我殿以下の諸君子ゑ造
まる。寡君義成の口狀あり。久く旅館の御徒然を慰めまゐらまるよりもなく。
對面の義ゑ及ばざりゐ素より是故ある事ゑて。義成の本意ゑあらぬ事
ゑうやゑ便宜をゐさまで。今宵見參ゑ入らまく欲も先這箸を造稟せと
ある。君命ゑそいなれ。といそまく成氏以下の敗將ゑ生心して恥る色あり。
ゑの時席上ゑ幾固とゆるく建列ゑる。菊燈臺ゑ灯花の色を増て皇喜の
如く明けまで照る金屏の後より。里見安房守義成主其子太郎義
通と俱ゑ立烏帽子長袴ゑて。小刀を腰ゑ跨て出て主坐ゑ着ゆ。両家老
辰相清澄并ゑ杉倉武者助。姥雪代四郎及満呂復五郎も。郷向ゑ行
徳より召復さまて俱ゑ相従ゑて席末ゑあり。ゑの餘満呂再六郎。安西

ありろう
ありさま
ありあき
ありとき
ありあけ
ありけん
ありけい
ありけば

十二敗將
稻村の城ふ
幽せらる
のりふさ
ありと
ありもと
ありすみ
ありまち
ありとり

就分。磯崎増松に或は両主君の大刀を執り。或は手燭を秉て。扈従して
後方に侍り。親兵衛と莊介は。這席の奏者にて。主に向ひて諸敗将の
姓名を通達す。義成是をうち叮て。我こゝに件の人々のうち向ひて名對面の
礼正く且いかゝ。諸君いかゝ恙まさぬや。義成不慮に罪を両管領家に
沼てしより。料らずも水陸の闘戰に八犬士なるゞ防禦の備に及び勝に乘ざるを
ゆゑ。竟に諸君子を屈請して。當城に留め侍るは是豈義成が情願ならんや。
爭何せん両管領に敗軍の後跡を埋めて。和睦の議なく其家臣等に守る所の
城を棄て走りて其往方を知せず。諸君を迎奪らまくする者一人も是なるを聞ねば。
只沼今日に至れるを思ひかけもなく。京師より両御使あり。一個は勅使代秋條中將曹
廣當一個は室町殿より遣されるる。熊谷二郎左衛尉直親是と今日も敵藩に光
臨せらるゝいまゞ對面せざれども。ゆくゆく和睦の一議ことゝなり。義成苟も居なゞら

勅諚と台命を兼らんに。武門の面目冥加に餘れる。歎び何者か是に優ぶべき。よの折を
もて諸君子に意衷を告まく欲る故に推て見參に入りぬ。と口誼に差さる成
氏憲房以下の敗將応難く阿とぞかりに言詳るゝざれば。大石憲重原胤久お
なく席末より我こそ出て答るべう。今はたゞめね御懇命。我们主僕十二名俱に
浮囚であるゆゑに。坐して食ひ温に衣て朝夕の安かるは君が博愛の餘恩なり。仁者
不殺の真心を感佩の外いつぞ。執合をまべ成氏憲房朝良朝寧自胤も俱に
日屬の慈恩を謝して其寛仁を稱賛も。義成是をうちやゝ。滸我殿は我大父
季基の時より舊交なるに。重ねて又両管領の賢息達も。倘恁る滿に遇ざりせば。
いかゝして藩に駕を枉らるゝやうんや。就く朝良朝寧主并に葉殿に請ま
ゝ一議あり。といひ後方を見かへれば。屏風の陰に扣る。犬阪毛野と政木
大全は俱に礼服晴やかに。出て席上に向ひて仰き見つ頓首せり。登時

義成主も。先自亂ゐ告るゆう。千葉殿。這壯佼を認りゐ入りや。是ゑ此
藪藩の軍師犬阪毛野金磯亂智是ゑ其素生を原るゐ貴藩の忠臣
と答える。栗飯原首ゑ遺服の子ゑ。餘事ハ他ゑ口中ゐわらん。亂智找ゑ
見參せゑゆ。といりるて毛野ハ阿と応て恭ーく自亂ゐうち向ゑて告るゆう。
言新ーくいへども。臣ちゑ父栗飯原首ハ原是千葉の親族ゐて。君ゐ仕へ
私るゑ。常ゐ諫を呈りて安危を未然ゐ計るものゑ。佞臣馬加常武ゐ説く訴
せられて剣龍山縁連ゐ蟄まれりを。常武猶も説言ーて。臣ちゑ嫡母兄女兄
さゑゐ惨刻誅戮せられて。臣ちゑ母ハ父の妾ゐて那身ゐ遺服ありければ難を免れ
辛くして相摸の國足柄の山脚る犬阪村ゐ潜て居臣ちゑ成長ゐ及ひて。父の枉死と冤
家の上を言詳ゐ説示ーて。幾程もるゑ身故りゐて是ゑりの後一月も臣ちゑハ復讐の志
移らむ。假少女子ゐ身を倣ーて。倆妓且兩野と喚れゑ。竟ゐ馬加常武ゑ酒宴の席ゐ

招きる。當晩宛家常武と。工家の主僕を殺ーて。垣を乗て出る程ゐ這時まで。陷
世ある。義兄弟ゑ知ざりー。犬田小文吾悔順ゑ常武ゐ禁錮ちれて冠室ゐ在りを。能
ゐて城を出。船ゐ乗りて。別て他郷ゐ走りゐて。又那宛家ゑ龍山蟄東大縁連ハ。後
扇谷殿ゐ仕へ。五年ゑの城ゐ在り。去歳の正月の下浣。相摸へ使を奉りて那地へ啓行
宛えーかハ。鈴の茂林邊ゐ埋伏ーて。其首捕ーて親弟兄の怨を雪めんとゐて。ゐ
偶聞の錯誤もいへいで。扇谷の両公。逆も。俱ゐ聞ゑ召れりー。臣ちゑ後の復讐言い
便是御家の忠臣河鯉権佐守如の汲引ゐ由れり。守如ち那縁連ゑ奸佞君を惑ハ
まるを憤ゐて。際まく欲るる程ゐ。他ハ臣ちゑ宛家ゑ。ゑを知りて其起行を報るのこ
當日犬山道節ゑ復讐言のゑ。ゑんとハ。夢ゐゑも是を知ゑ。臣ちゑ亦其行まハ道節と
相知ゑ。事ゐゑ。ゑ合期ーて。扇谷殿の道節ゐ逐れるひーのこるゑ。五十子の城へも
犬塚信乃ゐ技れ。かゑ。縁連の黨人ハ守如謀数ありと諸ゑ。ゆゑ君を惑ハせーかゑ。

憐むべし。守如と蟹目前之身を措難く。俱に刃に伏のひれと世の風聲に怨えり。
臣等は是過世ある八個の義口に弟ゐを後に悟りて共侶に近曾當家に仕へ
より皆用ひらるゝに浅からぎ既に微功を成とゝいへども臣等は水軍の隊の長にて。
君が御隊に向ざりゝは是ものの幸ゝいり心惑を解せもひて佐臣常武縁連が奸
詐殘忍の酷ゝかりけるゝと首が忠誠鯁義に枉死の主と石とを分ゝ色あひて死後に
賞罰の御沙汰あらば善政枯骨に及といへん。這義を訟まゝん為に憶ぎ多
辯に做りゝ紀と報る誠に感激の目皮の露に知られけり。當下大田小文吾も勝を
我れ額衝れる頭を抬げて自亂ふうち向ひて且いかゝう曇に浅草野邊に
玄料らぎ見参に入り一後のつゝを文稟解ゝ。かの折君に知られまゝりて然も恩
遇ゝふにあらねど逆臣馬加大記常武が拄へて私宅に抑留めて。悄地に他が逆謀の
帮助せまく欲せゝを其欺ゝく說破りて其非を舉て窘めゝが常武陽ゆい

従へども。是より言の洩れりゝせんと怕まく躯て某を別室に閉籠て久しくるまで
故ち遣らぎ折ゝ常武が賀席に肇て對面ある儛妓豆兩野に假少女ゐを
知らぎ他が復讐の後に迄に奇紀過世ある義兄弟ゝ紀りを悟れども言
盡せに遑ゝ。但其帮助に儘せゝ。他郷に走りゝ紀遽莫君が御内に常武が餘黨
多かゝ猶亂智と某を誣て云々といひもやゝん今又見参の折をゝ亂智と
共侶に舊冤を解まく欲も。這義を思ゝ召されぎゝと言爽に辨ぎれゝ自亂ゝ耳く
事毎に恥て身を措所を知らぎ赧然として笑るゝ大阪とのひ大田と云我に恩縁の
ありけるを我思ゝて用ることを知らぎ反て今日まで常武が奸詐逆謀を悟るに
由なく剩這回兩管領の催促に従ゝ俱に敗軍の辱に遇けるを口後悔の外あらぎ。
尚幸に和義成て城地に還ゝ成ゝ。使札の往来を饒されゝば教を乗まく願ふ
のゝと謝まるを義成ゝ笑て。千葉殿恁思ひゝば。只亂智悌順のゝびのゝ。

我も亦いらひありて本意を稱ふて最芽出て。就て又角谷の両公子ゐ。請
まくゐ私一義あり。御家の忠臣河鯉守如ゲ獨子成と申える。河鯉佐太郎
孝嗣も。郷ゐ姓名を改め今這席末ゐ在り。他へ刑餘の人ゐれども
其罪ゐあらぬと申ぬいそ御目を賜りねと引合せれば孝嗣へ我を出て朝良と朝
寧ゐ。うち向ひ額を衝て。姑且て稟まう身の非を飾るゐ代れも臣を神家ゐ
在り一日い只忠孝の二を以て仕へまるの外わざりゐ説者の為ゐ誣られて竟ゐ死刑ゐ
おとゐれ。自刎頭ゐ落む折。霊狐の冥助ゐありて不測ゐ必死を免れて旦大江親
兵衛ゐ遁の欽びあり。それより後い固様多如此多の事ゐて。親兵衛ゐ従て素藤
對治の首より。這回又親兵衛の恩義の為ゐ葛飾の闘戰ゐ義通君の先途を
援て。強敵長尾景春を防だゐ。其ゐ尾まで其崖畧を陳ていまう。是ハ此旦の
恩義ゐ報ひのこ身の薄命を見かれば。栄利を求むるゐ意ゐ死を愁ゐ大士多の

薦めゐより。里見殿ゐ知られまりて竟ゐ亦脱る路ゐ。昨今仕へて一隊の長の後ゐこそ
ゆゐれ然ととも。今ゐの時ゐ。いゐふて両公達ゐ見参を饒されゐ。稟ゐ義を悟らせ
ゐて。御帰城の後老館定正ゐ仰上らるゐ。ゐわび臣多ゲ冤屈の罪解け只身の
幸のこゐ。亡父ゐ冥土黄泉ゐ。さぞる歓びいゐ。這義を願ゐると請へ亦
親兵衛ゐ我を出て朝良と朝寧ゐ。うち向て。烏滸がましくいへども我仁ゐ稟
義ゐを守ゐひね。孝嗣ゲ死刑の折服大刀自ゐ形を変て根角谷中二多ゐ憑ゐ
ゐて。旨く那死を救ひ一白狐ゐ。孝嗣の母ゐ受る恩を報ん為の所行るよりも。
後ゐ備ゐ知られゐ。ゐの頃某い故ゐて。武蔵ゐ旅宿ゐぬる程ゐ隊ゐ知る孝嗣ゲ
冤屈の死刑の痛まくまゐ。ゐ末期を見まくやくて。忍岡邊ゐ赴ゐ。他ゲ必死を
免一時料りて其強弱勇怯を試て友垣を締びゐ。然を根角谷中二仁ゐ浅慮
ゐる臆断ゐ。孝嗣を救ひい。親兵衛ゲ幻術の致所と申え上ゐ。君我

惑ふ。と人の噂ふ。夫幻術は魔法なり。仁人賢者の徴を以て某は
姫神伝授の神薬を以て人の必死を起こす。昔朝寧主も死を甦生りは
我神薬の奇功なれども。那佞人ども亦誣て幻術なりとのたまひ。其の義ふ以て悟
らせぬ。孝嗣が忠と不忠の疑ひ解けべし。讒者の舌は剣ふ似たり。市ふ三虎を
做すと云へ。曾子の母をも欺くべし。怕るべ恐ふいふぞと。憚る色なく解醒せば朝良朝
寧安なく悟りて。俱ふ呆ること半晌許。姑且て朝良のいふやう。家兄をいふ所なし。
孝嗣の言誠ふ以て。犬江が議論いとよく妙と。咱ら饒されて歸城せば必ず親に報ん。
とゝべ朝寧も俱ふいふやう。暴ふ孝嗣が罪過のとは。親の讐断なりければ我知る所
なるねども。當時虚実を正も沿せ殺さば必後の世まで不明の譏を貽さん。霊
狐の冥助を今賢君ふ仕るは則自他の幸と相心ゐて。応をもれば義成主。謝して
且笑ひふ。犬の義も亦易り。却て三浦殿親子の如は。坂東一の勇士なるふ犬村

大角礼儀が僅ふ三百の小兵をもて。克ゐて城を受合て。主を當所ふ徙ん。成
敗時運ふ由れるのこと。別又筋力をもて理義を破らず。其進退を敵ふ儘く。孝く士
卒を害ざるは。是大勇の致す所。識者は必感歎すべ。且和殿親子は我當前の敵
なるねば。疾ふも送り還すべ。其義ふ暫ざるは。我這意を知ゑめて後の
好を修んとそこ今一要時の程なるべ。と慰められて義同は。蹴然として答るやう。示教の
赴兼りぬ。かくいべとて誇るふわねど。我力山をも拔くべ。只仁と義ふは敵がたし。我倘
去ふ置れぬ。和君并ふ犬士等の大仁大義を具ふ知らんや。孩児が為ふも後學
ふ教べ去くてはなれと謝されば義武頭を抬げて。間常ふは迂遠なりと思ひし。仁
義の微妙を知りぬ。譬は雲と水なる如。斫れども斫れども。拂へども去らず。然るを武士
負ふ愚なりと。咲ふを義成急ふ推禁めて。邸父子の謙遜當りかたし。是
よりの後交を結ばるるは幸なりんと。とゝ仏ふ偽を見かへりて。稲戸史徒然なりん。

和老は壯介小文吾と舊交あり。且這回行德口の開戰は他ならず報恩のためなり。
我も粗ぼ知りぬ。然れども猛く勇のわまり。深川の和老を赴稠す。滿呂復五郎も
あり在り。弁を悄地の船をもて朝良主と共侶は迎合りしは要あるなれば陣
没きまでと思へば。其作者はあり在りとのひゃ毛野を指示せば由充は阿とぐ
はは心も果む左見右見く。現は賢君の下よりは行の臣まかり。由充が不肖なる。
我身一個の敗軍なれど。當日死ざるを怨とも。非如報恩の義を以首を接ま
とありとも。今さら何を面目はと越路は退りはんやと言蕭然は伏合るを。毛野は
さとそと慰めく。其悽慨は理りなるかの折和殿の極ふる。朝良主は腹殿の外
孫はあるはは當那君陣没はば。和殿も必命を殞さんとの故は我胤智先
見あり。計りて當城へ迎へ合りしは虜は做まんと為はわび。是則壯介小文吾は
代れる二度の報恩のことのはは壯介小文吾も。慰めて俱はのよう。稲戸主和殿節を

折は自然は儘せく。身を敵城は置といくとも忠義は厥する所なり。其賢良の
故をもて我君拾別の管待あり。是亦臣まが願ふ所徐は歸北の行を候て後の
好を修めんと。諭せば由充領くのみ。又はありもるりけり。當下義成主憲房は
うち向ひて山内の公子那騎馬三連車は奇妙なりと然けれども奇功なる元は奇物
是を破ることあり。和君の後れるはわび。曾般は雲梯も墨翟は折かれるさのみ
思ひ屈しのひそと慰められて憲房は憮然とーさ嗟嘆は堪ず。開らいそるはるり。拙
巧何ぞ負むは足らん盛實先生拘られて。後は摠敗軍は做りーより。身も亦
擒はせられていまさ親の安危を知ず。恁而在るは一日も千秋は異なれば。這意を
察しのひねと謝はまは義成感歎と。孝なる哉若は人未憑しくはと譽れば
成氏側より。然也々と點頭く。這子の如は親は從ふ。衍は似て衍はわるべ。
咱等は初國府臺は。信乃現はいはれし美あり。過ちを改ざりける。過ち成

争可はせん悔とも及ばぬ事なれバ、在村をも恨しけれと陪話ると義成推禁めて。君ハ貴人にして且舊好あり。那御行なかりせバ駕を蔽藩へ枉られんや。憂苦を轉じて歓びと做しなんも遠からじと慰むる詞も果ぬ折から。土圭鱗りて初更なりけり。憲重是をうち聞て亂久盛實等に目を注しつゝ共に起つゝ義成主に今宵の對面を謝していふやう有かたきまで御懇命孰か感悦せざるべき。既に初夜にもなりぬれバ華胥の暇を賜るべくや。と執合まうせバ為景ハ獨傲然とうち笑て現に敗軍の将ハ兵を談ずべからず。俘囚の人にハ安樂を示すべからず我言ことも其故也。無礼にハあらず退りてんと誇るを成氏睨へ禁めて憲房朝良自亂等と倶に謝義の詞を連ねつゝ主人の退坐を乞しかバ義成うち聞て敢て強ず現に今宵ハ初對面なり。長談燭を續べきにもあらず。復こそ見参もすべけれとて義通と共に侶に辞別して退きけれバ辰相清澄以下の衆臣各主に従ひてうち連立て退散き。登時預人等あまた出て来て成氏以下の十二敗将に。請ふて臥房へ案内をす。介程に信乃現八は成氏を送りて枕に就せ毛野ハ自亂を送り。政木大全ハ朝良朝寧を送り荘介小文吾ハ稲戸由充を送りける各所縁あれバ。其他齋藤盛實ハ憲房の伴に立ぬ。又為景憲重亂久ハ親兵衛と預人に送られて各臥房に入りにける。

第百七十九回中

長編うち續をもて這回を釐て上中下とし題目ハ上に見へたる如し
且四十六の巻端に追て附録目総出しぬれバ看官此彼照し見るべし

却説義成親子ハ其夜分成氏以下十二個の敗将に對面の次の日に。京師の両御使に拝謁して勅語并に室町殿の台命を承るべしとて其朝勅使代秋篠将曹廣當と旋使熊谷二郎左衛門尉直親を稲村の城内なる正廳へ請待をもの故に犬山道節忠與と犬村大角礼儀ハ召れて昨日新井忍岡の両城より各快船にうち乘りて昨宵更闌て稲村に参上せり。

伴當僅に三十名に過ぎ。又那西城の田税戸賀九郎逸時苫屋八郎景能印東小六明相荒川太郎一郎清英等。衆兵をねて是を守れり。

介程に道節は。去歳の冬の水戰に射く海底に墜ちる。扇谷朝寧は流れて下總葛飾に。矢所河に造りし時犬飼現八に拯れて。且親兵衛に神藥の即効ゆえ。甦生りつ矢傷愈て生拘虜なると共侶に稲村の城に在りと雖知りて怒罵ると大方なれば。且いかう。館の慈善を貴とぶに御軍令ありとても。射て墜しる敵の大將を救ふて活し置るべ戰ざるに忘くとるし。好々那奴が稲村に在る程は非如義番召さるとも。我いなかりくと。敦圉猛く發憤して明相に諫められて。本城に來ふけれども。尚憤り解けざれば其詰朝先信乃に。件の怨をいひ出て。云云と論ぜしと。信乃も徐に和解くいかう。犬山開き云理と那扇谷は和殿の故主の寃家なりとも。去歳の春那頭鎧を射て墜

志を行ふべき時に犬飼犬江は這義を見て俱に那死を救ひのこ敢敵を愛まるに。朝寧は折命終らば。後に和睦ありとも。猶怒を送さるべし。然ば後の患ひこれを忘れぬひ欲と解れて道節言下に悟りて寒に介也介也と忘て又更辨せず。是よりの後現八親兵衛と團坐する日の多れども這義を毫もいひ出ず。倘同人のある時は。開を去て他事に紛らして說誘るとなかり去べ。信乃は悄地に感嘆して。哥々は理非に醒て惑はず。君子の風ありとぞいひける。間話休題。時に四月十六日。當早犬江親兵衛蜑崎照文等。光絹衣麻杜杆等。京家の旅館に伺候して。時分宜敷を報かば。勅使代廣當諚使直親は立烏帽子大紋の直垂に。小刀を腰に跨て出て案内に就て去べ。隨從の雜堂十余名素袍烏帽子に大刀を執り。征節を執れるも

稲村の城ゐ
義成勅使
諏使を迎ふ

其二
玄の
とうもろ
けんハ
よなり
さうめ
よしみち
小文殿
ひろまさ
ちかいち
てる重
けの
大かく

あり。各主ゐ倶ーくゆめり。徒而件の両御使ハ引れく儲の席ゐ近づく程ゐ。
國守安房守義成主ゐ嫡子義通と共侶ゐ朝服ゐ身を整て三四間ゐく
是を迎へく。正廳の上坐ゐ請待ゐ隨従の雑掌ハ廳の外廂ゐ羅列う當下
這席ゐ與れる。犬阪毛野。犬塚信乃。犬山道節。犬村大角。犬川荘介。犬飼
現八。犬田小文吾ハ各礼服ゐ。犬江親兵衛。蜑崎十一郎と倶ゐ亦是外廂ゐ。
這他次の間ゐハ東六郎。荒川兵庫助。杉倉武者助。政木大全。田税力助。姥
雪代四郎。満呂復五郎。満呂再太郎。安西就介。磯崎増松。朝夷三弥。白濱
十郎。七浦二郎。東峰朋三。鱆舩貝六郎。大岸法六郎ゐ至ぬまゝ皆礼服ゐ袖を
列ねく伺候せゞとりゐ者ゐ。又義實老候の名代ゐ堀内藏人ゐ伝るりけゝ。ゆの餘
杉倉木曾介。浦安兵馬。小森衛門等ハ致仕の老人ゐれゞ召れゞ。又天津九三
四郎も是ゐ同じ。各其宿所ゐ在り。又堀内雑魚太郎ハ。鎌倉ゐ在陣せ。又小

森但一郎。浦安平助。千代丸圖書助。木曾三介。小水門目。音音妙真。曳ゐ單節。援
岡猿八。鞆内巣四郎等ハ五十子及大塚の城ゐ在り。印東小六。荒川太郎。一郎ハ前ゐ
見へり。又登桐山八郎ハ石濱の城ゐ在り。落點餘之七ハ穂北ゐ在り。又真間
井掇二郎。継橋綿四郎。润鷲手古内振照。弘教三四的。寄合五郎。須々利團五郎
等ハ國府臺の城ゐ在り。鳥山真人ハ岡山の壘ゐ在り。石亀次團太。越鄭三ハ行
徳ゐ在り。又楯持傳杖大樟村主ハ既ゐ身の暇をあつりて。其本領ゐ在り。又直塚
紀二六。犬江屋依助も。有功の者るれども。他等ハ蜑崎ゞ家僕ゑ市河の町人るれゞ。
ゆゑゐ數ふべくもあらず。向水五十三。犬枝獨鈷素ハ吉等も是ゐ同じ。看官是を思ひね
か。却説熊谷直親ハ義成ゐ。ふゝち向ひく。房州將軍家の御訴あり。とゝ。が義成
阿と心ゑ。膝を找めて拜聽せ。直親大紋の袖掻合せく。抑舊冬兵乱のゆ。其
基本を原ぬゐ。扇谷定正ハ聊ゐ怨ゐ。よりて。山内顕定と。近國雷同の兵を連ねて。

安房上總を伐まくも。其間戰破れより。東國いまゝ靜るゝに。這度既に京師に攻え。上の御心安からぬ。因て詮議を遂らるゝ所。定正顯定の非理紛明さの故に我直親を御使に做されて。御譴責あり。直親則上野沼田白井及河鯉の城に發向して。意趣偽へて其罪を責るに。定正顯定長尾景に至るまで各其非を後悔をく稟し解くに詞るゝ。罪過を免るゝ。里見義成と和睦して東國太平の功を奏をゝ。但定正顯定の兒子及合戰の諸將の敵に生拘られて。今猶稲村の城に在る者。十二人あるべし。義成速に和議を容れて。其敗將等を返しいで。兩國是より好を結びて。唇齒の思ひ成べし。這度に敗きいで。天誅國罰面るがゝ。身に受て子孫斷絶せん。言葉に偽りあるに昭据ふとて則連署起請文に血を滴て各征前を折添てまゐらせさせ。人過ちて改るに憚りなし。兩省領かくの如くなる上は。荷擔の諸將孰か遣ん。房州い思義孝順の人。其義に室町殿も知召ね速に御美あり。捕所の敵城を返さで。虜に成る敗將等を速に放還さで。公私の幸甚。かゝる這度の詮意のこゝろざし。最も畏れ天朝も叡慮安からざる所あり。且房州再三貢獻の忠誠と。其家臣八犬と唱る者の戰功を叡聞あり。連りに御感のあまり。勅使代秋篠主を添られ。重異の御兼ねあるべしと。說れて義成喜悅に堪ず。謹答るやう。御詮議いかゞ異議あらん。義成水陸三路の大敵に當るとゝ。只防ぐを旨とす。殺伐を好まざり。諸隊の壯佼八犬士等。北を逐ふ敵の棄る城に据りて是あり。或は又殺さで生拘へ。敵將もまた只其暴を懲さんが爲のこと。久く留むべきにあらず。只ぬゝ和を講ずる者あるべし。今に至りいひね。然るに天威御武德の過分に恩命を辱くも。何をか違背仕らん。速に那城を返し。敗將を送り遣んに。臣の情願に。いとゞも。いまゞ兩管領より和睦の使者を。誰何と請問べ。外廂に

羅列れる。京家の雑掌西三個遽しく膝を我が其に寄せ。義成が向ひて。賢候其義は有るべき休られ臣なれ。京家の人々は実に。菊谷山内淳我三将の老黨なる。巨田新六郎助友。齋藤左兵衛佐高實。下河邊壮司行包なるべし。又吾我が門のこれなるは。千葉の老黨原胤久の弟なる。原赤石介胤輔。長尾の老黨直江壮司。三浦の兵頭。水崎蛮人等も這里に居り。寡君定正顕定将軍家の御遺責に畏こて。和睦の御義を仕るとは。こは賢候の同意なるべ。否を知ぞ。その故に京家の御使に請まゐりて。我が其伴當に打拾て。俱に推参仕りぬ。事機変に似て機変に似わ。ぞ海容を願なると。異口同様に陳謝して。携来る素朴の三方托に定正顕定の折て和睦の誓に白羽の征箭二條載るを助友高実等揚て。義成主に晋呈ぬ。當下下河邊原直江水崎蛮人等。俱に義成に向ひて。額を衝て拝謝して。和親の使者の礼を盡せ。熊谷直親執合て。房州疎畧なる外日のひを西管領諸既將に管和議をいそぐの故に我其使をなて来れりと陪詐れば義成異議もなく其まゐ入れ。いぬと忘れ傍を見かりて件の使者に其義成も亦歎び思へり。和睦の事は別議なり。餘事は後刻談ぐべ。俱に客の間に退ぬく。候を便宜なるべけれと。亟の心に助友等入相歎び言葉を却て。人生なる同じ名對面しく且り。皇義に両敵厳殺時或は黄昏或は乱軍の中にて面を認られざるべ。斉の中に水崎蛮人の如れ。なる折犬村主に戦に負て小磯真砂と共に深庚堪ず身を免かれて。其後河鯉の城に来て在りしかば。今番の使に立られたり。只這度なるぞ。小磯真砂又許数の近臣望見一郎品華七郎又稲戸津衛の従軍なる事有復萩野井三郎も。その折本所の戦場を免れられども敢越の庄貝へ逐られ。津衛の安否を知まくわしと。河鯉の城に来て今も猶淹留を津衛の迎に来べき者と昨なる呉

越の怨敵なり。今は虞芮の良隣に倣ふ。仁義の餘德なり。いざ教を願はんと。誘はれば毛野も信乃親兵衛も。大角莊介現八小文吾も。和談の成りしを祝ひ着を。弁ぶ中に道節のこ聞ざる如く默然なり。當下義成堂を鳴して。誰か在る。這六個の使人を客の間に案内をせよと喚立られさ阿と答る。田稅逸奉滿呂重時へ次の間より身を起して來て。助友以下の使臣に案内をせよ。必ず退けば遊べ。真の雜掌のこ五六名を遣りける。介程の秋篠將曹廣當。佶と義成ふる向ひく。房州升進の宣下あり。吾れば義成答も果ぞ義通と共に席を避て拜聽せ。廣當威儀を繕ひく。宣下の趣別段なのまく。里見安房守尋上總介源の朝臣に不を好て富とも驕らず。善政仁義ある者なり。國治りて民親こ賢佐多し。是を以過を責獻の使者まゐらせく。其忠誠を致せり。再度の及べり。刈入去歲の冬に五路の大敵をよく防ぎく。一歩も境に入ることなく。一時に強敵を敗て退けく。國民塗炭を免れり。是偖其家臣犬士と喚做せ者の。智計武勇の羽翼に由れる其功豈鮮少ならんや。夫大功ある者へ必重賞を行ふべし。賞罰正かざるとは。賢路塞れ小人時を得て民從へぞ。まの故に義成朝臣を。正四位上左少將とせ。安房守尋上總介故の如し。嫡子太郎義通を從五位下。右衛門佐とせ。其父義實朝臣に隱遁既に久しと。創業の武功虎一かるを。麟兒鳳孫克く其表を嗣ぐに足れりとあをもて治部卿に又其家臣犬江親兵衛を者に去年京師に使せ一時輒く虎狼を對治して良賊安堵の思ひを做せり。まの故に勅使代秋篠廣當をもて中途に他を追ふめて爵位の宣下あるべし。他亦稟を由あり。舜に入く稟まつらざり。故に今度改て並く其八犬士を從六位の下に敘せべ。且犬江親兵衛仁を兵衛尉に犬阪毛野胤智を下野介に犬塚信乃戌孝を信濃介に

犬山道節忠與を帶刀先生に犬村大角礼儀を大学頭に犬川荘太義任を長秋介に犬飼現八信道を兵衛權佐に犬田小文吾悌順を豊後介に做さる。俱に忠戰大功の朝賞と這度は義成朝臣兼まつりごと件の八人に配當まべしと天自ら詔して宣へり是に由りて上卿及大使右少辨なり臨時除目を行れて勅使代臣廣當を遣はし安房へ遣されて朝恩を知らる。這御言を室町殿に仰合さる所に熊谷生の顧しる。御教書もあるべしと備に告げ詳に示して准備の廣益に冠烏帽子朝服を戒領し載るを數通の位記と俱に遞與せば又熊谷直親も室町殿の御教書を合せ出て義成主に渡しけり。這時義實老候の名代なる堀内藏人貞行は西家老等と俱に次の間に在りしを召れて當席に入りて拜聽す。然れば朝賞の過ぎたる驚き皆平伏する儘に頭を抬るなりけり。此當下義成主謹て勅答をす。臣義成

纖芥の微功をもて父祖三人家臣某等八人に俱に重爵の勅賞を兼ねる。今古の例あるべくもいまだ且父義實の如きは捨て栄利に心なし。老病那身に副るの故に名代をもて拜走せ是ぞ不敬にいかに何ぞ散位を辱うせるべきや。況犬江親兵衛等八人の受領を勿体なし。義成僅に房總二ケ國の守にして。受領の家臣八人わるべ非如勅賞なりとも僭上に似て罪免るべきぞ。物盈る時は必ず虧く亭午の月輪三五の明月孰か傾かざるべき。義成は其盈るを願はず盈ず虧ぜしてあるべきのこいを辭表を献らまく欲す。御執成を願ひまつると辭に廣當少わまず其謙遜は然るべきぞ。王事監とる。論言は汗の如し出て二ども返るべきぞ。只業まるにまかせてと諭せば直親も俱にいふやう。昔鎌倉の右大臣朝續居るべき大任を稟まりしより其身は在國して受領去ぬるも勘めらず。然をいかんや戰國割据の今の世に上洛最容易きぞ。何ぞ居るべき受まるを僭

上とのこゝ之せんやとの爰い室町殿の執奏ふく定められる思賞るゐ所を強く辭ひ禀さび遣勅の罪を爭何いせん。御兼勿論るべゝと解れて義成脫る路る。沈吟ぞる頭を抬て八個の犬士を見かへりて汝等も兼りつゝ我當惑を查ねゝといられて犬士等阿とばかりふ応て毛野ふ目を注れば毛野い風く心沼く。則答禀ゆう我君御父子の御栄爵い臣等ゞ願ふ所ゝ然ども思ひけもるゑ。臣等ゞ受領い胸安らゝぞ。縱些の階級ゆりとも君臣ともふ受領の名わゝび是上を乱ゝと這爰ばかりい幾番も只御辭表を願ふのとゝゝぞ親兵衛信乃道節大ゝ用莊介現八も又小文吾も共侶ふ同意のよをいをまくるを義成急ふ推禁めて大ゝふて論議い不敬之先兼まりて後ふそと諭つ又廣當直親ふ勅答異義も有りゝかば廣當直親相欺びていよゝひわりとぞ稱ける。然ば次の間ふ這同答をうちゆゆる。両家老諸士の每憶ども欺びの聲を合せて千歳を唱ぞ者るゝ。

勅答既ふ果ゝかば。饗應使大江親兵衛。蛋崎照文等。両御使ふ案内ゐて。別廳ふく。盃酒のしゆゝ大塚信濃大阪下野。犬村大学。犬川長狹莊介。犬畠後大山帶刀。犬飼現八兵衛等。両御使ふ拜見ゝく。受領の欺びを禀ひめかゝ。是より後も謙遜ゝく。守介尉頭い各省て敢唱ず。就中忠與義孝。後々まゝも猶只道節莊介とのゝ喚せく。官名を稱まるゐる。況六佐る等ハ秘ゝ人ふ知せねば世ふハ等えぞるゐけり。ゐも是後の詩ゝ佶而両家老諸兵頭も両御使ふ拜謁ゝく。配饌の歡待淺かゝぞ。給侍の青士入り替り立代り海の美味を盡せる。盛饌いゝべくもわゝび。最後ふ義通父ふ代りて廣當直親ふ酒不要を薦めて大刀馬代谷白銀一百枚を牽れる。然ば京家の雜掌伴當奴隷ふ至ふまで咸珍饌ふ飽ざるゐる。且折乾さ賜りそいゝく醉を盡ける。既ふ七日八頃ゝて。又當席ゆ果ゝかば両御使廣當直親い辭て照文等ふ送られて俱ふ旅館へ

退りけり。その日巨田助友。齋藤高實。下河邊行包。原胤輔。直江水崎等の客の間ゐて鄉食饌の儲ゐあり。犬阪下野。犬塚信濃。犬村大学。犬川長狹等。迭代ゐ出て來て。酒盃を薦むれども。助友等は辭ひて多く喫まず。只城遠與の日を定められて退りて准備せまくわーとのいけり。既ゐーと酒盃納りて又犬塚犬阪。共倡ゐ出て來て。件の六個の使人ゐ君命を傳るやう。和議既ゐ成る上は。那五人城を返しく敗將達を送り遣らんゐ。今さらゐ仔細ゐ。那君達ゐ面談ーて。時日を定むべーとゐーかば。助友高實行包等。相欣びて商量するゐ。今より六日の後本月二十一日は吉日くとの日なるべーとて。這度を以答ーかば。二天士則義成主ゐ答え上さく。件の六個の使人を引く成氏以下の諸敗將ゐ對面を饒ぢけ。這段は尚長やうゐ。亟ゐ書きべくもわるざれば。又卷を更めて且本回の局末ゐ解分るを聽ねかー。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十八　終

南總里見八犬傳第九輯卷之四十九

東都　曲亭　主人編次

第百七十九回下　題目は前ゐ出さう東西和睦して　両國津を開くとのゐ局末是なり

再説巨田助友齋藤高實下河邊行包原胤輔直江壯司兼光水崎蟹人等は犬阪犬塚犬村犬川等の諸犬士ゐ案内せさ三在奥て乾淨処る坐席ゐ造るゐ成氏憲房朝良朝寧自胤等の諸敗將は既ゐ其告あるをもて皆うち聚て居り。管衛の武士二三十名其戸口ゐ侍りける。當下助友高實行包等の六個の使者は諸犬士ゐ相引き。各其主ゐ拜謁き。面正ーくもうきき所行るれば只恙なきを祝ーつ且和議のゐりーを告て近き日ゐ迎の士卒をまゐらせべーなどのよのゐ況諸敗將は孰ゐ一人も恥ざるべき応ゐ果敢々きらぬを。憲

奉へ重亂久執合たて。里見の慈善と犬江が神藥の效驗を告るゞを是ゞ課言に似されば助友ハ好も聞ゞ恥て身の暇を告て行包高實等と俱ハ皆客の間ハ退けば大阪下野犬塚信濃是を送りて異日を契るハ助友等ハ對面の欵びを演て辭し去まく為る程ハ外面ハ咳して突と内ハ入る者あり是則別人ゞゞ大山道節帶刀先生忠與と犬塚犬阪の間ハ坐して。乾と助友ハ向ひてのたまふ。既ハ面善ハていへども。折ふけ是ハいまゞ御意を沒ぎ。和談成りていへば約束の日ハ至りて城地を返しまゐらせんゆ勿論之遮莫千住竹塚ハ遠からぬ穗北の莊ハ落鮎餘之七有種の乾父る。氷垣殘三夏行ゞ自沒開發の新田ハて今ハ有種が所沒之然を有種ハ根角谷中二ゞ談言ハて一旦没落ゞれども扇谷殿敗北の折有種悄地ハ便宜を沒て忍岡の城を拔き旦穗北の莊を捕復して一時ハ恥を雪ゞゞ然ゞ東西和睦の上ハ有種ハ說諭して忍岡の城ハ形の如く返しまゐらせんゆ。異

說あるべくもハゞ。但穗北の莊と其前後左右ゆる四ケ村ハ皆有種ハ隨從せゞ。有信れば件の五ケ村ハ有種ゞ自沒ハて。返しまゐらせべき莊園ハあらゞ那有種ハいまゞ當家ハ仕へさまどゞ。其岳丈夏行と俱ハ原是豊嶋の殘黨なれば我忠與と空谷是音の憶ゆ沒ハあらゞ這義什麼。と論ぜれば助友听ゞ點頭て其義ゆゞ沒ハ沒ぬ豫より聞く那有種ハ人の許せる武勇の義士。其听沒の莊園を今更誰ゞ掠奪せん其義寡君ハ聞え上て子子孫孫ハ至るまで除地さゞんゆ勿論之這義ハ心安るべしと誓ふゞ如く答ふる折ゞ犬江親兵衛も出て來て這席ハ入りしゞ高實行包胤介ハ言の長くゞんを罷ハて我們ハ先旅館ハ退りて歸帆の准備をまべけまとて直江水崎も共ハ告別ゞ身を起せば大塚信濃遽しく立て遥ハ送りける。當下犬江親兵衛ハ助友ハ向ひていへやう。言新しくいへども。御家の忠臣河鯉守如の獨子

る。河鯉佐太郎孝嗣ハ靈狐の冥助ゆゑ。讒死の刄を免れしゝ。政木大全と
名を改めて今ハ當家の家臣ゝ。其ハ寃枉の罪ゝるよゝハ扇谷の両公子ハ孝
嗣みづから咲え上て那寃を鮮されば後おゝそ聞るべけ。這義を心ゆるハゝ。
と告るバ助友嗟嘆して。現ハ河鯉親子の如きハ忠臣ゝ孝子ゝるハ。讒者の
為ハ害ハるゝて親ハ死し子ハ免れて今ようゝ隣國の股肱ハ做るハ悔て及ばぬ
ゆゑゝら。這折をのゝ對面して後の交を結ばまく欲き這誼を饒しぬぎや。と
いハハ親兵衛歎びて。悄と重紙戸をうち鳴せば外面ハ立在ゝる。政木大全孝
嗣ハ方三四寸ゝる梧桐の小箱を三方托ハうち載て。開を携ハ内ハ入ゝて先其
小箱を犬阪の身邊ハやゝ閣程ハ。親兵衛則孝嗣を先助友ハ引合まれば。
迭の口宜他事もなく和睦の歎びを演ハける。其言訖て犬阪下野ハ件の三方
托を曳とゝて。却助友ハ告るやゝ。儞ハ扇谷殿和睦の誓ハおゝそ。箭を折て贈り

ゆゑしを寡君既ハ拜受せり。是ハよりて義成も亦這一種を贈り物を。
正ハ是東西唇歯の交を結びて相背ざゝん照据ゝり。這義宜く賢侯ゝ
上き毋ゆゑしねと。演て件の三方托ハ載ゝる小箱を遞與まふゞ。助友ハ諾を兼て先
其小箱を熟覽るハ蓋ハ十二の文字ありて豆有。一頁長杉無木吉義歳
封とゆゝしゝば。助友眉をうち顰めて左さゐ右さゐ思ハ惟るハ豆一頁ある者ハ
是頭の字ゝ又長杉ハ木ゐくゝて十口と長ゝ吉の三字ゝ是を合まれば其字
是髪ゝ頭と連續做を時ハ則是頭髪ゝ然ハ這箱の内ゐるハ去歳の十二月八日の
夜ゝ我君矢口の河邊ハて敵の伏兵を免れ難て。那隊の頭人小水門目ハ
合ゝらゝ毋ゆゑしゝ御頭髪を。今返さゝるハどあらむもとゝ。夙く悟ゝら且恥てうち
載ゝら其箱を懐ハ楚と夾て却亂智ハ答るやゝ。仁君哲言の御貺。御意の
趣義ゝぬ立歸ゝて寡君ハ渡さば。さゝゐ歎びいん。城受取ハ定めゝらまゝる。二十

○東溪堂藏

一日あゝ程なく身の暇をゆるしてんと詞急しく別を告て旅館を投て立て
ゆくを大阪下野政木大全留めゝぎ共侶の玄関まぢで送りける。恁而巨田
新六郎助友いとぞ旅館へ還と躰て高實行包冨介等の五個の使者
商量に果て且秋篠廣當熊谷直親のゝ趣を恁々と告知せて
帰帆の免を乞こゝろ五個の使者と共侶の當晩洲崎の港口より各快船に
うち乗て其投方へぞ走らせける。伴當就も又ゝ船さえ艤して亟の所
用の充ーとぞ這事後の安えける。然べ其次の日の大阪下野大山道節大村大
学の義成主の見参ーて城遞與ーの事を命ぜられ且堀内貞注小林高宗登
桐良二等の人の旨を傳へよとて照書一通を渡ーのひーゝべ三犬士等も兼りて
退りて躰て伴の士卒をいとゝー立て水路より新井五十子忍岡の城を投てぞ還り
ける。左右まる程の四月二十日あるゝーゝべ山内の家老齋藤高實并の兵頭

絶内外助惟定等の士卒一千許を將て鎌倉へ來て其主山内顕定の館を
受合ゆらまゝ又其隊の頭人建柴浦仗弘望の士卒一二百名を將て船にて
憲房の迎ゆゝくりの時堀内雜魚太郎貞澄の大阪下野の傳達せらまて
其下知を乞こゝーゝべ隨即齋藤高實の鎌倉の館を遞與ーの敢秋亳も抱を
ゝ隊の兵三千餘名を將て先新井まで退くの士卒都礼讓の貌の亳も乱
雜あるゆゝけまべ齋藤高實ゝ山内の士卒咸敬服ーて及び難ーと思ひけり。
亦程の新井の大村大学の既の城遞與ーの准備の田税戸賀九郎逸時等
屋八郎景能等と商量ーて降人甲良亀九郎等をもて三浦義同の宅養の和
議の成ーよーを告て且城兵の降参ゝるゝと三浦四十八郷の士民の相從へるを召聚
合て則宣示やう。若們時の勢を見て苟且我の從ふとゝぞも今の東西和議成て
當城も亦故の如く三浦殿の返ーまゝらんべ若們も故の如く亦是城主の民

たるべ。各々這意を汲よゝと言叮寧に説諭へ大家空く嘆息して合難く開く中に甲良亀九郎找を出て其義心汲いべく三浦親子は暴雄に當城に還り来へ我們敵に降りし憎て必殺やせん願ふへ安房へ俱しねと請へ又三浦四十八郷る。御士豪民村長們も異口同様に願ふやう已そへ御威勢に怕れて従まりしに いつぞ。安房の館の御仁政を慕ひまつる故るれ。いつぞこの儘幾年でも御領の民ら まく欲を這義を饒させ給へゝと勧解る大学殿へ介に我吒るふ和睦ぞ城を返して其地を返さぞ。且其民を奪ふ。和睦の名ありて。和睦の實を。我何ぞ然る変詐をせんや。甲良生も這義を思ひね一旦我に降りしそ。三浦殿親子は先度の懲 ア。若们を罪をべくぞ心許ふく思ひる。我又在是せん術あり必怕べくぞと諭つ一紙の告文に降人甲良亀九郎并に三浦の民公毋の罪を記よりて書寫て城の玄関ぞ貼けり。有徒一程に堀内貞澄は鎌倉より退き来て。則大村大学に鎌倉の趣を伝々と告ゝ。大学則其隊の士卒と三浦四十八郷の士民に身の暇を取らせ。各其地に返し遣るに皆悉々として去る。忍びぞ猶云々と請ふ者あり。大学饒さぞ且のやう。若们知ぞや。鄙語云幹木に勝る朴枝を。今新恩を耳ぞ舊地を去らべ後悔めん然とも所依ある者あらべ異日稲村へまるべ。今番は俱ぐ〳〵とて皆悉出し遣りけり。有徒一程に水崎蛋人小磯真砂は残兵三百人を将て沼田の城より這里に来て大学并に貞澄逸時景能等に和睦の歓びを演ぶと。當下大学は戰粟銭財武具問度に至るまで皆弄帳に寫し目録に合て是を蛋人真砂等に遍與まに明白に犯し掠る者を且のやう甲良亀九郎等城兵の苟且我に従ひは城内に三浦殿の宅眷と士卒の妻子等のれば。徒れば他们に不忠の罪を。我其義を寫して玄関に貼置き義同義武ら來まさば各這意を傳へよゝと言詳に教諭其蛋人真砂等欽び義て敢逼に

文溪堂蔵

者なりけり。然いはの日。城内の掃除なども届ざる所多く。傲慢不礼の事ありも。礼儀の礼儀しる。其々召虚しらざれば。短人真砂従兵まで。いとまもなく敬服して別を惜む意あり。徒而大村大学い。堀内貞澄田税逆時。苫屋景能等と倶ふ安房より従ひ来る。隊兵僅の三百餘名を将て。新井の城を辭し去りて水路安房へ還らまくまる程ふ三浦四十八郷まる村長壮客等ハ猶別を惜む者あり。其毎數百名沙を蹶揚て赴りと来ら。大学が乗る船の纜を曳止めて。相公なぞ我们を棄て安房へ還りなふぞや。願ふハ這地ふ在城して猶善政を施しなば。凍餓死亡の憂ひなく。楽しく妻怒を養ふべしと。諸聲ふ叫びて放つべくもあらざれい大学是を慰めそ。諭せども只貫縁を貞澄も又逆時景能も禁め難く大刀引抜きて纜弗と斫捨るべ順風ふ任まる舵工毎が本船伴船十餘艘艘柏子齊しく漕ぎて去るを。招ぎ呼ぶ村長壮客。沙ふ滾び岳ふ撫りて。

喚聲のみぞ浦風ふ吹送られて遠離り行。船まで幽ふ聞えけり。然いはの後里見実堯又里見義弘の時ふ至りて找て鎌倉ふ乱入り。一日ふ三浦四十八郷を殺捕りて。久しく里見の所領ふ做まん。這時既ふ那地の民の徳を慕へる餘波ふて義成主礼儀の植し善根なるべしと。時の識者ハ論じける。まる是後の話。小程ふ犬阪下野亂智ハ五十子の城ふくり來て城遞與の事遺もなく。新井大塚及石濱なる三人城へ義成主の下知を傳へて。且浦安牛助千代丸圖書助等を倶ふ各士卒を部ふて。件の准備を做き程ふ二十一日ふ做りしく。這朝犬阪亂智ハ去歳の冬より當城ふ囚置しる大石憲儀と細坂四郎等を牽出さ廿て。告るふ和議の成りを。なりとて且のやう。我當城ふ和殿等を久しく屏居ゆらせしハ河堀殿と貌姑姫のあくふ在まる故ふして。和殿等と共倡ふ這城郭を領守る亂智が用ぎう。まる小東西和睦成りて。今日ハ當所と。大塚忍岡の城までも皆是扇谷殿ふ。

返し給はるべし。和殿等這里に在ても好。在らば面目なるべしまの故に放免せ去向い各隨意せよ。おを亂智が寸志なりとて大刀兵具と始憲儀綱阪等ら。無くる馬さへ牽出させて皆是を給はらせしかば憲儀と綱阪四郎等は恥て其歎びをゆのみ。阿容々々として退きて且城兵に送られて五十子の城を出しぶ。投て往方を定めぬぎ。左にも右にも面伏られば館定正の迎に来あらんとそ。河鯉の城へいそぐ程に其路一里有餘にして大塚の城の兵頭なりける反橋雜記丁田畔四郎等が大塚の城を受合んとそ。殘兵僅に二三百名を領て。河鯉の城より來ぬるに逢ひけり。憲儀是に勢凭きて。然ば先我城を受合て。明日河鯉の城へ參んそ。其里より路を引須其。綱阪四郎も已に心ぶ。憲儀に相俱して大塚の城へいそぐけり。然ば又去歳の冬より。五十子の城に在りける妙真音音曳の單節は。河堀殿と貌姑姫を守護の為に出らるして。那十個の女房等と俱に最正首に

仕る程に東西和睦整ひて既に城遷與の日に做りしかば這朝亂智は河堀殿に見參して和睦の事仔々と城遷與のなさを告まゐらせそ且妙真音音曳の單節は亂智等に先ぶちて。飛もと安房へ返さんとそ心ぶさまの遽しく示外面退出しぶ妙真音音曳の單節は弊去まく欲する程に河堀殿も貌姑姫も他等が日屬正首に仕へけり好意を感て別を惜みなを事大なるぶ。金銀をもて鏤なる亘玳瑁の櫛釵兒などを自許ヨ取出て餞別にそ與へなを妙真音音曳の單節は推辭て敢一箇も受ぎ。奴四人は數なる原は賤婦人也ども里見殿の御恩に大江親兵衛仁が大母姥雪代四郎與保が渾家よ媳婦よと人に知られて東西還しくは行ぬに是賜りて何にせん畏うは行れども是は這儘措せなと異口同様に辭にのみ敢受ぬ意なりければ。河堀殿は困果て後方に行る女房に恁々と吩付て唐織の夾衣の蘭奢の熏ぶをえらはを四襲許出させて廣益にうち載を妙真等四箇の婦女子に

四犬女功成りて備を両夫人に解く
ひくみ
妙もん
ひとよ
ぎょれん
ちこあ
ぎょうぶ
ぎょうぶ
ぎょうぶ

あぐらら薦めて宣やう。汝等の甦直るる東西受らるねば術もなけまど時ハ今四月の下浣ぬ。今日ハ殊更温暖るるハ去歳の儘るる小袖ぶ。汗ハ堪ぎやわらんぎらん。切て是ぶ受てよと言叮寧ハ諭ぶ。妙真音音曳ぶ單節ハ貴人の恁まぶハ理り迫て云々と宣まるぶ猶幾番も固辭んいさぶらふて只ハ俱ハ受戴きて被ぎて歟て退きて各ぶち被て出て來ハ皆席末ハ居並びて其欽びを稟ふぞ。河堀殿ハ本意ぶ。そ徐ハ其方を見久りぶ。他等ハ今ぬるる夾衣を下ふ。今まで着る舊衣を胡意上ハ被れば。河堀殿訝りて先其所以を問ぶ。妙真音音等答ての宣う。這舊衣ハ去歳の冬。栽瀧田の老侯の被けさせぬひる。恩賜の東西で行るかし。今ぬるる夾衣ハ則是時服ぶ。且綺羅やるハ行まどもハるふ。て這新賜を那舊恩ハ思ひ易んやあるて舊衣ぶ。今も猶上ハ被さるハ餘馨を拜て本を忘まぬ。愚意ハぶそ行れと。解まて。さてハとぞりるハ河堀殿ハ興酣て又ハよりもるるりーんぶ妙真音音曳ぶ單節ハ共侶ハ別ぶ告て。既ハ和睦整て。今日ハ城を返さるべ。這故ハ奴毎ハ身の暇を賜りて船出。七安房へ還り行らん王椿の八千歳まで恙なく在さんぶを祈りまるる行るのぶ。舘定正程ぶ還らせぬる。恩愛を轉て御欽びハ入るるんと。査まるるぬ。今ハまも御別ハるる行るるぬ。とハ果て。俱ハ身を起せば。河堀殿も貌姑姫も禁難ぶ云々と詞寡く。労ひるるハ當下侍坐せ。女房ぶ一両個ぶるて鈴鐸の間まぶぞ送りける。有恁ー程ハ小森但二郎高宗木曽三郎季元ハ正兵一千餘名を率て大塚の城ぶるかる來る。大阪下野ハ告るやう。鄙ハ六石憲重の兵頭反橋雜記丁田畔四郎と喚。做を者殘兵二三百名を率て城を受合んぞ來ふけり。開ぶ頭人ハ豫ぶる放免せるべーを受えるる。大石源左衛門憲儀。綱阪四郎相從へる。這故ハ咱等敢饒さぶ。若ぶそ且道く。源左殿ハ當城主大石氏の嫡子ぶるまぶ。去歳ぶる久く擒ハせらまー。刑餘放免の罪人。綱阪四郎ぶ是ハ同ド

這城郭へ源左殿へ返さへわらぎ扇谷殿へ返ーまわらまるるれば何ぞ刑餘の人へ遞與さん和殿両個へ且退きね扇谷殿より遣さまさる反橋丁田へ城を遞與て咱等退りて後へこそ出入い和殿等の隨意るるこ勿論るべけれ目今へ容ぐこーそ城門より内へ饒されば憲儀大く腹を立て好々其等らば我い館の御迎へ河鯉へとそゆくべけれと咳きり反橋雜記が將て來る人馬を幾許り分させ伴當へ乗り馬へ跨りて綱阪四郎と共侶へ开が儘出てゆーべ咱等い李元と相共へ雜記畔四郎へ城を遞與て且從來の隊の兵をのこ俱しかり來つること告まべ又木曽三次季元も其足らぎりを補うて那里の光景を報る折り妙真音音曳る單節へ後堂より俱へ退き來てゆーるの越を大阪へ告知されば亂智はつ今咲て小森生の計ひも妙真音音刀自等の寡欲るるも皆是忠義の真面目へて最愉快とひいべー城遞與の時分も近づねとひつ先雜兵をて浦安

牛助友勝を召よせて且のやう今日城遞與の事果て我们稲村へ退る折這四個の婦女子を同船せば云々と後へ人の議論わらん和殿へ是始より這男婦烈女等を俱へ大功成ー人ぐいぞ今より同船して稲村へ送りるひれ然ば援岡猿八と雜兵二三十名を從せんおろろてよをいそぶせば友勝へ異義もるく高宗李元妙真音音曳る單節へ和睦の訣びを演るどーて退りて准備を做る程へ亂智へ又猿八等へ其事を吹呵るへ船へ夏く柴浦へ維ぎそわり然ば音音等四個の婦女子へ大阪以下の頭人へ別れを告げり身裝て友勝猿八等と俱へ伴の雜兵を將て城を出柴浦より船へ乗る時へ音音へ舵工を召よせて咱等へ大茂林へ所要わり那里へ船を寄よせ舵工等則おろろて漕出て程もるく船を那浦へ歌ーるべ音音へ一個の雜兵をもそ海岩七夫婦を召よせていやう汝等咱を相忘れいせ去歳の十二月八日のつぞよ咱この浦へ流寓りて命終らんとせー折へ汝等の介抱て身へ恙るく思ひの隨へ。

敵を謀りて功成りて這人々と共侶に目今安房へ還る。咱は則里見殿の家臣なり。
姥雪代四郎が老婆音音是と又這同船三個の婦人は犬江親兵衛主の大母
妙真刀自并に我三個の媳婦曳手單節と喚ばる者ぞ汝等耳の底に藏て
後の話柄にせよ。然ども今も旅なれば汝等の報ひに倣ひ東西を一先是を取る
ぞとぞ御問に河堀殿の賜りたる唐織の夾衣を曳き單節が品まぐも三龍袋に出て
與まば妙真も又其衣を那賞祿にとぞ合らせけり。然ばとぞあれ海若七夫婦は憶へ
ざりける那老女の這光景に胆を潰して呆るゝ半晌許夫婦両人に件の衣を受けつ
捧げ戴くとぞ満面都てうち笑れて其狡ぶるのいまくるを音音は急に推禁
めて咱等は去向をいそぐ暇なる日に稲村の城内へ尋來よとまべ〳〵との間に又漕出る順
風の船を禁め難き海若七夫妻共侶に建柴の立盡きまで見送りけり。海若七夫
婦のみ這下に話す。有徒一程に巨田新六郎助友は小幡木工頭東良の獨子なり。

小幡木工太郎東震と俱に二三千の士卒を將て五十子の城に來ぬる程に人馬を多く
城外に留在せ。助友と東震は有名の老兵百名許を從へて徐に城に入りぬ。大阪
下野亂智は鮫内葉四郎を以て是を迎へさせて小森高宗木曽季元千代丸
豊俊小水門堅宗等と俱に助友東震に對面を送の口誼言託て河堀殿と貌
姑姫の恙なきを告ぐ。恁而城遶與の作法あり。開は犬村大学が做す事の趣と
異なるべくもあらざれば言肖て備はせぎ當下大阪下野は城兵の降參せし皆助友に
返しと俱せぎ只從來の士卒三千餘名を三隊に分て其二隊は高宗季元豊俊
堅宗を頭人として三隊の士卒を出し果て助友が赤城外に在せる人馬を徐に繰出
けり。出る者も入る者も齊々整々として混雜せぎ大阪が准備の船は疾く柴浦に
ありて皆那浦に赴けりとの日又扇谷より忍岡の城受合の頭人は白石城登重勝
も入間三三松山三十を副として其隊の士卒一千有餘昨夜半より河鯉の城を

出て忍岡を投て來ふけり。是より先ゐ大山道節忠與い卯東小六明相荒川太郎一郎清英と俱ゐ城遍與の准備あり。使を穂北へ遣して落鮎餘之七有種ゐ和睦の一筆を告知せそ。他ゐ加勢ゐ在陣させる五百の雄兵を皆忍岡へ召よせけり。登時落鮎有種い家僕小才二世智次と郷民一百有餘を將て忍岡の城ゐ來ゐければ道節則明相清英等と共侶ゐ對面して今番和談の成り一事の顛末を穂北并ゐ隣里四人村い有種の所領さるべき義を住る日巨田助友ゐ掟る趣を告知せそ和殿へ咱等と共侶ゐ稲村へ參りゐ人里見殿を後盾ゐせば今より後も安るべ。と諭せば有種然ゝ在下素より其意あり。ゐ且ども東西和睦して和君ら安ゐ安房へ還りゐ。我御黨陷ゐ。影護くぞあらむぎふん先我它眷ゐよく安猪させく後ゐと。稲村へ參るべけれと推辭やば道節理あると合て猶ゐ餘談ゐ及程ゐ白石重勝等ゐ士卒を將て城受合ゐ來ゐければ道節先重勝と入間三三

松山三十と伴當十名許を城ゐ入れて明相清英有種と共侶ゐ三重勝等ゐ對面して。ゐのやう。當城い是ゐ有種ゐ僅ゐ一擘の力をもて攻捕りて會秘言の恥を雪や。呼ゝ然ども今和睦の上い返ーしまゐらまるゐ異義ゆゑ。但穂北五人村へ有種ゐ自ゐの所領ゐ。以て這城と易まく欲まゐの義いいぬる日巨田生ゐ我談ぎる所へ。ゐら且ー欠甚麽ぞや。と問ゐ三重勝答ていふやう。其義い助友ゐ言上ゐそ寡君定正の證文きゐゐ。とゐひつ躰て一通を合出て遍與まを道節い受合まりゐ開き見て有種自ゐの莊園ゐて扇谷殿の賜ふゐゆゑねば這照書い要ゐけれども忍岡の城郭と交易を物ゐとゐ文言を載られれば後々ゐ子孫の為ゐ藏め措くもよからんと忍て躰て有種ゐ渡せば有種も亦閲し。然而重勝ゐ初對面の口誼を云々と舒ゐども既ゐ一受授の事果ーゐば道節い明相清英有種等と俱ゐ忍岡の城を辭去れば扇谷の士卒入替りそ白石重勝入間三三松山三十等と俱ゐ是を守れり。一進一退交情異

人其頃ろ世の賢を。這舉に在ても里見の德を思はざる者なかりける。然れば這時道節が准備の船は両國河に多くあり。且附從ひし兵士。馬淵場九郎が殘黨を武藏相模なる。野武士に與られば。城に留らんずを欲せず。里見の民ども願ひしべ今道節が隊に在る者九千餘名と。成そう。道節は是等を將て両國河原に赴く程に有種も御人を將て水送にそ俱にめぐり。徒る折から登桐山八郎良子。石濱の城を原亂に奪られ遁與て。士卒一千許を將て這河原に退き來つ。道節等と共侶に船出をせまく欲まれば。聞に千葉の老黨原亂に奪へ。曩に行德口の敗軍に駭怕れて主君并に家臣の家眷を將て。河鯉へ脫れ去りしに。夫の日皆衛復と。欽びの聲城に滿けり。然れば良子の道節等に對面して。是等のよしを告げて。准備の船に乘まく。這地の船長五十三太素と。吉い扇谷の封内に居まく欲せず。東の岸へ陸らんとそ。俱に棧を採りに下總へ。ゆたしく留守する。高師等。里見の舵工を相資けて。飛船を遣

まく。准備に尋りまくしく。道節山八郎。明相清英等と共侶に各士卒を分ち乘とる。其船一百許ばかり。有種は其乘果るまで。御人と共侶に。河原の一響時目送りて日暮て穗北へ還りける。話分両頭。這朝稻村の城内に諸敗將に留別の御食饌。中酒の時に及びて。義成義通出て慇懃の詞を盡さる。左右もる程に諸敗將を迎の船。多く洲崎の浦に來ける。第一番に憲房を迎として。山内の家臣建柴浦次弘望老兵十名。雜兵三百餘名。第二に朝良朝寧を迎て。萬戸月十字七宿尻城戸次及大石憲重が兵頭菅荒三布七関口小田等是に從ふ士卒二百餘名。這四個の頭人に去歲の十二月本所の敗軍に各深疵に堪難て。一旦仆まくもゆりしに。辛く命を免れて。河鯉へ來て將息す。其瘡稍痊しに。上に見えたる三三三十八人間九郎松山五六の子弟ゆゑもりける。間話休題。第三番自亂を迎の士卒一百五六十名。原亂人這里に付まくに。亂に等に參らざる。第

四番に為景を迎の頭人宇佐美三郎職政梶原后平二景澄士卒三百餘名第
五番に義同義武を迎の頭人小磯真砂士卒二百餘名第六番に稲戸由充を
迎の頭人妻有復六荻野井三郎士卒二百餘名と只成氏の迎の伴當のミヨスらぞ
望見一郎科草七郎士卒五十餘名と船一艘のうち乗りて河鯉の城より來り許
我が路遠けれども那里の士卒いまだ來着せざるべし當下里見の有司港口の小吏
出迎へて其頭人等と士卒各二三十名を引て稲村の城に來ひけり其他は皆船に在り
せて乱雑を防ぐとのふ大塚信濃犬江親兵衛犬川荘介犬田豊後犬飼現八兵
衛等奉りて客の間にて酒飯の款待す職政景澄及弘望等は其身并に藩内
外科の為に犬江が神薬の奇效にて必死の刀瘡の愈る歎びを演ずるとも然が憲房
朝良以下の敗將齊藤盛實に至るまで迎の士卒を待不娛て他等が御食饌果る
を躰て各急に別を告げて立去らまく欲せ一ぞ義成則諸敗將に良馬各一疋を

奉出物として政木孝嗣満呂里時等に是を港口まで送らしむ惟稲戸津
衛由充のミ帰帆をいそぐを先衆人を出し果て徐に辭し去まくする時義成主
犬川荘介犬田豊後等に向ひて稲戸介は這二犬士に舊恩あり他等は既に
報恩の志を遂ぬ空ぬまどひまで嘗るべくもあらぬ越後は塩に乏き地方と我
今より義任悔順に代りて年毎に行德塩一千苞を賜るべし必辭ぶべからずとのたまへば
由充は額に汗して開ハ思ひがけもなきいとぞ饒させのひねと推辭ぶれども何ぞ聞れん是
よりの後年毎に其餽送物のいとぞ恁而由充は妻有荻野井等を從へて犬川犬
田に送まそ迎の船にうち乗りて風く三浦へうち渡して陸路を越後へ還りけり只由
充のミならず諸敗將の迎の船も皆三浦より出て來て俱に三浦へ歸着せり益安
房の洲崎より相模なる三浦まで海上僅に六里なれば其近きに由まる之開が中に
成氏のミ迎の伴當ヨスらぬに憲房朝良の下風に立て相模へ渡さんとの朽惜けれ

立も得去らで在り程義成又對面してみづから是を慰ゆる其語次御所成氏は
春王安王君の令弟なれとも我大八父里見季基と然もなほ舊縁あるゆゑ
是までの力戰い右も見左も見既に恁親しう交り奉るべ舊交を結ばまく欲き
今はあも御領の郡縣ヨスクらぎを使ぬ上總なる御弓の莊を馬の飼料のまゝ
とのいまだ成氏慙愧に堪ず推禁ひて公合るやう開い辱くいへども我愚にして順逆の理に
暗く惑ふて和殿を伐まく せしを後悔瞞を啟るのみにあらず其莊園を受んやこれ
より願しくは歸郷の憶念箭の如し些の伴當を代賃なる當國より上總を歴て陸
路を許我へ還るべし今の情願は是のみと又他事もなく請求むれば義成なほ異
義なく尊公其義はいよ易う御舊縁もいへる犬塚信濃成孝をして君を送らせ
奉りて今宵は猶又逗留めれ明日を去るべうゆゑと留ひをを成氏は快く悅ぎ頭を
掉りて最自由はいへども今より徑に去まく欲き諸敗將は咸返さまとりに我ら猶

淹留せば後の外聞も影護う倘送りの士卒急に整はゞ我伴當をのみ為て
いなんいそぐと性急なる需めは義成禁難て去らんべ御意に任せんとそ退いて
犬塚信濃に事恁々と吩咐ひ成孝又蚤くあるはそ其士卒を整ふに素より
武備ふる家風なれば一時ならぬ士卒の支度成りぬとて成氏是に
勢凭て成孝を労ひて迎に來る科草七郎望見一郎等を急しう里見の諸
臣に別を告て遽しく立出る程に犬塚信濃成孝は行裝を整て望見一郎科
草七郎等と俱に内玄関に候て在り許我の伴當五十名里見の士卒二百名
義成主又命じて大飼現八と田稅力助とを其夜の歌舎まで送り行ける是
等の伴當も二三十名なるべ成氏既に立出る時義通君は杉倉直元等を從
へて玄関まで是を送りぬ這逆旅の准備は成氏は轎子にて成孝信道逸友
等は各騎馬にて從ふ弓箭鉄砲鎗棒柳箱を報る者數ならぬ恁て稲村の

城の後門より。拾出し齊々と上總路を投て俱に行ける。然ハ這急事ゆゑ。鄙の義成の云々とありける御弓の莊の事ハ成氏の辭ひし隨ゆて其説ハこゝ。是より後里見義堯の時ゆ至りて。許我より足利義明を招きよせて上總の御弓ゆ在ゆて北條氏と力戰の後有ゆ者ハ。こゝ。時の人義明を御弓の御所とぞ稱ける。是其緣故べ。間話不題却説成氏ハ自他の伴當ゆ。俱せられて。行程ゆ這日ハ三四里ゆ。既ゆ夕陽ゆ及びしゝ。犬塚犬飼ゆ相計て。路傍ゆ寺院を宿とも。現八力助ら。こゝ。這里ゆて又成氏ゆ謁して辭し去ゆ。時成氏是を労ゝて。義成の好意を謝せら。現八ゆ。其身の伴當を將て。逸時と共ゆ路をいそぐ。其曉天ゆ稲村へ歸りけ。然ハ又許我より來ぬる成氏を迎の船三四艘ゆ頭人下河邊二郎行正間中大内藏直充と。士卒二百餘名ゆ乘りて。二十一日の下晡ゆ洲崎の浦へ來着せり。這時ゆ順風ゆ。ゆゑんべ遅參。這時ゆ及びしゝ。ゆゑんども成氏ハ陸地を許我へ。ゆゑんとて里見の士卒ゆ送られて。稲村の城を立去ゆ。ゆゑんぬと受えしゝ。行正直充駭怕まで。ゆゑんぬ。走奉るとも及ぶべからず。疾船を漕復て。葛飾真間の渡りゆて。待奉るゆゑ。こゝ。ゆゑんぬ。則湊吏人ゆ就て。來由を稲村の城へ告訴ゆ。次の日徐ゆ追風を候て。其船各帆を抗て。下總を投て走らせけり。ゆゑん程ゆ成氏ハ大塚信濃ゆ送られて。三四日の旅宿を。こゝ。安房より上總路を歷て下總へ。こゝ。真間の里ゆ來ゆける時。既ゆ中晡ゆ及びて。驟雨連りゆ降沃げば。大塚信濃計ひて。成氏の轎子を國府臺の城へ早入ゆさせて。則ち歌舍とを。當城の番士の頭人真間井樅二郎秋季。継橋綿四郎喬梁等ハ。豫てゆのゆゑを得ゆゑんべ。敢慌てゆ。則振照弘教二潤鷲手古内を。是を迎ゆさせて。城の客の間ゆ請待せ。須々利檀五郎二四的奇舍五郎等も這城内ゆ在り。俱ゆ這応接ゆ預りけ。是より先ゆ成氏を迎の頭人下河邊行正真中直充ハ。其船昨朝暴河ゆ泝り來て。國府臺の城下ゆ歌りて在り。昨日使をぞ當城の番士等ゆ成氏這

地を過らせるべく知せるべしとのいせーらべ。番士等則あくる汐で今這告めるふよう行置直元い士卒五六十名を引て。船より出て城ゐ來ゐ望見一郎科草七郎等ゐ對面セ。本月二十一日ゐい逆風ゐて船找まねい。憶いぎ遅参ゐ致るゐ且昨早ゐ昌泰河まで久う來て御歸路を俟奉うーそ。其顛末を申え上ーゐ成氏ゆて其身ゐ性急ゐ。他ゐを俟ずうー行ゐまべ。敢其遅参を咎めぎ然い我い翌の朝開ゐ船ゐて許我選るべ。其准備をせよとあうーゐべ行正直元あゐ汐で船ゐる士卒ゐ下知を傳へて。那身ゐ臺の城内ゐ在り。船まで伴をせんとそん然い秋季喬泰等へ猛可ゐ二三百個の歌容あり。一要時い混雑ゐぬまぎ。素より准備ゐ匿ーゐねべ親疎の歌処を點配して上下の夕餐朝餉の儲疎ゐらぎ既ゐ七日の暮ーゐ成氏い浴ータ餐果て臥房ゐ隣ゐる編室ゐ在り望見一郎科草七郎の〻付りて最徒然ゐ見えーゐ犬塚信濃成孝参りて四表八表の話説ゐぎ七是を慰めまゐらせける。折ゐ驟雨の降ら降

窓を折り夜風の音も平らゐぬ身い草枕旅ゐ椎の葉ゐ裝る飯ゐて人の情の浅ゐらぬを。浅くい思いぬ成氏も今昔のゐを思ひ出て閑談ゐよ〻蕭然之登時戌孝い謹で成氏ゐ稟まやう。曩ゐ御供ゐ入ま奉りー。村雨丸の一刀いゐで君ゐ進らせを。愚い父大塚番作の末期の遺訓を果さぎゐと思ひーのゐゆて稲村ゐてい御同居の敗將達ゐ憚りあれい稟ー出る便宜もゐく今宵涯りの御別ゐ逢りてい心慌く愚意の及ぶ呼をもそうち驚ー奉る不敬を饒さを〻ゐーとゐいい後方ゐ措うーー刀櫃をゐ取り出を件の大刀を壜の儘ゐ際ゐ推立て。度〻ゐを徑て稟まやう。いでもゐ這御大刀い則君の御先考。持氏朝臣の御紀ゐて春王安王君の御遺物ゐれいで君ゐ献せよと教えゐる亡父の志を今果ゐる臣等ゐ欣び何事ゐ是ゐ勝べゐ遽莫先途の失ゐれい真の村雨丸欣ゐぎる欣。御面前ゐ試てん饒さを〻とゐいつも开ゐ儘些退きて壜の紋解き執出を件の

ろり氏
あらみ一郎
あらみ一郎

犬つ丸
孝王孝を
全ふして
遺訓を果し

刀を引抜べ三尺の氷夏猶寒き稀世の名刀。燈燭忽地光を増て四下も赫灸可る。其柄を佶と握持て輪々丁とうち振る程ゐ怪むべし又光り颯と濆る水氣あり。露欽霤欽潑々と這席上ゐ降決ぐを成氏主僕ハ憶ぎも。袖を急ゐうち拂へべ燈燭反て滅んを折ゐ又簷上を過る驟雨の音凄ゞく風さ烈き雷霆の礮々と鳴亘る。四月下旬の闇き夜ゐ窓の隙洩る電光走るや雲の行住ひそれとなく見えねども。彼と此と一時の感應又ゐべくもわらざれば成氏憶ぎ聲を被てやとや信濃疑ハ解ゐ。先其刄を斂めまやと詞急迫しく制ゐべ成孝ハ阿と応て准備の帛紗を懷より。拶り出ゐ濡ゐ刄を推拭ゐ鞘ゐ斂ゑ。膝を找ゑ左右のゐゐ棒ゑ卒ゑ呈まゐを成氏ハ左右ゐ受ぎやよや義士志ハ然ゐるれども我一介の微恩ゐるれゐゐゐゐ其名刀を汚受んや願ゐハ和郎の家ゐ傳へて子孫の寶貨ゐせよゐゐと辭ゐ成孝ハ御諾ゐいへども。臣等ハ家ゐ傳へゐ。桐一文字の短刀あり。近日又畢

殿ゐ賜りゐ名刀もハへ。自餘の刀劍ハ欲ゐ。這村雨ハ御家の重寶。他人の貨ゐ做ゐべゐ。この故ゐ近作番作。父子二世の忠心を臣等ゐ迫りて果せゐ。辭ゐ是ゐ然ゐ我衍ぬゐ。応ゐ大刀を受食ゐ主客の胸も上天も。齊け雷の音絶て。檐の溜水猶遺る。殘滴のまゐ。成孝ハ當下成氏ハ感涙坐ゐ唇ひまゐゐ村雨の大刀を戮番欽ゐ。戴ゐ傷ゐ閣て又成孝ゐ謝ゐるゐ。信濃ハ和郎の至孝頗義を思へ。ゐゐ恥ゐ我非德を爭何へせん。今這奇貨を恵れゐ旅ゐ。わゐ酬ん東西ゐ。其義を一筆示ゐ。佶坐せ。望見一郎ゐ逆旅硯を執出ゐ。墨を揭ゐ。亳を染ゐ。科草七郎ゐ。指燭を秉て照ゐ程ゐ成氏ハ坐右ゐ。便面をうち啓ゐ。管を握ゐ苦吟ゐ。戮析欽寫着ゐ。讀見て含咲ゐ。拙ゐ。是を見ゐ。膂を伸ゐ。開ゐ隨ゐ授る便面を成孝ハ遽ゐ膝を找ゐ受戴ゐ。却燈燭の

下ふ身をよそ晴を定めそ是を見まゐ正ふ是成氏の自詠の謌めそ。
まくらの許我の旅人ひら雨のうちつゝ来てぬらを袖る又其次ふ心をあり
そりふあるを人のまあとゝ雲るゝでひとふりちるむら雨の大刀と讀れゝ成孝慶ち
嗟じて深く感じて且のふやう恐ふがら當意即妙是をこそ子孫ふ傳へて家の宝ふ仕
らゐ。一昌三歎餘興自禁ぜぎのと無礼ゐいへども御返しを仕るべうもやとゝくゐ成氏
そを是よりんゐんのふぞやゝくと問れて成孝阿と答へて聲朗ふ詠まゝく。
今ぞかを身のゐを三衣ひら雨ふ親の送せし言の葉の露両三番吟ずる程ふ。
成氏耳を敬て感ゝく憶を膝拍鳴して通愛ゐ實詠達意求ぎしてあのづら妙
願ふい是へ寫着てよを請ゝ刀の嚢を合ゝと裏をゝへて差寄ゝて成孝ふ敢
せぎ。其美ふ許させゐひねと固辭ども何でふ聴ゐ望見科草硯を舊ゐて卒と
ぐゝふ促せゐ成孝竟ふ脱ゝ路ゐゝ裏の黄光絹へ件の歌を書寫てまゐら

まゐ成氏ふ其墨の乾くを待て大刀を嚢ふ斂る程ふ短夜既ふ深初て三更の鐘聲
ふえけゝ。登時大塚成孝ふ件の便面を推疊て懐ふ梵と夾ゐて又成氏ふ禀ゐ既ふ
這年来の志ふ仕りゐ人各其君の爲ふ。許我ふ隣國へとゝゐども今ゝゝ後ふ君の爲ふ
寸忠ゐも致まゐゝぎ願ふい御身を愛ゝのひね。夜も深てふへゐ。枕ふ就せゐへまやとゝゐ
成氏嗟嘆ていゝゝ所寔ふ尓ゝ明日こそ別ふゐふけまとゝふ又望見一郎科草七
郎も共侶ふ成孝ふうち向ひて辭別の詞を盡しけゝ抑這壯佼ゐふ曩ふ大江ゐ神藥
めて死を起されゝ恩美ゐふ今示大塚ゐ忠孝の志を見ゐゝゐゝ。ゝゝく敬服の思ひ
ゐゝ。悄地ふ別を惜みける恁而次の日ふ天好晴ゝゐ成氏ふ辰俾時候ふ國府臺の
城を立出て暴河ふ造りて船ふ乗る程ふ下河邊二郎真中大内藏望見科草
首ゐ。許我ふ伴當百十數名大塚信濃も士卒を將て其馬頭上まで送りける。
休題再説。往る二十一日ふ政木大全満呂復五郎ゐふ諸敗將ふ選る船を洲崎の

港口に送り果て犬川荘介犬田豊後等を倶に稲村の城に退る程に犬村大学堀内雑兵太郎田税戸賀九郎芦屋八郎等が一隊の士卒三百餘名を引て新井より来ぬる船十艘許洲崎の港口に果のけり其後又妙真音音曳の軍節に浦安牛助と猿岡猿八等の士卒三十餘名同船して是も洲崎へ漕ぎ来る其詰朝大阪下野に士卒三四千名船七八十艘のうち乗りて小森但一郎木曽三次千代九圖書助小水門目鮫内葉四郎等と倶に五十子より帰帆の途えあり三の日又大山道節常刀登桐山八郎等二隊の士卒一萬餘名印東小六荒川太郎一郎等と倶に一百餘箇の船に乗走らせて同港口に帰着せり皆稲村の城に参集ひしめく屋の上の屋を重ねて人ヨヽく七熱鬧のよびやうもわくぎ然べ犬江親兵衛に出て祖母妙真を港口に迎へ姥雪代四郎に十條力二尺八を携て出て音音曳の軍節に夙く這童弟兄を見せまく欲を約莫這祖孫母子の功をもて恙なく再會に老を忘れ鹿杖のつくるを書

送の長談に短き筆の細寫もぐくもわくぎ看官是を査まぐ。低而其次の日に犬坂犬村犬山等を目のそ武蔵相模に久く在城せ諸頭人に皆義成主の見参を忠戦軍功を賞せらる。妙真音音曳の軍節に別に又這事あり義成の夫人吾嬬前に拜見して東西ヨヽく賜りける這餘の士卒も咸恩命を稟ざる者なく都て休暇の命ありて各安堵の思ひを做をり是より又五七日を經て犬塚信濃に下總葛飾の暴河の邊に成氏主を送り果て士卒二百餘名を率て稲村の城へかり来のけり低てぞ東西の擾乱餘波ぐく治りて房總平安なりけるべ良賤士民相賀して置酒して千歳を唱ざるはなし。然程に瀧田の義實老侯に義成義通其身まで思ひ受領の欲ひに堪ぎ我老齢れを是を朝恩武恩を稟奉りぐら其両御使に對面せで居るべぐ這生緒を貪るべぐに一日勅使代秋篠廣當と諚使熊谷直親を瀧田の城へ請待して

勸盃饗食饌の欵待大かたならざりしハ八犬士皆参仕へて其席にぞ預りける。是より後廣當直親ハ這地に所要ありけれども東西の會盟を見果ずして。歸洛せんハさすがにて直親ハ水路より鎌倉及五十子に赴きて其義を專催促を廣當ハ猶稻村の城内に在り這故に東西の使者往來して會盟の日を定めらる唐山戰國の時諸侯其國境に出て倶に血を歃りて誓を做せり。されども武藏相模と安房上總ハ海を隔たれバ會まるべき所なし因て意ふに相模の三浦と安房の洲崎ハ海上僅に六里に過ぎずあるをもて天よく晴たる日に相臨めバ浦の苫家も濱の雛松も瞭然として好見えざる者なし然バ會盟の日に定正顯定ハ三浦の濱に出べし又義成ハ洲崎の浦に出て迥に相臨む時東西の使者快船にうち乗りて且往來して誓言書献酬の義を行ふとなれ則會盟紛れあるべからずとの熊谷直親が豫より秋篠廣當と商量して相定る所也是より東西其

准備あり時に六月朔ハ黴雨新に霽て薄暑炎熱を増折なりしに其日ハ黄道上吉にて且海邊納涼の爲にも宜しければとて豫て卜定せられけり介程に扇谷定正山内顯定ハ三浦の濱邊に一座數間の假屋を架させて當日辰牌より朝服にて出坐せり這日來會の諸侯ハ千葉介自胤三浦陸奥守義同其子㒵三郎義武上杉五郎憲房扇谷五郎丸朝良式部少輔朝寧并に大石石見守憲重其子源左衞門尉憲儀齋藤左兵衞佐高實其子兵衞太郎盛實長尾太郎爲景白石城介重勝巨田新六郎助友小幡木工太郎東震原播磨介胤久等是也這餘足利左兵衞督成氏の名代下河邊莊司行包長尾判官景春の名代直江莊司兼光來會す成氏ハ先度に懲より又景春ハ獨立の志あれバ各病着に假托て老黨をもて名代とまたの他服の大刀自ハ女流なりけれバ會盟に與らず且越路ハ遠ければ稻戸津衞由充も辭して來會せざるこそまの日諸家の從臣士卒に至り

て枚舉ゐ遑あらず。假屋の三面ゐ紫の幔幕ゐ白く竹ゐ群雀の花號染做
しるを掛匝らして。猩緋の氈をもて席とし其左右ゐ數鎗五十條と架亘して小幡
馬纏あり。捍棒を執る走卒二百名。汀渚の在りて敬衛も其小頭人各麻社衫を
卬く結ひて十手を執る者四五名在り前濱ゐ准備の快船二艘を維ぎそ其船毎ゐ
究竟なる。舵工八九名ぞ佇りける。然ば又安房の洲崎の浦ゐ去歳の初冬造らせる
望海の臺ゐ長べ別ゐ假家を儲るゐ及ぎ只中黑の花號ある幕を張亘しるのみ
ゐそ。外物を飾るなき。恁而這朝里見左少將義成右衛門佐義通俱ゐ朝衣朝
冠ゐ件の臺ゐ着坐在り。両家老八犬士諸兵頭有司近習ゐ至るまで皆礼服の
袖を連ねて相從ふ者尠らず。其姓名ハ省て具ゐせず。快船の准備ゐとも自他異
なるべくもあらず。三浦の假家ゐ。諏使熊谷直親あり。洲崎の臺ゐ勅使代秋
篠廣當あり。俱ゐ這會盟を檢まるこけり。ゐの日ハ朝より天晴れば這里より

那里より千里鏡を用ひぎして。頭人寸馬瞭焉なり。恁而已の左側ゐ三浦の濱
ゐそ。暗號の烽火を賜へらば。洲崎ゐも亦烽火をもて答とし。登時三浦の方より巨
田新六郎助友麻の肩衣長袴ゐそ。黄金裝の大刀を跨ける項ゐハ拵言書を藏め
さる細小櫪を掛て。船の中英ゐうち兼れば。從ふ士卒五六名。舵工八名。艪も八挺艪指
子揃へて漕出ず。次ゐ快船又一艘小幡木工太郎東震ハ這會盟の贄使ゐて其礼
服ハ助友ゐ異ならず。二樽三荷を相載て。從ふ士卒八九名。ゐも八挺艪ゐそ漕せり。有
恁一程ゐ洲崎の浦より漕出ず二艘の快船あり。其一船ハ別人なりぞ。拵言書の正使
大阪下野亂智之次郎。船ハ贄使政木大全孝嗣。無ゐ。各礼服從者贄物
上ゐ寫ゐ。相似たれば。今ゐ名状まべらず。然ば東西四艘の快船ハ波上三里の程ゐそ。
惴なくも遭際ふ。元自疾を飛鳥ゐ異ならねば。助友東震も亂智孝嗣も迭ゐ
目礼をぬるのみ。一曇間ゐ行過けり。約莫船の迅速なるを。唐山ゐて快船とふ。

快く走るべうべー國俗の所云鯨船又今俗の云推送り船の類ゆゑ今這四國の船の迅速うを思ふべー間話休題小程ゐ巨田助友い其船又蛸く洲崎ゐ届りて伴當を將て浦邊ゐ登るべ敬言固の走卒両三名安内して臺下ゐ造らるひ助友則袴の話緒を解捨て拵言書を雙のゐ捧げて階を登るべ大村大学立迹て引て義成主ゐ見るむ助友先義成主を拜るれべ義成急ゐ礼を返して其来意を問まくを當下助友い東西和睦會盟の一義を演て齎しる拵言書を呈閲と則是持資入道道灌ゐ糟屋の舘ゐ在りて定正顕定の為ゐ綴る所之義成是を大村大学ゐ讀まるゐ拵言ハ則五ヶ條ゐて善政を施して農を萬ゐ天子將軍ゐ調貢を懈るゐなく隣國ゐ交りて果を境を犯さるゐく賞罰を正くして賢を求め佞を遠ざけ嫡子を廢て庶子を立るとゐられ妾を妻として妻ゐ做さとゐられ凶年ゐハ隣國相資て其足らざるを補ひ不忠不義の行ひ是ゐ戒めゐとゐ其要領を載られべ義成則姓名の下ゐ花押を寫して指を刺て血を濺ぎ是を助友ゐ遞與て且其使節を労ひて大刀一口を授け息助友謝して退ぞけべ小幡東震の船既ゐ造て贄物を進呈と里見の青侍等是を受合ひるゐ白酒一樽黒酒一樽塩鴈三折樋生鯛二折樋乾魚二折樋是を東震則其目録を執て階を登る時犬江親兵衛立迎て引て義成主ゐ其義を告るべ東震ハ目録を呈閲して東西會盟のる果ゐる両管領の欺ひを傳達を義成是を謝して又東震ゐ大刀一口を合せけり柳巨田助友の心術人柄ハ人の知る所之這小幡東震の船既ゐ造て贄物を忠義廉恥ゐ薄ゐくねべ恁る時ゐも阿容ぞ後ぞ扇谷の内人ゐ只這俊傑三名ゐて先度の恥を雪めうとて人皆是を誉ゐけり然べ這時犬阪亂智政孝嗣が三浦の假家へ造りて定正顕定ゐ會盟の拵言書を呈閲ゐるゐ贄物の二樽三荷を進呈せーゐ前ゐ寫ー趣と然だり差別ゐけれべ備ゐせぞ其拵言書ハ大村大学ゐ

理義を詳ふ
孝嗣
故主を辯ふ
伴ひろうう
ありべ
のりかど

綴る所。是も又五个條ゆゑ自他示し合さねども道理を知る者の藻まる文へ宛
符節を合せる如く好相似る女人一奇ゆゑ定正是を白石重勝に讀せて頭定并に
來會の諸侯と俱に听けり。听果て又定正頭定より下長尾景春の名代直江兼
続に至るまで連署姓名の下に各花押を寫して又各各指を刺血を添けて定正合せて
胤智に遞與まを受載きて得と見て。謝と懐にして罷出る時定正則大刀一口を牽
出物とて。次に政木孝嗣入り登り來て又君命を演て贄物の目録を呈
さるべ定正蓋て答る所を知らぎ。頭定代りて。謝と示大刀一口を合せ進せけり這時
犬阪下野へ既に伴の士卒を招て。船に無りてゆく去りぬ孝嗣も推續きて。船に無ち
まくまる程に定正へ大石憲儀をりて急に是を赴ちめて且のいまるやう。前へ
我徳て罪なき汝を死地に置り其冤枉の分明なるよへ往る日朝良朝寧が
稲村よりろへり來て詳に告しべ。只後悔の外なぎ。汝尚三世の恩義を忘て

とおく忠孝の心今も程らぎへ立ゝり來て我に仕へよ然ば舊領に十倍して
美録を食せまく欲む。這義誰何と挑きけり孝嗣是をうちゆて詞徐に答る
やう。御諚義りひぬ臣等も又是人之。其根を忘まそ杪に憑んや。おゝまことも
臣が君を棄るふわらぎ。君が臣を殺せるゝ夫覆水に盆に復らぎ。吐言に駟も
及ぶべらぎの折靈狐の冥助なくに今のうふして君に見参せん。廷尉憲儀我
為に謝せよ。君が悪ませるひしる。河鯉佐太郎に既に死りぬ今い義に便り恩に
縁る。里見の忠臣政木大全が栄利の為に哄誘さまて不義の奴にうべくもいつぎ。
暇禀さと雨も強袖を拂ひつ伴當をひきゝ立て又快船に無てぞ洲崎へ
還りける憲儀へ興醒に只得孝嗣の答へをそ返命まをけまぐ定正听て眼を
瞬り口を鉗まる鼻息のみ又のふよりもるりけり。然ばその日東西の使者の快船水路
六里を往還ちぬる程洲崎の臺に立て當所洲崎明神の神人等。舞樂を奏も。

文樂堂藏

大塚信濃犬山道節。俱に扇子を開きて立て舞ふに。よく曲節に稱ひて人咸驚き見て。何ぞの日に学びしるやとそ。感ぜざる者なかりける。然べ又三浦の濱なる假家に。鎌倉より招きよせる。能樂人等。祝言の能樂を謠頌し。其次鼓の音迭に浦風に勾引されて最も幽にやさしけり。既にして助友東震に。拙言書を捧て三浦に久しく來り。又亂智孝嗣に連歌の拙言書と定正頭定の謝書を受合りて。洲崎の臺に。かへり來て。俱に友命を致す程に夕陽西に斜に登時。義成義通八犬士を招て臺を下りて。俱に波濤盡處に立。程定正頭定も來會の大小名を招て。俱に濱邊に立出て東西一望時。眺望て各揖讓して退散す。是ぞ會盟果にけり。余程に武藏相模。安房上總なる。漁戸等。よの次の日より。江海の境を論ぜず。自他ともに交りて。網を下さに。俱に海幸にあるりけるとぞ。いよ〳〵生活の便着をなる。又武藏下總の境なる。両國河及墨田河に。浮橋を架渡して。良賤往還の便ときたりて。両國の士民相親しみ。胡越も肝胆に做りにけり。按ずるに夫木集に。康正の年間墨田河に浮橋架せを詠る歌あり。其歌。

もゝ世ゝ河むかしに成るぞ今ぞ身をうき橋の

とあり。世ゝ河は康正より文明まで。遠くうごき。看官作者の用意を知るべし。本傳豊後の像賛に。墨田河まゝこゝにして渡りやをうゐぬ世をうき橋に昔ありけり。と詠りしに。右の歌を取るに。畢竟扇谷山内の両管領。里見氏と和睦會盟して。後の話説甚麼ぞや。開に又下回に解分るを聽ねゝ。

作者云。前に如く本輯百七十七回以下に前板發兒の時。尚順稿のまゝ。看官に。厚く結局までの趣を知せまゐらして。其題目を總目録中に附載て。今編次るに及び。豫思ひしよりは長くなるゝに。其題目を增改ん。さまざまにして。一回を上下に分ち。或は三折して上中下の三卷にたる者是。是故に四十六の卷端に附録目を出して。宜く是と併見るべし

南總里見八犬傳第九輯巻之四十九終

本傳刊行の書肆文溪堂叢書を今板結局編第百七十七回以下の題目の前板の出さるに付て。文ヨヌくるとて。附録目數回を新に題して全部一百零六巻四外剞筆まで一百九十一回に成べしと作者の自注に見えたる如く。余るに這大部の書に總目録なくば四方の君子披閲の時毎に搜索に便りなるべく。且遺忘に備るに足ざるべければ今番又翁に乞て首巻一巻を刊附せ首巻に所云總序全部總目録八犬士畧傳姓氏目録等是也。這巻あるときは則看官時に臨みて某の事は某の巻某の回にありとのかたを知るに速にして。利便是より捷なし。況全傳中に善悪賢不肖の人物其姓名を漏さず。悉皆記憶せざるを姓氏目録に据時は。搜索の暇を費さずして。當に掌を指が如くなるべし。言に半頁の餘紙あるとも。賜顧億兆の君子に這故由を告奉るなん。

右八犬傳第九輯五十三の巻の下まで今度出版全部に相成に依之四十七の巻と致分巻都合十巻の所彫刻出来の五冊四十九まぐ丑冬々より賣出し置五十の巻より下五冊も推續に當寅春中無遅滞出板仕る猶追々に出来成に続て不に但し前書に記し首巻總目録一巻差加えて六五冊ゝの都合不宜ゆる異日別に致彫刻て入巻に右十冊両度に賣出しゆる出版に被為仕

敬白

天保十三年壬寅春正月吉日

大阪心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛

江戸小傳馬町三丁目　丁子屋平兵衛板